

平成27(2015)年度

## 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

跡 跡 墳 踏 群 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏  
跡 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏  
正 戊 1 在 谷 谷 在 遺 遺 合 遺 遺 遺 遺  
掩 田 所 ノ ノ 所 在 遺 遺 合 遺 遺 遺 遺  
亥 田 宮 宮 中 見 里 本 清 古 谷 在 津 山 遺 遺  
巳 住 住 海 坂 原 光 手 家 所 坂 吉 海 上 寺  
未 大 良 良 高 高 内 桂 秋 下 上 日 山 古 大 金 天 岩 古 青  
未 大 良 良 高 高 内 桂 秋 下 上 日 山 古 大 金 天 岩 古 青

## 序

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成24年度から平成26年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査の記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。中でも「鳥取西道路」建設に伴って行われた発掘調査では多くの遺跡から膨大な量の遺物が出土し、地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

本報告書が私たち郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成28年3月

鳥取市教育委員会

教育長 木下法広

## 例　　言

1. 本書は平成24年度から26年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
2. 平成24年度に実施した調査は高住宮ノ谷古墳群、高住宮ノ谷遺跡、内海中所在遺跡、桂見遺跡である。
3. 平成25年度に実施した調査は乙亥正屋敷廻遺跡、大柄遺跡、良田1号墳、良田所在遺跡、古海遺跡、岩吉遺跡である。
4. 平成26年度に実施した調査は乙亥正屋敷廻遺跡、大柄遺跡、秋里遺跡、下坂本清合遺跡、上原古墳群、日光長谷遺跡、山手古墳群、古郡家所在遺跡、大井所在遺跡、天神山遺跡、青谷上寺地遺跡、金沢坂津遺跡である。
5. 内海中所在遺跡、乙亥正屋敷廻遺跡、高住宮ノ谷古墳群、高住宮ノ谷遺跡、下坂本清合遺跡のトレンチ番号は平成24年度から通し番号を使用している。山手古墳群のトレンチ番号は平成25年度から通し番号を使用している。
6. 第3章 自然科学分析は(株)加速器分析研究所に委託した。
7. 本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
8. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
9. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　鳥取市教育委員会

事務局　鳥取市教育委員会事務局文化財課

調査担当　加川 崇 山田真宏 前田 均 野崎欽五 谷口恭子 谷岡陽一 神谷伊鈴

9. 発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言並びにご協力をいただいた。明記して深謝いたします。(敬称略、順不同)

木下哲夫 白石 純 辻誠一郎 中原 計 鳥取県教育委員会事務局文化財課

(公財)鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

# 本文目次

序  
例言

第1章 発掘調査の経緯と経過 .....	1
第2章 調査の結果 .....	3
第1節 乙亥正屋敷廻遺跡 .....	3
第2節 大柄遺跡 .....	12
第3節 良田1号墳 .....	26
第4節 良田所在遺跡 .....	28
第5節 高住宮ノ谷古墳群 .....	31
第6節 高住宮ノ谷遺跡 .....	35
第7節 内海中所在遺跡 .....	41
第8節 桂見遺跡 .....	43
第9節 秋里遺跡 .....	44
第10節 下坂本清合遺跡 .....	53
第11節 上原古墳群 .....	61
第12節 日光長谷遺跡 .....	64
第13節 山手古墳群 .....	74
第14節 古郡家所在遺跡 .....	79
第15節 大井所在遺跡 .....	81
第16節 金沢坂津遺跡 .....	83
第17節 天神山遺跡 .....	85
第18節 岩吉遺跡 .....	87
第19節 古海遺跡 .....	88
第20節 青谷上寺地遺跡 .....	90
第3章 自然科学分析 .....	92

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図	2
第2図	乙亥正屋敷廻遺跡 調査トレンチ位置図	3
第3図	乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ実測図	4
第4図	乙亥正屋敷廻遺跡 第5トレンチ実測図	7
第5図	乙亥正屋敷廻遺跡 第6トレンチ実測図	7
第6図	乙亥正屋敷廻遺跡 第7トレンチ実測図	8
第7図	乙亥正屋敷廻遺跡 出土遺物実測図(1)	9
第8図	乙亥正屋敷廻遺跡 出土遺物実測図(2)	10
第9図	乙亥正屋敷廻遺跡 第8トレンチ実測図	11
第10図	乙亥正屋敷廻遺跡 第9トレンチ実測図	12
第11図	乙亥正屋敷廻遺跡 第10トレンチ実測図	12
第12図	大柄遺跡 調査トレンチ位置図	13
第13図	大柄遺跡 第1トレンチ実測図	14
第14図	大柄遺跡 第2トレンチ実測図	15
第15図	大柄遺跡 第3トレンチ実測図	16
第16図	大柄遺跡 第4トレンチ実測図	17
第17図	大柄遺跡 第5トレンチ実測図	18
第18図	大柄遺跡 第5トレンチSP 01実測図	18
第19図	大柄遺跡 第6トレンチ実測図	19
第20図	大柄遺跡 第7トレンチ実測図	20
第21図	大柄遺跡 第8トレンチ実測図	21
第22図	大柄遺跡 第9トレンチ実測図	22
第23図	大柄遺跡 第10トレンチ実測図	23・24
第24図	大柄遺跡 出土遺物実測図	25
第25図	良田1号墳 調査トレンチ位置図	26
第26図	良田1号墳 第1トレンチ実測図	27
第27図	良田1号墳 出土遺物実測図	27
第28図	良田所在遺跡 調査トレンチ位置図	28
第29図	良田所在遺跡 第1トレンチ実測図	29
第30図	良田所在遺跡 第2トレンチ実測図	30
第31図	良田所在遺跡 第3トレンチ実測図	31
第32図	高住宮ノ谷古墳群 調査トレンチ位置図	32
第33図	高住宮ノ谷古墳群 第6トレンチ実測図	32
第34図	高住宮ノ谷古墳群 第7トレンチ実測図	33
第35図	高住宮ノ谷古墳群 第8トレンチ実測図	34
第36図	高住宮ノ谷古墳群 第9トレンチ実測図	34
第37図	高住宮ノ谷遺跡 調査トレンチ位置図	35
第38図	高住宮ノ谷遺跡 第4トレンチ実測図	36
第39図	高住宮ノ谷遺跡 出土遺物実測図	37
第40図	高住宮ノ谷遺跡 第5トレンチ実測図	37
第41図	高住宮ノ谷遺跡 第6トレンチ実測図	38

第42図	高住宮ノ谷遺跡	第7トレンチ実測図	39
第43図	高住宮ノ谷遺跡	第8トレンチ実測図	40
第44図	高住宮ノ谷遺跡	第9トレンチ実測図	40
第45図	内海中所在遺跡	調査トレンチ位置図	41
第46図	内海中所在遺跡	第3トレンチ実測図	42
第47図	桂見遺跡	調査トレンチ位置図	43
第48図	桂見遺跡	第1トレンチ実測図	43
第49図	秋里遺跡	調査トレンチ位置図	44
第50図	秋里遺跡	第1トレンチ実測図	45
第51図	秋里遺跡	第2トレンチ実測図	46
第52図	秋里遺跡	第3トレンチ実測図	47
第53図	秋里遺跡	第4トレンチ実測図	47
第54図	秋里遺跡	第5トレンチ実測図	49
第55図	秋里遺跡	第6トレンチ実測図	49
第56図	秋里遺跡	第7トレンチ実測図	50
第57図	秋里遺跡	第7トレンチ実測図	51
第58図	秋里遺跡	出土遺物実測図(1)	52
第59図	秋里遺跡	出土遺物実測図(2)	53
第60図	下坂本清合遺跡	調査トレンチ位置図	54
第61図	下坂本清合遺跡	第14トレンチ実測図	55
第62図	下坂本清合遺跡	第15トレンチ実測図	56
第63図	下坂本清合遺跡	第16トレンチ実測図	57
第64図	下坂本清合遺跡	第17トレンチ実測図	58
第65図	下坂本清合遺跡	第18・19トレンチ実測図	59
第66図	下坂本清合遺跡	出土遺物実測図	60
第67図	上原古墳群	調査トレンチ位置図	61
第68図	上原古墳群	第1トレンチ実測図	62
第69図	上原古墳群	第2トレンチ実測図	63
第70図	上原古墳群	第3トレンチ実測図	64
第71図	日光長谷遺跡	調査トレンチ位置図	64
第72図	日光長谷遺跡	第1トレンチ実測図	65
第73図	日光長谷遺跡	第2トレンチ実測図	66
第74図	日光長谷遺跡	第3トレンチ実測図	67
第75図	日光長谷遺跡	第4トレンチ実測図	68
第76図	日光長谷遺跡	第5トレンチ実測図	69
第77図	日光長谷遺跡	第6トレンチ実測図	70
第78図	日光長谷遺跡	第7トレンチ実測図	71
第79図	日光長谷遺跡	第8トレンチ実測図	71
第80図	日光長谷遺跡	第9トレンチ実測図	72
第81図	日光長谷遺跡	出土遺物実測図	73
第82図	山手古墳群	調査トレンチ位置図	75
第83図	山手古墳群	第6トレンチ実測図	75
第84図	山手古墳群	第7トレンチ実測図	76
第85図	山手古墳群	第8トレンチ実測図	76

第86図	山手古墳群 第9トレンチ実測図	77
第87図	山手古墳群 第10トレンチ実測図	78
第88図	山手古墳群 第11トレンチ実測図	78
第89図	古郡家所在遺跡 調査トレンチ位置図	79
第90図	古郡家所在遺跡 第1トレンチ実測図	80
第91図	古郡家所在遺跡 第2トレンチ実測図	80
第92図	古郡家所在遺跡 出土遺物実測図	81
第93図	大井所在遺跡 調査トレンチ位置図	82
第94図	大井所在遺跡 第1トレンチ実測図	83
第95図	大井所在遺跡 出土遺物実測図	83
第96図	金沢坂津遺跡 調査トレンチ位置図	84
第97図	金沢坂津遺跡 第1トレンチ土層実測図	84
第98図	金沢坂津遺跡 出土遺物実測図	84
第99図	天神山遺跡 調査トレンチ位置図	85
第100図	天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ土層図	86
第101図	天神山遺跡 出土遺物実測図	86
第102図	岩吉遺跡 調査トレンチ位置図	88
第103図	岩吉遺跡 第1・第2トレンチ土層図	88
第104図	古海遺跡 調査トレンチ位置図	89
第105図	古海遺跡 第1・第2トレンチ土層図	89
第106図	青谷上寺地遺跡 調査トレンチ位置図	90

# 図版目次

## 図版1

- 乙亥正屋敷廻遺跡遠景(南東から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第4トレンチ完掘状況(南から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第4トレンチ土層断面(西から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第4トレンチ土坑(SK 01)断面(西から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第4トレンチ土器検出状況(東から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第4トレンチ機織具検出状況(東から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第4トレンチ板梯子検出状況(南から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第4トレンチ桃の実が詰まった壺

## 図版2

- 乙亥正屋敷廻遺跡第5トレンチ完掘状況(南から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第5トレンチ土層断面(西から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第6トレンチ完掘状況(西から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第6トレンチ土層断面(南から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第7トレンチ完掘状況(東から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第7トレンチ土層断面(南から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第7トレンチ土坑(SX 01)検出状況(西から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第8トレンチ完掘状況(北東から)

## 図版3

- 乙亥正屋敷廻遺跡第8トレンチ土層断面(南東から)
- 乙亥正屋敷廻遺跡第9トレンチ
- 乙亥正屋敷廻遺跡第9トレンチ土層
- 乙亥正屋敷廻遺跡第10トレンチ
- 乙亥正屋敷廻遺跡第10トレンチ土層
- 大柄遺跡遠景(南東から)
- 大柄遺跡第1トレンチ土層断面(南東から)
- 大柄遺跡第1トレンチ完掘状況(北東から)

## 図版4

- 大柄遺跡第1トレンチ土層断面(南西から)
- 大柄遺跡第1トレンチSD 01検出状況(南から)
- 大柄遺跡第2トレンチ掘り下げ状況(南西から)
- 大柄遺跡第2トレンチSD 01~04検出状況(南東から)
- 大柄遺跡第3トレンチ完掘状況(北西から)
- 大柄遺跡第3トレンチ土層断面(北から)
- 大柄遺跡第4トレンチ土層断面(南から)
- 大柄遺跡第4トレンチ完掘状況(西から)

## 図版5

- 大柄遺跡第4トレンチ完掘状況(南東から)

大柄遺跡第5トレンチ完掘状況(南東から)

大柄遺跡第5トレンチ土層断面(北東から)

大柄遺跡第5トレンチSP 01完掘状況(北東から)

大柄遺跡第5トレンチSK 01完掘状況(南西から)

大柄遺跡第5トレンチSK 02完掘状況(北西から)

大柄遺跡第6トレンチ完掘状況(南西から)

大柄遺跡第6トレンチ土層断面(北西から)

## 図版6

大柄遺跡第7トレンチ完掘状況(南から)

大柄遺跡第7トレンチ土層断面(東から)

大柄遺跡第8トレンチ完掘状況(北西から)

大柄遺跡第8トレンチ土層断面(北東から)

大柄遺跡第8トレンチ木製品検出状況(北東から)

大柄遺跡第9トレンチ完掘状況(北西から)

大柄遺跡第9トレンチ土層断面(南西から)

大柄遺跡第10トレンチ完掘状況(南東から)

## 図版7

大柄遺跡第10トレンチ土層断面①(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面②(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面③(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面④(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑤(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑥(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑦(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑧(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑨(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑩(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑪(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑫(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑬(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑭(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑮(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土層断面⑯(北東から)

## 図版8

大柄遺跡第10トレンチ土坑検出状況①(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ土坑検出状況②(北東から)

大柄遺跡第10トレンチ溝状造構検出状況(北東から)

良田1号墳遠景(南から)

良田1号墳第1トレンチ掘下げ(南西から)

良田1号墳第1トレンチ北壁断面(南から)

良田1号墳第1トレンチ供献土器出土状況(南東から)

ら)

良田所在遺跡遠景(北から)

良田所在遺跡第1トレンチ掘下げ(北東から)

#### 図版9

良田所在遺跡第1トレンチ土層断面(東から)  
良田所在遺跡第2トレンチ掘下げ(北東から)  
良田所在遺跡第2トレンチ西壁断面(東から)  
良田所在遺跡第3トレンチ掘下げ(南西から)  
良田所在遺跡第3トレンチ南東壁断面(西から)  
高住宮ノ谷古墳群・遺跡遠景(東から)  
高住宮ノ谷古墳群第6トレンチ完掘状況(南東から)  
高住宮ノ谷古墳群第6トレンチ土層断面(南西から)

#### 図版10

高住宮ノ谷古墳群第7トレンチ完掘状況(北西から)  
高住宮ノ谷古墳群第7トレンチ土層断面(南西から)  
高住宮ノ谷古墳群第8トレンチ完掘状況(東から)  
高住宮ノ谷古墳群第8トレンチ土層断面(南から)  
高住宮ノ谷古墳群第9トレンチ完掘状況(北東から)  
高住宮ノ谷古墳群第9トレンチ土層断面(北西から)  
高住宮ノ谷遺跡第4トレンチ完掘状況(北東から)  
高住宮ノ谷遺跡第4トレンチ土層断面(北西から)

#### 図版11

高住宮ノ谷遺跡第4トレンチ溝状遺構検出状況(北西から)  
高住宮ノ谷遺跡第5トレンチ完掘状況(北から)  
高住宮ノ谷遺跡第5トレンチ土層断面(西から)  
高住宮ノ谷遺跡第5トレンチ(SJ 01)検出状況(南から)  
高住宮ノ谷遺跡第6トレンチ完掘状況(北西から)  
高住宮ノ谷遺跡第6トレンチ土層断面(南東から)  
高住宮ノ谷遺跡第6トレンチ(SP 01)検出状況(北東から)  
高住宮ノ谷遺跡第6トレンチ(SJ 01)検出状況(北東から)

#### 図版12

高住宮ノ谷遺跡第7トレンチ完掘状況(北西から)  
高住宮ノ谷遺跡第7トレンチ土層断面(南西から)  
高住宮ノ谷遺跡第8トレンチ完掘状況(南東から)  
高住宮ノ谷遺跡第8トレンチ土層断面(南西から)  
高住宮ノ谷遺跡第9トレンチ完掘状況(北西から)  
高住宮ノ谷遺跡第9トレンチ土層断面(南西から)  
内海中所在遺跡調査地遠景(北から)  
内海中所在遺跡第3トレンチ掘下げ状況(北から)

#### 図版13

内海中所在遺跡第3トレンチ西壁断面(東から)  
桂見遺跡遠景(東から)  
桂見遺跡第1トレンチ(北から)  
秋里遺跡遠景(南西から)  
秋里遺跡第1トレンチ掘下げ(南から)  
秋里遺跡第1トレンチ東壁断面(北西から)

秋里遺跡第2トレンチ完掘状況(東から)  
秋里遺跡第2トレンチ土層断面(南から)

#### 図版14

秋里遺跡第3トレンチ完掘状況(南から)  
秋里遺跡第3トレンチ土層断面(西から)  
秋里遺跡第4トレンチ完掘状況(南から)  
秋里遺跡第4トレンチ土層断面(東から)  
秋里遺跡第4トレンチ深掘り土層断面(南から)  
秋里遺跡第5トレンチ完掘状況(西から)  
秋里遺跡第5トレンチ土層断面(南から)  
秋里遺跡第6トレンチ完掘状況(南から)

#### 図版15

秋里遺跡第6トレンチ土層断面(南から)  
秋里遺跡第6トレンチ溝状遺構(SD 01~03)検出状況(南から)  
秋里遺跡第6トレンチ溝状遺構(SD 04)検出状況(南から)  
秋里遺跡第6トレンチ遺物検出状況(北から)  
秋里遺跡第6トレンチ深掘り土層断面(北から)  
秋里遺跡第7トレンチ完掘状況(西から)  
秋里遺跡第7トレンチ土層断面(南から)  
秋里遺跡第7トレンチ田舟検出状況(南から)

#### 図版16

秋里遺跡第7トレンチ舟縁を留めた舟釣(東から)  
秋里遺跡第7トレンチ田舟の重なり部分(北から)  
秋里遺跡第7トレンチ田舟の立て杭(南から)  
秋里遺跡第7トレンチ溝状遺構(SD 04・05)検出状況(北から)  
秋里遺跡第7トレンチ弥生土器検出状況(北から)  
下坂本清合遺跡遠景(東から)  
下坂本清合遺跡第14トレンチ(南東から)  
下坂本清合遺跡第14トレンチ土層断面(南西から)

#### 図版17

下坂本清合遺跡第15トレンチ完掘状況(西から)  
下坂本清合遺跡第15トレンチ土層断面(南から)  
下坂本清合遺跡第15トレンチ壁際溝検出状況(南から)  
下坂本清合遺跡第15トレンチ弥生土器検出状況  
下坂本清合遺跡第15トレンチ高坏検出状況  
下坂本清合遺跡第16トレンチ完掘状況(南東から)  
下坂本清合遺跡第16トレンチ土層断面(北東から)  
下坂本清合遺跡第17トレンチ完掘状況(北東から)

#### 図版18

下坂本清合遺跡第17トレンチ土層断面(南東から)  
下坂本清合遺跡第18・19トレンチ完掘状況(東から)  
下坂本清合遺跡第18トレンチ土層断面(南から)

下坂本清合遺跡第19トレンチ土層断面(南から)  
上原古墳群遠景(東から)  
上原古墳群第1トレンチ完掘状況(西から)  
上原古墳群第1トレンチ土層断面(南から)  
上原古墳群第2トレンチ完掘状況(南から)

#### 図版19

上原古墳群第2トレンチ土層断面(東から)  
上原古墳群第2トレンチ埋葬施設検出状況(東から)  
上原古墳群第2トレンチ埋葬施設(南から)  
上原古墳群第2トレンチ炭化物の痕跡が残る埋葬施設  
上原古墳群第3トレンチ完掘状況(東から)  
上原古墳群第3トレンチ土層断面(北から)  
日光長谷遺跡遠景(北から)  
日光長谷遺跡第1トレンチ完掘状況(北東から)

#### 図版20

日光長谷遺跡第1トレンチ土層断面(北西から)  
日光長谷遺跡第2トレンチ完掘状況(南東から)  
日光長谷遺跡第2トレンチ土層断面(南西から)  
日光長谷遺跡第3トレンチ完掘状況(南東から)  
日光長谷遺跡第3トレンチ土層断面(南西から)  
日光長谷遺跡第3トレンチ住居壁断面(北西から)  
日光長谷遺跡第3トレンチ焼土面検出状況(南西から)  
日光長谷遺跡第4トレンチ完掘状況(東から)

#### 図版21

日光長谷遺跡第4トレンチ土層断面(南から)  
日光長谷遺跡第5トレンチ完掘状況(南東から)  
日光長谷遺跡第5トレンチ土層断面(南西から)  
日光長谷遺跡第6トレンチ完掘状況(北西から)  
日光長谷遺跡第6トレンチ土層断面(北東から)  
日光長谷遺跡第6トレンチ遺物検出状況  
日光長谷遺跡第7トレンチ完掘状況(北西から)  
日光長谷遺跡第7トレンチ土層断面(西から)

#### 図版22

日光長谷遺跡第8トレンチ完掘状況(北から)  
日光長谷遺跡第8トレンチ土層断面(東から)  
日光長谷遺跡第9トレンチ完掘状況(南東から)  
日光長谷遺跡第9トレンチ土層断面(南西から)  
日光長谷遺跡第9トレンチ高坏検出状況(南東から)  
山手古墳群遠景(南西から)  
山手古墳群第6トレンチ完掘状況(南から)  
山手古墳群第6トレンチ土層断面(東から)

#### 図版23

山手古墳群第7トレンチ完掘状況(東から)  
山手古墳群第7トレンチ土層断面(南から)

山手古墳群第8トレンチ完掘状況(南から)  
山手古墳群第8トレンチ(拡張区)完掘状況(西から)  
山手古墳群第8トレンチ土層断面(西から)  
山手古墳群第8トレンチ土層断面(拡張区)(南から)  
山手古墳群第9トレンチ完掘状況(北から)  
山手古墳群第9トレンチ土層断面(東から)

#### 図版24

山手古墳群第10トレンチ完掘状況(南西から)  
山手古墳群第10トレンチ土層断面(南東から)  
山手古墳群第11トレンチ完掘状況(南西から)  
山手古墳群第11トレンチ土層断面(南東から)  
山手古墳群第11トレンチ墳端部土層断面(南東から)  
古郡家所在遺跡遠景(東北東から)  
古郡家所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況(南から)  
古郡家所在遺跡第1トレンチ東壁断面(南西から)

#### 図版25

古郡家所在遺跡第2トレンチ掘下げ状況(南から)  
古郡家所在遺跡第2トレンチ半掘状況(西から)  
古郡家所在遺跡第2トレンチ東側拡張部掘下げ状況(西から)  
大井所在遺跡遠景(国道482号から調査地を望む)(北東から)  
大井所在遺跡第1トレンチ完掘状況(東から)  
大井所在遺跡第1トレンチ西壁土層堆積状況(東から)  
大井所在遺跡第1トレンチ遺物出土状況(坏)(北西から)  
金沢坂津遺跡第1トレンチ土層断面(南西から)

#### 図版26

金沢坂津遺跡第2トレンチ土層断面(南西から)  
天神山遺跡第1トレンチ完掘状況(東から)  
天神山遺跡第1トレンチ土層断面(北から)  
天神山遺跡第2トレンチ完掘状況(北から)  
天神山遺跡第3トレンチ完掘状況(北から)  
天神山遺跡第3トレンチ土層断面(西から)  
天神山遺跡第4トレンチ完掘状況(北から)  
天神山遺跡第4トレンチ土層断面(西から)

#### 図版27

岩吉遺跡第1トレンチ完掘状況(北西から)  
岩吉遺跡第1トレンチ北側土層断面(南西から)  
岩吉遺跡第2トレンチ完掘状況(北西から)  
岩吉遺跡第2トレンチ北側土層断面(南西から)  
古海遺跡第1トレンチ完掘状況(西から)  
古海遺跡第1トレンチ北側土層断面(南から)  
古海遺跡第2トレンチ完掘状況(南から)  
古海遺跡第2トレンチ西側土層断面(東から)

**図版28**

乙亥正屋敷遺跡 出土遺物(1)

**図版29**

乙亥正屋敷遺跡 出土遺物(2)

**図版30**

乙亥正屋敷遺跡 出土遺物(3)

大柄遺跡 出土遺物(1)

**図版31**

大柄遺跡 出土遺物(2)

**図版32**

大柄遺跡 出土遺物(3)

良田1号墳 出土遺物

高住宮ノ谷遺跡 出土遺物

**図版33**

秋里遺跡 出土遺物(1)

**図版34**

秋里遺跡 出土遺物(2)

**図版35**

秋里遺跡 出土遺物(3)

**図版36**

下坂本清合遺跡 出土遺物(1)

**図版37**

下坂本清合遺跡 出土遺物(2)

日光長谷遺跡 出土遺物(1)

**図版38**

日光長谷遺跡 出土遺物(2)

**図版39**

日光長谷遺跡 出土遺物(3)

古郡家所在遺跡 出土遺物

大井所在遺跡 出土遺物

金沢坂津遺跡 出土遺物

天神山遺跡 出土遺物(1)

**図版40**

天神山遺跡 出土遺物(2)

## 第1章 発掘調査の経緯と経過

鳥取市は、周辺8町村との合併により面積756.66km<sup>2</sup>、人口約20万人を擁する都市となった。鳥取市域の遺跡数も市域の拡大や青谷町、国府町等多くの遺跡を有する町との合併によりその数を増し、古墳、集落跡、散布地等4,800カ所以上となった。このようなか、現在進められている鳥取西道路の建設は、市域でも有数の遺跡密集地である湖山池南岸に計画され、現在路線内の発掘調査が行われ、新たな発見が相次いでいる。今回の調査遺跡は鳥取西道路建設計画に伴って実施した内海中所在遺跡、大柄遺跡、高住宮ノ谷古墳群、高住宮ノ谷遺跡、乙亥正屋敷廻遺跡、下坂本清合遺跡、日光長谷遺跡、金沢坂津遺跡、良田所在遺跡、急傾斜整備事業計画に伴って実施した良田1号墳、携帯電話基地局建設計画に伴って実施した桂見遺跡、宅地造成計画に伴って実施した秋里遺跡、砂防事業計画に伴って実施した上原古墳群、病院建設事業計画に伴って実施した秋里遺跡、個人店舗建設計画に伴って実施した秋里遺跡、古海遺跡、可燃物処理施設建設計画に伴って実施した山手古墳群、墓地造成計画に伴って実施した古郡家所在遺跡、道路建設に伴って実施した大井所在遺跡、農業関連事業計画に伴って実施した岩吉遺跡、遺跡範囲確認調査を実施した青谷上寺地遺跡、公共下水道事業整備に伴って実施した天神山遺跡の20遺跡である。

試掘調査はトレンチ掘削による遺構・遺物の包含状況の確認に主眼を置いて実施し、層ごとの造構確認と包含遺物の把握を行なながら掘り下げを行った。トレンチの掘削は基本的に人力によって実施したが、乙亥正屋敷廻遺跡、金沢坂津遺跡、秋里遺跡、古海遺跡、古郡家所在遺跡、岩吉遺跡、天神山遺跡は重機を用いて表土除去を行い、その後人力による掘り下げを行った。また青谷上寺地遺跡はボーリング調査を行い、遺跡の有無を確認した。整理作業は基本的には調査終了後から行い、本格的な報告書作成は平成27年11月から実施した。本報告の調査面積は1,565.42m<sup>2</sup>である。各調査遺跡のトレンチ数、調査面積、現地調査期間は次の通りである。

遺跡名	Tr数	調査面積	現地調査期間	
1 乙亥正屋敷廻遺跡	7	77.32	20131111～20131211	20140527～20140616
2 大柄遺跡	10	480.00	20131118～20131219	20140422～20140513
3 良田1号墳	1	4.00	20131211～20131217	
4 良田所在遺跡	3	66.00	20131216～20140124	20140224～20140305
5 高住宮ノ谷古墳群	4	38.50	20130225～20130325	
6 高住宮ノ谷遺跡	6	49.00	20130228～20130328	
7 内海中所在遺跡	1	40.00	20130311～20130319	
8 桂見遺跡	1	4.00	20130320～20130324	
9 秋里遺跡	7	462.00	20140409～20140411 20150202～20150205	20141202～20141210 20150220～20150305
10 下坂本清合遺跡	6	64.50	20140616～20140718	20150113
11 上原古墳群	3	20.00	20140718～20140805	
12 日光長谷遺跡	9	97.50	20140925～20150114	
13 山手古墳群	6	46.50	20141212～20141224	
14 古郡家所在遺跡	2	38.90	20150316～20150323	
15 大井所在遺跡	1	14.00	20150317～20150320	
16 金沢所在遺跡	2	16.50	20140626	
17 天神山遺跡	4	9.00	20141028～20141031	
18 岩吉遺跡	2	9.10	20140114	
19 古海遺跡	2	27.60	20131204	
20 青谷上寺地遺跡	3	1.00	20140807～20140809	

第1図 調査遺跡位置図



## 第2章 調査の結果

### 第1節 乙亥正屋敷廻遺跡

乙亥正屋敷廻遺跡は、日本海に面する温泉保養地として知られる浜村温泉から1km程内陸に入った鹿野町乙亥正の「重山」集落内に所在し、後背地の丘陵上には「重山古墳群」、水田を隔てた東丘陵には「梶掛古墳群」、「日光古墳群」、「浜村古墳群」、北丘陵には、「谷奥古墳群」、「勝見古墳群」が展開し、南方の水田域には「木槻遺跡」が広がり、当該地は四方を遺跡に囲まれた地域となっている。

今回の発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に先行する試掘で、平成24年度に3ヵ所の試掘調査を実施しており、弥生時代以降の遺構、遺物が多数検出されている。本調査は、以後に道路用地内の家屋移転が完了したことから、更に精度の高い資料を得るために新たな2ヵ所のトレンチを設定し、調査を行った。



第2図 乙亥正屋敷廻遺跡 調査トレンチ位置図

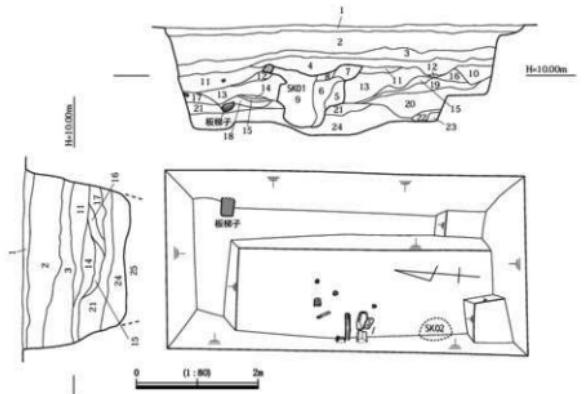
### 第4トレンチ(Tr-4) [第2・3・7・8図 図版1・28~30]

湾状に入り込んで浅い谷地形で、家屋移転後の敷地内に3.0m×6.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.7mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。また、地表下約0.8mまで掘り下げた所で、多量の遺物が検出されたことから、遺構の保護を優先してトレンチを「L」字状に掘り下げ、以下の下層を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚5cm～15cmで淡黄色の表土である。第2層は、層厚25cm～55cmで現代の生活用品が混在するオリーブ灰色の客土である。第3層は、層厚10cm～50cmで昭和の中頃まで見られた宅内配線を固定していたガイシ等の混在する灰色の客土である。第4層は、層厚10cm～30cmでオリーブ黒色土に花崗岩粒が混入し、古墳時代中期以降の遺物を包含する。第5層～第9層は、土坑(SK 01)内に堆積した砂系の埋土で、古墳時代中期の遺物を包含する。第10層は、トレンチ南の壁面で

確認された層厚約30cmのオリーブ黒色土で、逆三角形を呈しその形状から土坑の一部の可能性がある。第11層は、層厚10cm～30cmの灰色粘質土で、古墳時代の遺物を包含し、(SK 01)の掘込面である。第12層は、層厚5cm～15cmの微砂を含む灰色粘質土である。第13層は、層厚15cm～50cmの暗オリーブ灰色粘質土で、古墳時代前期の遺物を包含する。第14層は、層厚5cm～20cmの明オリーブ灰色粘質土で、古墳時代前期の遺物を包含する。第15層は、層厚10cm～15cmの灰色粘質土である。第16層は、層厚10cm～15cmの比較的薄い暗緑灰色の粘質土である。第17層は、層厚約20cmの灰色土で小礫を含み、木製品を包含する。第18層は、層厚約10cmの灰色粘質土で、板梯子の検出面である。第19層は、層厚5cm～20cmの緑黒色粘質土である。第20層は、層厚約40cmのオリーブ黒色粘質土である。第21層は、層厚15cm～20cmの暗灰色粘質土で炭化物を多く含む。第22層は、トレンチ南の一部に見られる層厚約15cmの暗オリーブ灰色粘質土である。第23層は、トレンチ南の一部に見られる層厚約15cmの黄褐色砂で、遺構に伴う間層の可能性もある。第24層は、層厚15cm～35cmの灰色粘質砂で、弥生時代後期の遺物を包含する。第24層の下層は、にいび橙色の粘質砂が厚く堆積していたが、多量の湧水によりトレンチ壁の崩壊が進行したことから、更なる下層への掘り下げを断念した。

遺構は、トレンチの東面で検出された土坑(SK 01)である。第11層の灰色粘質土から掘り込まれていた。掘込平面の口径は160cmの円形で、掘込断面は、袋状であるが、口縁から約25cm下降した所で底状に内反して、径が90cmに絞られ、断面形状は二段構造を呈している。底下は再び外反して、胴幅径が約100cmに膨らみ、再び65cmに絞られて断面形が袋状となる。深さは、100cmで、坑底径は60cmの皿状である。土坑内には砂質系の埋土が堆積し、層中には古墳時代の土器片が混在していた。この複雑な土坑の内部構造から、中蓋的なものを嵌め込む構造も考えられる。



1. 深褐色土 SVB-4 黄土)
2. フラットソーフィアード/2(寄土)
3. 灰色土 SV4/1 黄土)
4. オリーブ色土 10YR3/1(花崗岩を含む 古墳時代の遺物を包含)
5. 明オリーブ色砂 7SY4/1(土砂の埋土 古墳時代の遺物を包含)
6. 黄褐色砂 50YR4/1(土砂の埋土 古墳時代の遺物を包含)
7. 暗褐色土 10Y5/1(土砂の埋土 古墳時代の遺物を包含)
8. 暗褐色土 10Y4/1(土砂の埋土 古墳時代の遺物を包含)
9. 深褐色土 10Y5/4(土砂の埋土 古墳時代の遺物を包含)
10. 深褐色土 10Y5/4(土砂の埋土 古墳時代の遺物を包含)
11. 黄褐色土 10Y4/1(古墳時代の遺物を包含)
12. 暗褐色土 10Y5/1(土砂を含む 古墳時代の遺物を包含)
13. 明オリーブ色粘質土 5GY4/1(古墳時代前期の土耕土を含む)
14. 明オリーブ灰褐色粘質土 5GY7/1(古墳時代前期の遺物を包含)
15. 暗褐色粘質土 10G5/1(古墳時代前期の遺物を包含)
16. 暗褐色粘質土 10G5/1(古墳時代前期の遺物を包含)
17. 黄褐色土 10Y4/1(土砂を多く含む 古墳時代前期の遺物を包含)
18. 黄褐色粘質土 10Y5/1(板梯子検出 古墳時代前期の遺物を包含)
19. 黄褐色粘質土 10Y5/1(板梯子検出 古墳時代前期の遺物を包含)
20. ダークオーブンルーム 10Y3/1(古墳時代前期の遺物を包含)
21. 暗褐色粘質土 10Y3/1(古墳時代前期の遺物を包含)
22. 暗褐色粘質土 5GY4/1
23. 暗褐色粘質土 10Y5/1(砂土を含む)
24. 暗褐色粘質土 10Y5/1(砂土を含む)
25. 深褐色粘質土 5GY4/1

第3図 乙亥正屋敷遺跡 第4トレンチ実測図

出土遺物は、(1・3~8)が弥生時代後期の所産と思われるもので、(1)は内傾する短い複合口縁の壺で、頸部以下を欠損する。口縁端部は、つまみ出すように丸くおさめ、屈曲部の稜は外方へ下垂する。内外面共にヨコナデを施し、口縁外面に5条の平行沈線が巡る。内面にはナデを施すが、一部にヘラケズリ時の工具痕が残り、外面には煤が付着している。(3)は、外傾する複合口縁の壺である。端部を鋭くつまみ上げ、屈曲部は大きく肥厚して稜は水平方向につまみ出し、頸部から胴部は大きく開くが、肩部以下を欠損している。内面はヘラケズリ後、口縁部にヨコナデを施す。外面は、頸部に綫方向へのハケメ調整後口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部はヘラミガキを施している。(4)は、ほぼ直立する頸部を持ち、ラッパ状に開くと思われる壺で頸部から口縁部、底部を欠損している。体部は倒卵形で、不安定な丸底か小さな平底と思われる。胴部は、整形後に貼り付けた肩部の凸帯に擬縄状の刻みを施す。胴部内面に3度の粘土充填による接合痕が見られることから、頸部から口縁にかけても同様の工程が繰り返されていると思われる。内面は、横、斜め方向へのハケメ調整後にはナデを施している。外面頸部は、綫方向へのハケメ調整、体部は丁寧な綫、横のハケメ調整後に軽くナデを施している。凸帶には、頂部に楊枝大の丸棒状施文具による刻みを左斜め方向へ6・7mm間隔で曳き、接合面から刺み部にかけて左方向へ強くヨコナデを施すことで、刺み面の端部が潰れて擬縄状のモチーフを醸し出しながら肩部を巡る。肩部には凸帶を介して口径8mm程度の竹管によるスタンプ文が施されており、1.1~1.2cm間隔で巡り、これに接して胴部側の下方にも口径1.1cmの竹管によるスタンプ文が更に1.5~1.7cm間隔で巡るが、何れのスタンプ文も間に規則性は見られない。(5)は、タマネギ形の小壺で、頸部から上方を欠損する。残存高は5.2cm、胴径9.0cmの丸底で器壁は薄く側面で0.25cm、底面はやや肥厚して0.6cmを測る。底面には、成形時に外面から棒状工具により穿った口径0.4cmの穿孔があり、工具を抜き取った返り痕も認められる。肩部には焼成後と思われる口径2.0cmの穿孔が確認できる。内面は、ヘラケズリ後に工具によるナデと指頭によるナデ調整を施す。外面は、ハケメ調整後にヨコナデとミガキを施す。器内には、桃の実が多量に詰め込まれており、量的に果肉を食した後に実を詰めていることは間違いないが、意図、用途は不明である。(6)は、茶釜形で大きく内傾する短い複合口縁の壺で、胴部以下を欠損する。口縁端部は、つまみ出すように丸くおさめ、屈曲部の稜は水平方向へ張り出し、肩部は外面に粘土つなぎで肥厚させている。内面は指頭による調整後ヘラケズリ、ナデを施し、口縁端部にミガキを施しており、外面は口縁部に弱い1条の沈線が巡り、ハケメ調整後ヨコナデ、一部にミガキを施す。(7)は、安定した平底から大きく外反する壺又は壺の底部で、外面に焼成時の煤が付着する。内面は、全体にヘラケズリ後かるくナデを施し、外面は綫方向へのハケメの後底部にナデを施している。(8)は、大きく外反する複合口縁の注口土器で、底部が欠損している。口縁端部は、つまみ出すようにやや外反させておさめ、屈曲部の稜は外方へ下垂し、体部はやや倒卵状の球形をなす。胴部から肩部にかけて注口部が取り付き、先端部を大きく上方に突き出しており、煮沸時と思われる煤が付着している。口縁は、内外面共にヨコナデ後に内面端部にミガキを施す。体部の内面は、ヘラケズリ後ナデを施し、外面はヘラミガキ後肩部に貝殻腹縁による刻み目を練杉文状に巡らす。次に肩部の穿孔面に注口部を貼り付けている。体部と注口部の接合面は、指押さえで成形し、綫、斜方向にハケメ後下方にミガキ調整を施す。(9~17)が古墳時代前期の所産と思われるもので、(9)は外反する複合口縁の壺で、口縁端部はつまんで少し外に折り曲げておさめ、屈曲部の稜は水平方向に突出する。口縁部は内外面共にハケメ調整後ヨコナデを施し、内面にミガキ、肩部にヘラケズリ後ナデ調整、外面はハケメ後にヨコナデを施す。(10)は外反する複合口縁の壺で、頸部から下位を欠損する。口縁部はやや外傾させてつまみ出し、屈曲部の稜はやや下方へ鋭く突き出している。内面は、左方向へのヘラケズリ後ヨコナデ調整、頸部は綫方向へのケズリ、口縁外面端部は、ヨコナデ後ミガキ、口縁部から頸部はヨコナデを施す。(11)は底部を欠損するが、器形から小型の丸底壺と思われる。外反する複合口縁で、内側にやや肥厚するが直線的に外方向に伸び、端部は外側へ少しつまみ出しておさめる。屈曲部は下方へ鋭く突出し、体部はほぼ球形で内外面共に煤

が付着している。口縁部は外面共にヨコナデ、体部内面は成形による指頭痕が残り、ヘラケズリ後ヨコナデを施す。外面は継、横、斜め方向へのハケメ調整後かるくナデを施す。(13)は有段の高坏で、脚部の接合部以下を欠損する。坏部は、大きく外反して口縁に至り、端部は丸くつまんでおさめる。坏底部は円盤充填を施している。坏部の内面は、全体にミガキを施し、外面はヨコナデ後ミガキ、端部はヨコナデ、底部は継方向へのハケメ調整を施す。(12・15)は、坏部が大きく皿状に開き、体部の下に中央が凹み大きく外反して開く低脚部を取り付く土師器の高坏である。(12)は口縁端部を丸くつまんだ後ヨコナデを施し、坏部の中心部に直径2mm程度の凹み脚部充填痕の一部が認められる。坏部は内外面共にハケメ調整後ナデ、更に丁寧なヨコミガキを施す。坏部内面の中心部から端部に向けて放射状の暗文が施されている。高坏全体が浅黄橙色に薄れ、内面の一部に残る剥離部に赤褐色の朱塗布が色濃く残ることから、全体に朱が施されていたものと思われる。(15)は、口縁端部を丸くつまんでおさめる。坏部の中心部に直径3.5mm程度の凹み脚部充填痕の一部が認められる。坏部内外面共にハケメ調整後継、横、斜めのミガキを施すが内面は摩滅により不明瞭である。脚部は内外面共にヨコナデ調整を施す。(14)は、無段の高坏で、脚部が「八」の字状に開くが据部以下を欠損している。坏部は外反しながら延び、口縁端部は丸くおさめる。内外面共にハケメ調整後ヨコナデ、坏部内面に放射状の暗文を施している。脚部を除き浅黄色に染まり、朱色の痕跡が見られ、内面の一部にミガキを施す。脚柱部内面はケズリ後ヨコナデ、外面は接合部にタテへのハケメ調整が残るが、摩耗により不鮮明である。(16)は、大きく「八」の字に拡がる高坏の脚部で、脚柱部から上位を欠損している。端部はつまんで丸くおさめ、内外面共にミガキ、端部はヨコナデを施すが、全体的に風化により調整が不明瞭である。据部に直径0.9cmの円孔透かしを施す。(17)は、鼓形器台の受部で、やや内湾して上方へ延び口縁部で大きく外反させ、端部は丸くおさめる。外面はヨコナデ、内面はヘラケズリ後ヨコナデを施す。(18)は、瓦質の土鍋で口縁部は体部から大きく外反し、折り曲がる頸部から外方へ開く、内外面共に強くヨコナデを施し、器形等から鎌倉時代と思われる。(19)は、弥生時代後期に比定される機織具で、布を織る際の継糸の「経」に対して直交する横糸「緯」で構成する経糸の固定及び「布巻具」である。端部から22cmの所で折れて欠損しており、材は杉材で粗く削って端部にグリップ状の突起を造り、内側の一部に紐を繰り返し巻き付けて擦ることで摩耗した痕跡も認められる。(20・21)は、杉材を丁寧に削った中世の箸と思われる。

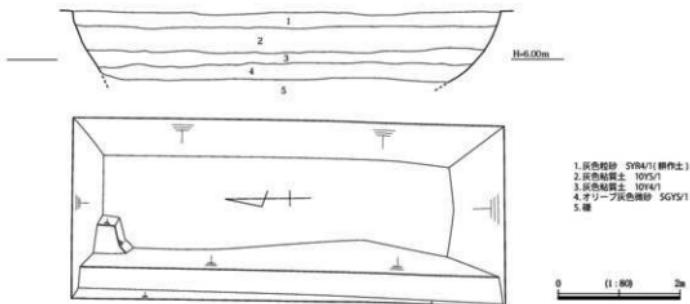
#### 【板梯子】〔第2・3図 図版1〕

板梯子は、スギの丸太を材に打削製材を行った古墳時代前期の板梯子の上部で、踏面の加工面を下にしてトレンチ東壁面の第18層から突き出るように検出された。遺存状態は良好で、板梯子の大半はトレンチ外に遺存していると推定されることから、取上げは行わず、現地での簡素な実測と観察に止め、後の詳細調査に委ねることとした。実見できる範囲での法量等は、木表を幅22cmの加工面として、樹心面を板状に削り、木裏幅は上端で約7cm、踏面で約9cmの厚さに木取りを行っている。上端中央部によく見られる枘の造りだしは加工されていない。上端に厚さ6cmを残し、27cmに渡って下面を抉り、直角に深さ5cm程度を残して踏み込み面を抉り、厚さ5.5cmの踏面を残して外反する抉部の加工が見られる。また、背面のみに激しく火を受けて焼け焦っている痕跡が残る。

#### 【第5トレンチ(Tr-5)】〔第2・4図 図版1・2〕

溪地形の前面で、集落内の市道重山線を介した休耕田に3.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.2mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚15cm～25cmで灰色粒砂の客土である。第2層は、層厚25cm～40cmの灰色粘質土である。第3層は、層厚15cm～30cmの灰色粘質土である。第4層は、層厚20cm～30cmのオリーブ灰色微砂である。第5層は、拳大の河原礫が厚く堆積しており、この礫層上面からの多量の湧水に阻まれ、更なる掘り下げを断念しており、無遺物、無遺構であった。



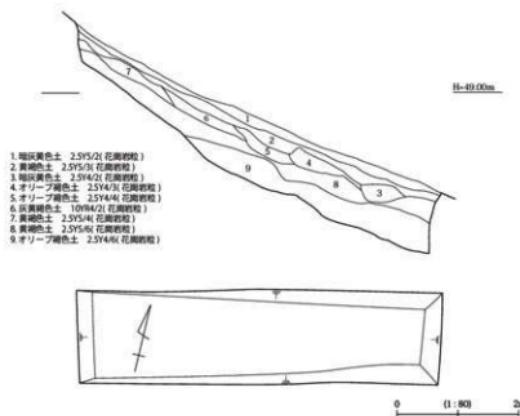
第4図 乙亥正屋敷廻遺跡 第5トレンチ実測図

**第6トレンチ(Tr-6) [第2・5図 図版1・2]**

狭い渓地形の両翼丘陵が繋り、傾斜面が迫り上がった高所で、宅地と水田部を画す市道重山線との比高差が約40mを測る傾斜地に、1.5m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下1.1mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚5cm～20cmで暗灰黄色の表土である。第2層は、層厚3cm～20cmで黄褐色の砂質土である。第3層は、層厚約30cmで暗灰黄色の砂質土である。第4層は、層厚約30cmでオリーブ褐色の砂質土である。第5層は、層厚約20cmでオリーブ褐色の砂質土である。第6層は、層厚約15cmで灰黄褐色の砂質土である。第7層は、層厚約20cmで黄褐色の砂質土である。第8層は、層厚約5cm～40cmで黄褐色の砂質土である。第9層は、層厚25cm～65cmでオリーブ褐色の砂質土である。

遺構、遺物等は検出されなかったが、堆積状況は上方からの小規模な地滑りが断続的に繰り返されていたことを示しており、遺跡の範囲は当該地まで広がっていないことが確認された。

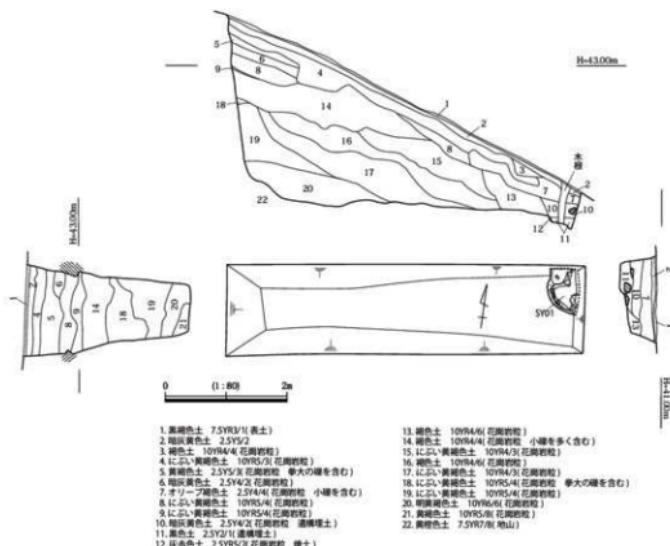


第5図 乙亥正屋敷廻遺跡 第6トレンチ実測図

## 第7トレンチ(Tr-7) [第2・6・7図 図版1・2・28]

狭い渓地形の両翼丘陵が繋がり、宅地と水田部を画す市道重山線との比高差は約36mを測る高所の急傾斜地に1.5m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下2.7mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚5cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚5cm～10cmの暗灰黄色土である。第3層は、層厚約20cmでトレンチ東側の一部に見られる褐色の砂質土である。第4層は、層厚10cm～45cmでにぶい黄褐色の砂質土である。第5層は、層厚10cm～35cmでトレンチ西側の一部に見られる黄褐色の砂質土である。第6層は、層厚約15cmで、トレンチ西側の一部に見られる暗灰黄色の砂質土である。第7層は、層厚15cmでトレンチ東側の一部に見られるオリーブ褐色の砂質土で、花崗岩の礫を含む。第8層は、層厚10cm～25cmで、にぶい黄褐色の砂質土である。第9層は、層厚10cm～20cmでトレンチ西側の一部に見られるにぶい黄褐色の砂質土である。第10層は、生産遺構(SY 01)の埋土で層厚10cm～15cmの暗灰黄色土が堆積していた。第11層は、(SY 01)の埋土で層厚約15cmの黒色土が堆積し、弥生時代後期の土器を包含する。第12層は、(SY 01)の側壁に薄く堆積した灰赤色の焼土である。第13層は、層厚15cm～40cmで褐色の砂質土で(SY 01)の堀込面である。第14層は、層厚40cm～70cmでトレンチの西側に堆積する褐色の砂質土で、花崗岩の礫を多く含む。第15層は、層厚約20cm～50cmでにぶい黄褐色の砂質土である。第16層は、層厚15cm～40cmで褐色の砂質土である。第17層は、層厚30cm～65cmでにぶい黄褐色の砂質土である。第18層は、層厚約70cmでトレンチの西側の一部に見られるにぶい黄褐色の砂質土で拳大的礫を含む。第19層は、層厚約90cmでトレンチの西側の一部に見られるにぶい黄褐色の砂質土である。第20層は、層厚約50cmでトレンチの西側の一部に見られる明黄褐色の砂質土である。第21層は、層厚約20cmでトレンチの西側の一部に見られる黄褐色の砂質土である。第22層は、黄橙色土の

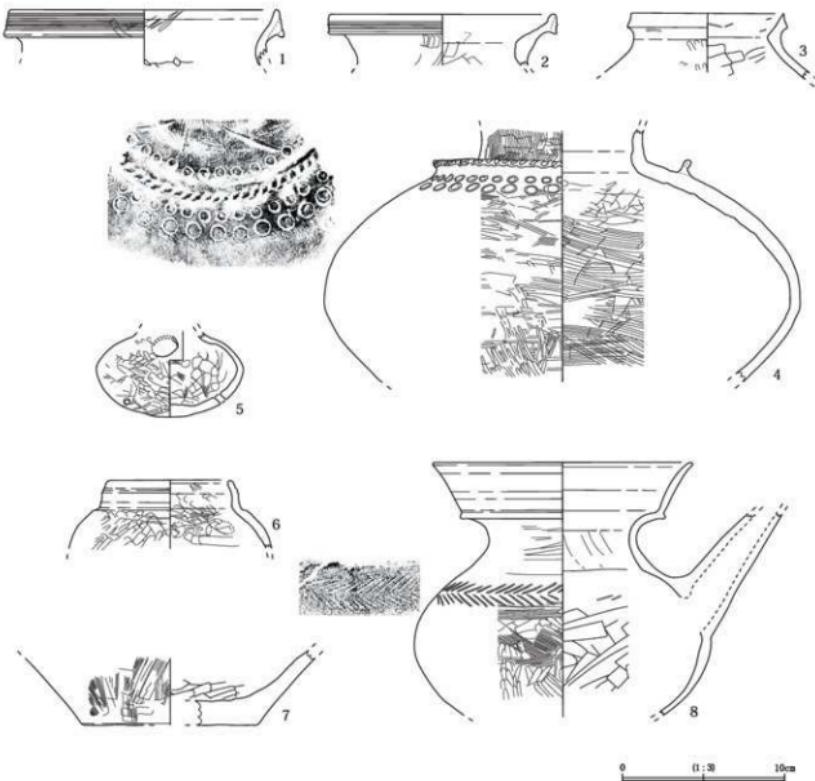


第6図 乙亥正屋敷遺跡 第7トレンチ実測図

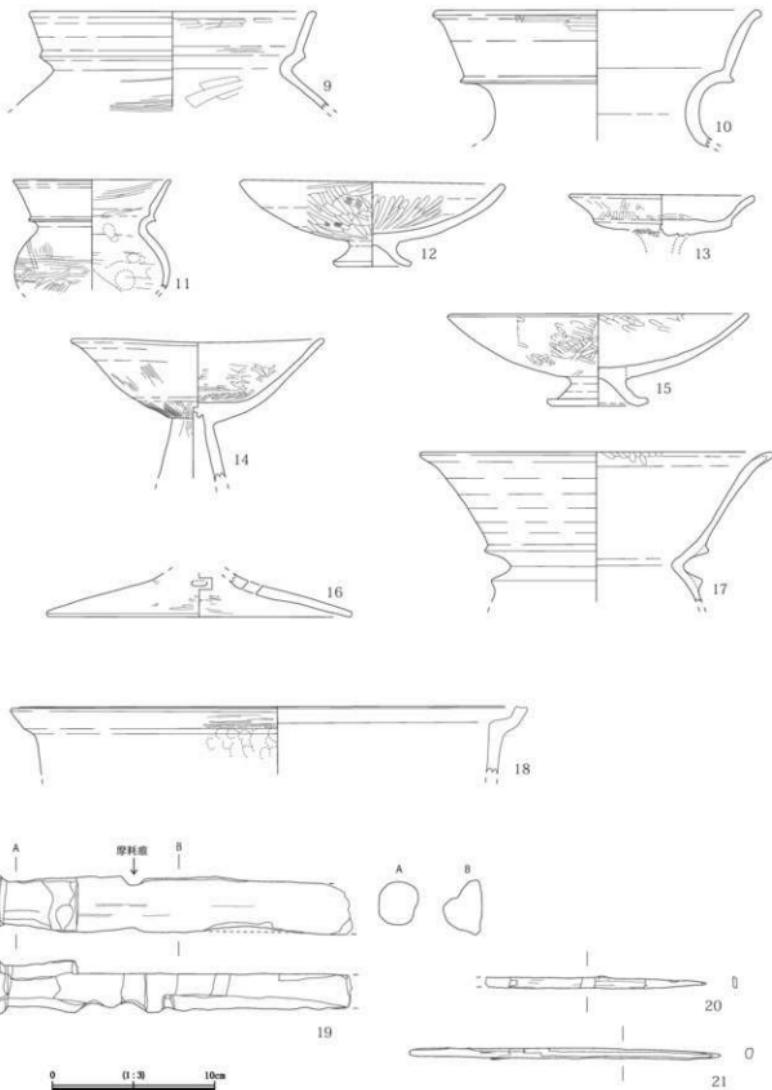
地山である。

遺構は、トレンチの東面で検出された土坑(SY 01)である。(SY 01)は、第13層の褐色土と地山の一部を掘り込んでおり、トレンチ内でその一部が検出されているもので、全貌を実見できるものではないことから、確認できる範囲での観察である。掘込平面での形状は南西面が円形状で、北面は角張った方形で、南北径は75cmを測り、南西面に幅約25cmの段が付く、深さは約20cmと比較的浅い。土坑内は、全体に黒色系に沈着した埋土が堆積し、動物遺体を示す骨片等は見られない。底面は歪形な皿状で弥生土器片と共に火を受けた痕跡を示す拳大の礫、多量の固形炭化物が残されており、底面と西壁面は強い加熱を示す焼土面が薄く遺存している。形状と遺存内容から住居跡等に見られる炉とは異なり、加熱加工を行う生産遺構等が考えられる。

出土遺物は、弥生時代後期のものと思われる土器片が数点検出され、(2)は複合口縁の壺で、頸部以下を欠損している。頸部は、大きく肥厚して外反してはば垂直に立ち上がり、口縁端部をつまんでいる。内外面共にヘラケズリ後ヨコナデを施し、口縁外面に4条の沈線が巡る。



第7図 乙亥正屋敷廻遺跡 出土遺物実測図(1)



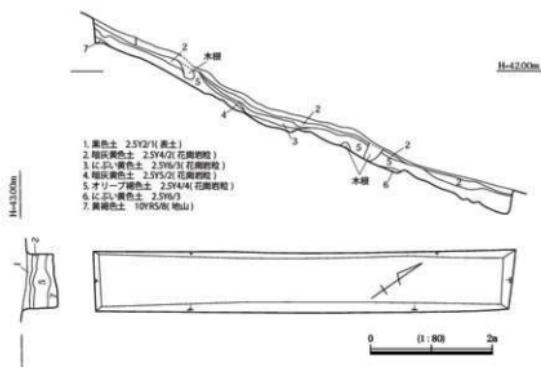
第8図 乙亥正屋敷遺跡 出土遺物実測図(2)

### 第8トレンチ(Tr-8) [第2・9図 図版1・2・3]

狭い渓地形の両翼丘陵が繋がって、ウラジロが繁茂する斜面が迫り上がり、宅地と水田部を画す市道重山線との比高差は約35mを測る高所の傾斜地に1.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下約0.4mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚5cm~10cmで黒色の表土である。第2層は、層厚5cm~10cmで暗灰黄色の砂質土である。第3層は、層厚約10cmでにぶい黄色の砂質土である。第4層は、層厚約5cmで暗灰黄色の砂質土である。第5層は、層厚5cm~30cmでオリーブ褐色の砂質土で地山の起伏に沿って堆積している。第6層は、層厚約5cmのにぶい黄色土である。第7層は、黄褐色の砂質土である。

各層中には、遺構、遺物は検出されず、堆積状況から、小規模ながら上方からの地滑りが断続的に繰り返されていることが確認され、突端部でもあることから、当該地は集落を形成する範囲から外れているものと思われる。



第9図 乙亥正屋敷跡 第8トレンチ実測図

### 第9トレンチ(Tr-9) [第2・10図 図版1・3]

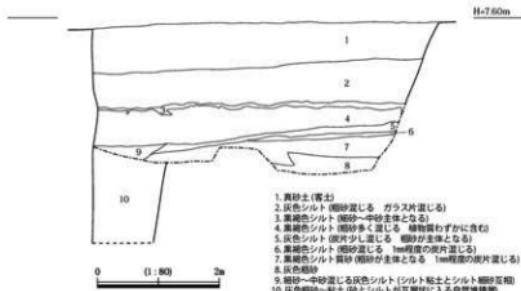
1.2m×5.7mのトレンチである。現況は周辺で行われている発掘調査地から排出される残土置き場となっている。現地表下約80cmは真砂土による客土が行われ、第2層は旧表土から近世と考えられる灰色シルトが堆積している。第3層は細砂から中砂が主体となる砂層が薄く堆積し、第4層は植物質をわずかに含み、粗砂が多く混じる黒褐色シルトが堆積している。第5層は粗砂が主体となる灰色シルト、第6層は粗砂が混じる黒褐色シルトが堆積している。第7層は1mm程度の炭片が混じる黒褐色シルト質砂が堆積し、第8層以下は砂質シルト層や砂層が相互に堆積する自然堆積層と考えられる。

遺構は検出されなかったが、第5層～第7層で古墳時代後期から弥生時代前期の土器片が出土している。

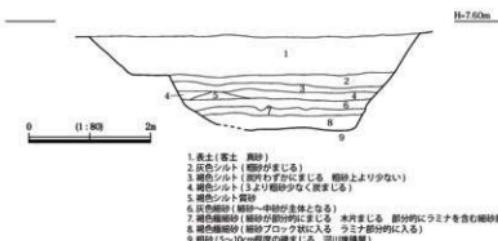
### 第10トレンチ(Tr-10) [第2・11図 図版1・3]

1.2m×5.4mのトレンチである。第9トレンチと同様に現在は残土置き場になっている。現地表下約60cmは真砂土による客土である。第2層以降は各層ともに粗砂から細砂が混じるシルト層が堆積し、第7層以下は自然堆積層である。

このトレンチでは遺構・遺物は検出されなかった。



第10図　乙亥正屋敷遺跡 第9トレンチ実測図



第11図　乙亥正屋敷遺跡 第10トレンチ実測図

## 小結

今回の調査は、道路建設用地内の家屋移転後に設定した第4トレンチで、低湿地特有の保存状態が良好な木製品等と弥生時代～古墳時代の遺構、遺物が検出された。市道重山線から東側のトレンチでは、この市道を超えて東側には遺跡の範囲が広がらないことが確認された。丘陵傾斜面の第7トレンチでは、弥生時代の生産遺構を検出し、他の第6、第8トレンチでは、地滑りが繰り返された痕跡が見つかり、遺構遺物は検出されなかったことから遺跡の西端と考えられ、乙亥正屋敷遺跡は広範囲に拡がるものと思われる。検出された遺構、遺物から弥生時代～中世に至る複合遺跡と推定されることから、継続的に定住していたものと思われ、その解明は後の詳細調査に委ねることとする。

## 第2節 大柄遺跡

大柄遺跡は、大柄集落の東側に位置し、野坂川左岸に形成された平野に立地している。現在知られている遺跡の範囲は東西約1.6km、南北約0.8kmおよび、鳥取平野の中でも広範囲に展開する遺跡として捉えられている。大柄遺跡の存在は、昭和50年から行われた圃場整備の工事中に多数の土器が出土したことから明らかになった。その後、開発計画に伴う試掘調査等によって縄文時代後期後半～晩期の土器や、弥生時代～奈良時代の遺構、遺物が確認されている。また、周辺には数多くの遺跡が立地し、丘陵上には柄間、里仁、宮谷、本高、古海、徳尾などの古墳群が展開している。古墳群の中には柄間1号墳(全長92m)や里仁29号墳(全長81m)といった因幡地方で最大級の前方後円墳が造営されており注目される地域となっている。

今回の試掘調査は、一般国道9号（鳥取西道路）改築事業に伴って実施したもので、県道鳥取河原用瀬線の西側に拓けた水田部へ丘陵部の事業計画地内の10箇所にトレンチ（Tr1～Tr10）を設定し遺跡の広がり等の確認調査を行った。



第12図 大柄遺跡 調査トレンチ位置図

#### 第1トレンチ(Tr-1) [第12・13・24図 図版3・4・30]

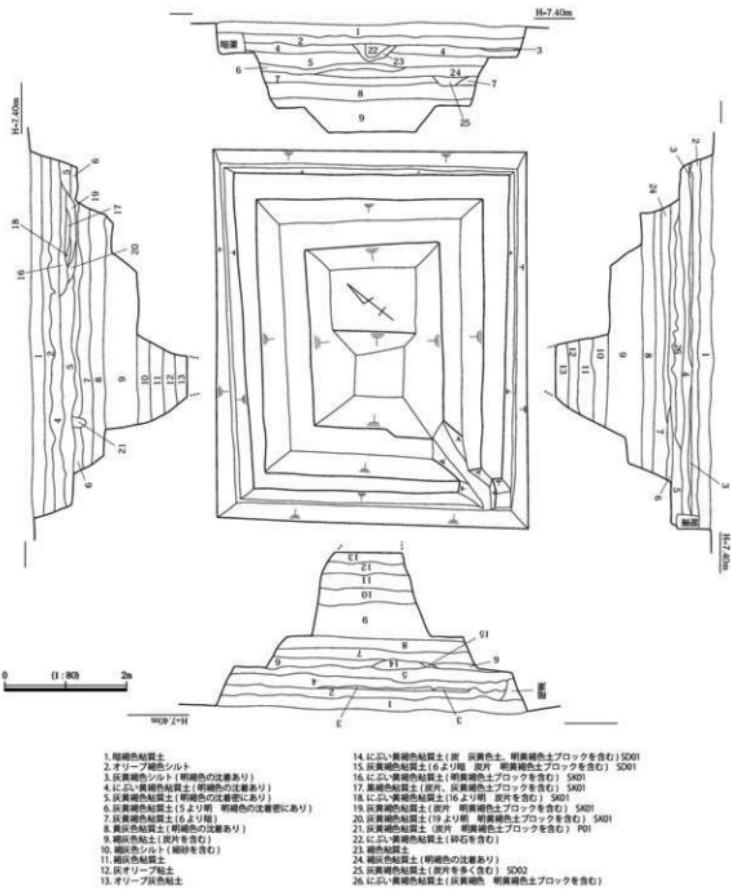
県道鳥取河原用瀬線の西約80mの水田に設定した5.0m×6.0mのトレンチである。現地表の標高は7.3m前後を測る。第1層、第2層は耕作土および底土で、底土下層の第4、5層に陶磁器の混入がみられることから第5層から上層が近世以降の堆積層と考えられる。第5層の下位に堆積する第6～8層、第24層が遺物包含層で、第6、7層の上面からは遺構が検出された。第8層下位の第9層にはわずかに炭片が含まれているが遺構・遺物は認められず、下層の第10、11層および粘土層の第12、13層からも遺構・遺物は検出されなかった。

遺構は、第5層の上面から幅1.85m、深さ30cmの土坑SK-01(第16～20層)、第6層上面から検出長1.6m、幅1.1m、深さ20cm前後の溝状遺構SD-01(第14、15層)、ピットP01(第21層)、第7層上面から幅55cm、深さ15cm前後の溝状遺構SD-02(第25層)が検出された。遺構の時期はSK-01は近世以降、SD-01、02、P01は古墳時代の可能性が考えられる。

出土遺物は、SD-01埋土から土師器細片、包含層遺物として第4～5層から陶磁器、土師器、弥生土器、第24層から土師器、第7～8層で土師器、弥生土器、縄文土器の小片が出土した。第24図(1)は第7～8層出土の縄文時代晩期に比定される深鉢の口縁部である。

#### 第2トレンチ(Tr-2) [第12・14・24図 図版3・4・31]

第1トレンチの北西110mの水田に設定した5.0m×6.0mのトレンチである。現地表の標高は7.4m前後を測る。耕作土下層の第2、3層は圃場整備に伴う土層とみられる。第3層下位の第4・5層は須恵器、土師器などの遺物包含層で、その下層上面に溝やピット状の遺構が認められ、下位の第6層や第7、8層に土師器が多数含まれている。第6～8層の堆積はトレンチ東側ではみられず、東側では第12、13、15層のような砂の堆積層が広がる。砂の堆積は東側に傾斜していく様子が認められ、流路内堆積の状況



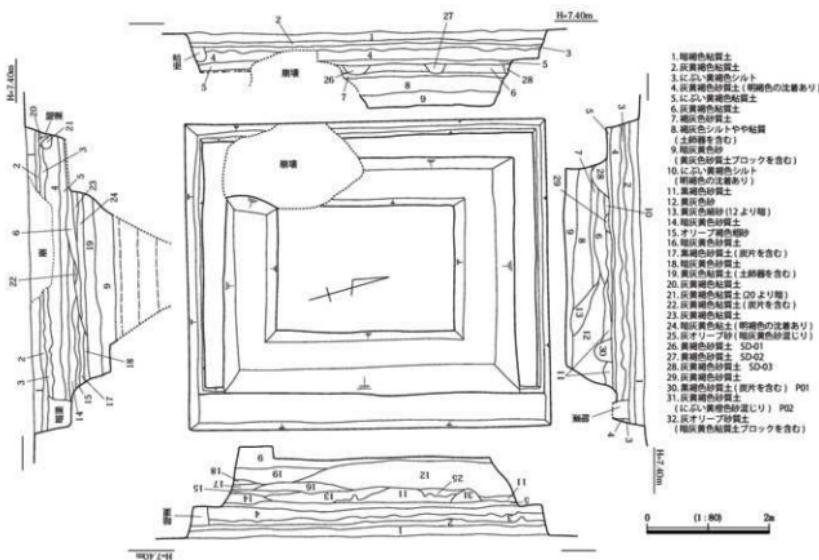
第13図 大柄遺跡 第1トレンチ実測図

がうかがわれる。また、第8層以下の堆積状況については湧水による崩落が著しく手掘り調査が困難であったことから、トレンチ南壁直下について地表下2m近くまで重機による掘削を行った。その結果、第9層およびその下層の標高5.5m近くまで土師器が含まれることが確認され、古墳時代の遺物包含層が存在することが明らかになった。

遺構は第5層の下層上面で確認され、溝SD-01~04、ピット状遺構P01(第30層)、P02(第31層)が検出された。SD-01(第26層)、SD-02(第27層)は南北に走り、SD-03、04は概ね東西にのびる。溝の規模は幅35~45cm、深さ15~28cmである。出土遺物から古墳時代の遺構と考えられる。

出土遺物は、SD-01、02の埋土から土師器細片が出土した。遺物包含層は第4~9層、第11~13層で、第4~5層から高台を持つ須恵器杯や土師器片、第6~7層から須恵器蓋杯、土師器片、第8~9層から

古墳時代中期～前期の土師器が出土した。第8～9層出土の土師器は良好な残存状況を呈し、出土量も多くコンテナ2箱分を数える。また、砂質系の第11～13層には摩耗した須恵器や土師器の細片が多く含まれている。第24図(6)は8～9層から出土した古墳時代前期の土師器壺である。



第14図 大柄遺跡 第2トレンチ実測図

### 第3トレンチ(Tr-3) [第12・15・24図 図版3・4・31・32]

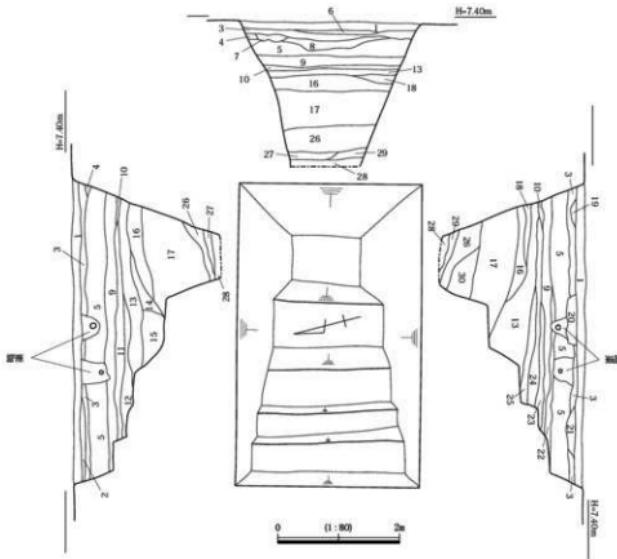
第1トレンチの西60mの水田に設定した3.0m×5.0mのトレンチである。現地表の標高は7.3m前後を測る。耕作土下位の第8層には磁器片の混入が見られ、第5層の上位層は近現代の堆積層とみられる。地表下25cm前後に堆積する第5層および下層の第9、22層が遺物包含層である。第9層の下位には砂層の第13、15、30層や、細砂が脈状に混入する第14、16層、植物遺体を含む第17、26、29層などが堆積しており流路堆積の様子がうかがわれる。第5、22、9、13層で構造検査を行ったがいずれからも遺構は確認されなかった。

出土遺物は、第5層から須恵器片、土師器片、第22層から土師器壺、22層の下層から須恵器杯、第16～17層から土師器片が出土した。第22層出土の土師器壺は破片状態で出土したが、遺存状態は良好で小範囲にまとまった状態で検出された。第24図(11)は第22層下層から出土した須恵器杯、(13)は第22層出土の土師器壺で、奈良～平安時代の所産と思われる。

### 第4トレンチ(Tr-4) [第12・16・24図 図版3・4・5・31]

第2トレンチの北西100mの水田に設定した5.0m×5.0mのトレンチである。現地表の標高は8.6m前後を測り、第2トレンチより1.2mあまり高位置にある。耕作土および床土(第1～3層)下位に堆積する第4、5、9層が遺物包含層で、その下層の第6層が地山とみられる。

遺構面は第6層上面で、溝SD-01、ピット状遺構P01(第22～24層)、P02(第29層)などが検出された。SD-01は幅3.3m、深さ1.1m前後を測り、地山を大きく掘削して造った溝では南北に延びる。溝の時



1. 委褐色粘質土  
2. 黒褐色粘質土(より明)  
3. 黑褐色砂質土  
4. オリーブ褐色粘質土  
5. 底灰褐色土(明褐色の沈着あり)  
6. 黄褐色土  
7. 黄褐色砂質土  
8. 暗オリーブ褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む 硅酸を含む)  
9. 底灰褐色粘質土(明褐色の沈着あり)  
10. 黑褐色砂質土  
11. 暗灰色シルト(細砂混じり)  
12. 黄灰褐色土(灰色砂混じり)  
13. 黄灰褐色土  
14. 黄灰褐色シルト(灰色細砂を断続的に含む)  
15. 黄灰砂
16. 黑褐色粘質土(灰色細砂を断続的に含む)  
17. 黑褐色粘質土(16より厚) 黄褐色粘土 黑色粘土ブロックを含む(植物遺体を含む)  
18. 黑褐色粘質土(黑色粘土ブロックを含む)  
19. 黄褐色粘質土  
20. オリーブ褐色シルト  
21. 黄褐色粘質土  
22. オリーブ褐色砂質土(颗粒多く含む)  
23. 暗灰褐色砂質土(明褐色の沈着あり)  
24. 暗灰褐色シルト(底灰褐色砂質土)  
25. 黑褐色粘質土(底灰褐色砂質土)  
26. 黑褐色粘土(植物遺体を含む)  
27. 黄オリーブ粘土  
28. 黄オリーブ褐色土(7より明)  
29. オリーブ黒褐色土(植物遺体 黄オリーブ粘土ブロックを含む)  
30. 黄灰砂

第15図 大柄遺跡 第3トレント実測図

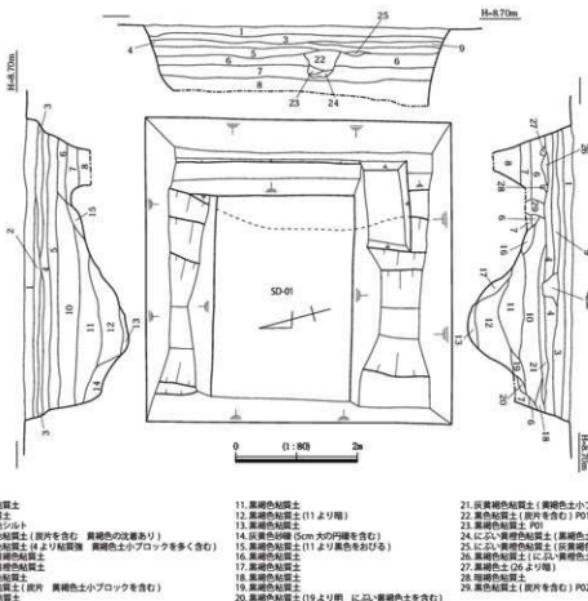
期は出土遺物から平安時代の前半代と思われる。

出土遺物は、SD-01埋土の第10~13層から須恵器、土師器、弥生土器、板状木製品などが出土した。土師器には杯類が多くみられ、底部糸切りのものが含まれている。また、包含層遺物として第4、5、9層から須恵器、土師器、瓦質土器などの小片が出土した。第24図(7~10、12)はSD-01埋土から出土した土師器で、(7、8、9)の杯には底部に糸切り痕がみられる。

#### 第5トレント(Tr-5) [第12・17・18・24図 図版3・5・32]

調査トレントは、水田域の西側に広がる段丘状の微高地で、所々に果樹を伐採したと思われる切り株が残る畠地に2.0m×7.0mの南北トレントを設定し、地表下1.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm~15cmで灰黄褐色の耕作土である。第2層~第8層は、畠地造成の客土及び肥料穴への客土で、第2層上面では重機が走行したと思われるキャタピラ痕も残る。第9・10層は、土坑内に堆積した暗灰褐色の埋土である。第11層は、土坑(SK 01)と柱穴(SP 01)内に堆積した黒褐色の埋土である。第12層は、黒褐色で柱穴内の柱根腐食土である。第13層は、黄色ブロックを含んだ黒褐色の柱穴の埋土である。第14層は、トレント南東の一部に所在する層厚約15cm黒褐色土である。第15層は、層厚約10cmで、にぶい黄褐色土である。第16層は、層厚約20cmの暗オリーブ褐色土



第16図 大橋遺跡 第4トレンチ実測図

でトレンチ東側の一部に所在する。第17層は、暗オーリープ褐色土で古墳時代後期の遺物を包含し、トレンチの南側に厚く、北側に薄く堆積している。第18層は、褐色の粘質土で柱穴内の下部に堆積する。第19層は、硬く締まった黄褐色の地山である。

出土遺物は、第17層で検出された土師器の壺(14)で、胴部～底部が欠損し、頸部が「く」の字に大きく外反して、口縁端部は更に外反させて丸くおさめる。口縁内面はヨコナデ、外面は頸部屈曲部に指押さえの指痕が残り、全面に縱方向へのハケメを施す。胴部内面は、縦方向へのヘラケズリが見られ、全体に煤が付着しており、奈良時代のものと思われる。

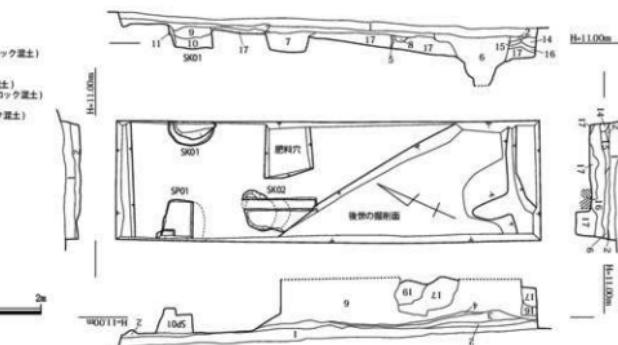
#### 土坑(SK 01)

SK 01は、トレンチ北東壁に接しており、約1/2程度の検出である。検出面は、第2層から上層が削平を受けていることから当初の口径、深さは不明である。従って黒褐色土の第17層下位での状況から、堀込平面の口径は78cmのほぼ円形と考えられる。堀込断面は、地山を掘り込んだ「コ」の字形を呈し、深さは35cm、坑底径は65cmでやや南に張り出した梢円の皿状である。土坑内では、特に遺物等は検出されなかった。

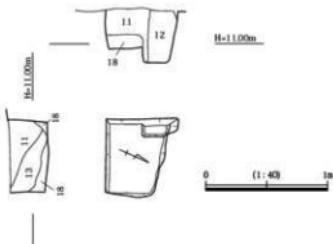
#### 土坑(SK 02)

SK 02は、トレンチの北西寄りで検出され、南側は大きく削平を受けており北側の一部が確認された。検出面は、第2層から上層が削平を受けていることから当初の口径、深さは不明である。従って黒褐色土の第17層下位での状況で、堀込平面の口径が70cm～50cmの梢円形と考えられ、堀込断面は、地山を掘り込んだ「コ」の字形を呈し、深さは32cm、坑底径は南側に張り出した70cm～50cmの梢円と推定されるが、掘削時に改変されている可能性もある。土坑内では、特に遺物等は検出されなかった。

1. 暗灰褐色土 10YR4/2(耕作土)
2. 黄褐色土 10YR4/4(耕作土)
3. 黄褐色土 10YR4/4(柱穴土)
4. 黄褐色土 2.5Y5/6(客土)
5. 黄褐色土 2.5Y4/3(客土)
6. 暗灰褐色土 2.5Y4/2(客土)
7. 暗灰褐色土 2.5Y4/2(柱穴土・ブロック混土)
8. 暗灰褐色土 2.5Y5/2(客土)
9. 黄褐色土
10. 暗灰褐色土 2.5Y4/2(客土・ブロック混土)
11. 暗灰褐色土 10YR4/4(柱穴土・ブロック混土)
12. 黄褐色土 10YR3/1(柱穴土)
13. 黄褐色土 10YR3/2(柱穴土・ブロック混土)
14. 黄褐色土 10YR3/2
15. 黄褐色土 10YR4/3
16. 黄褐色土 2.5Y3/3
17. 黄褐色土 10YR3/1(遺物付含層)
18. 黄褐色土 10YR4/6(柱穴土・同埋土)
19. 黄褐色土 2.5Y5/6(地母)



第17図 大柄遺跡 第5トレンチ実測図



第18図 大柄遺跡 第5トレンチSP01実測図

#### 柱穴(SP 01)

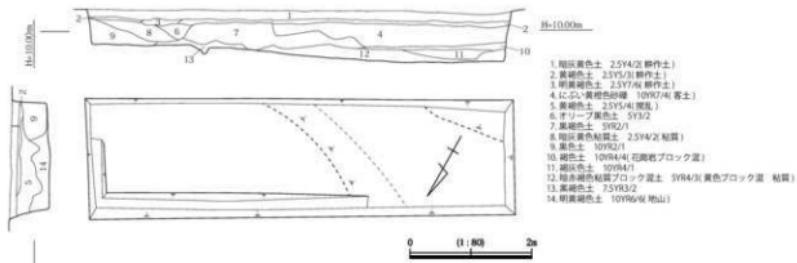
柱穴(SP 01)は、トレンチ北西壁に接しており約1/2程度を検出した。検出面では、第2層から上層が削平を受けていることから当初の口径、深さは不明である。従って黄褐色の地山面での堀込状況となる。堀込面の口径は、一辺が65cmの隅丸方形と推定され、35cm程度を掘り下げて一度平坦な底面を形成し、更に北西の隅に柱根の埋設部を設けているが、正方形と仮定すると、口径45cm、深さ25cm、坑底径35cmを測る。柱穴内では、特に遺物等は検出されなかった。

#### 第6トレンチ(Tr-6) [第12・19図 図版3・5]

調査トレンチは、第5トレンチと同じ段丘状地で、やや低くなった畠地に2.0m×7.0mの東西トレンチを設定し、地表下0.8mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm～15cmで暗灰黄色の耕作土である。第2層は、層厚5cm～10cmで黄褐色の耕作土である。第3層は、層厚約10cmでトレンチ東側の一部に所在する明黄褐色の耕作土である。第4・5層は、層厚10cm～40cmの客土で、造成時の掘削面と思われる。第6層は、層厚約25cmでトレンチ東側の一部に所在する。第7層は、層厚10cm～40cmの黒褐色土である。第8層は、層厚約25cmでトレンチ東側の一部に所在する暗灰黄色の粘質土である。第9層は、層厚約40cmでトレンチ東側の一部に所在する黒色土である。第10層は、層厚5cm～10cmで花崗岩のブロックが混入した褐色土で、トレンチの西側に薄く堆積している。第11層は、層厚約15cmでトレンチ西側の一部に堆積する褐灰色土である。第12層は、層厚5cm～20cmで花崗岩ブロックが混入した暗赤褐色の粘質土である。第13層は、層厚約5cmでトレンチの東側に見られる黒褐色土である。第14層は、第5トレンチでも確認された黄褐色系の地山である。

ここでも造成と思われる掘削の痕跡が第4・5層まで見られ、当該トレンチでは無遺構、無遺物であった。



第19図 大柄遺跡 第6トレンチ実測図

#### 第7トレンチ(Tr-7) [第12・20図 図版3・6]

調査トレンチは、第6トレンチよりやや小高くなつた段丘状で、里仁古墳群が展開する尾根裾の畠地で、果樹の植え込みを避けての制約により、2.0m×4.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.9mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

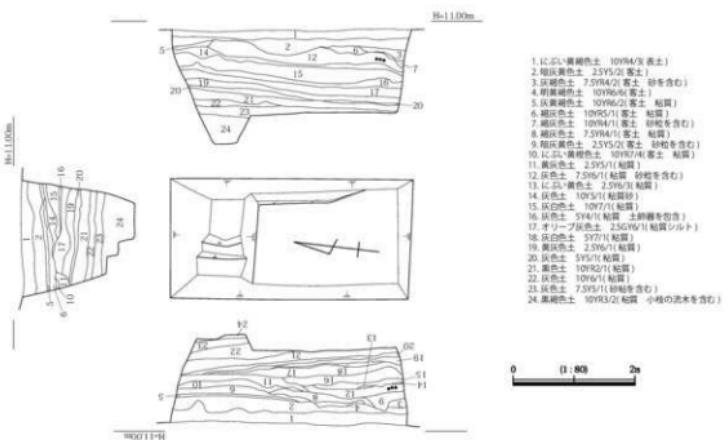
基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm～20cmでにじみ黄褐色の耕作土である。第2層は、層厚5cm～25cmで暗灰黄色の客土である。第3層は、層厚5cm～15cmで灰褐色の砂を含む客土である。第4層～第10層は、黄色系の客土で、現代遺物が混入する。第11層は、層厚5cm～20cmで黄褐色の粘質土である。第12層は、層厚5cm～25cmで灰色の砂粒を含む粘質土である。第13層は、層厚約5cmでトレンチ南西の一部に所在するにじみ黄色の粘質土である。第14層は、5cm～20cmで灰色の粘質砂土である。第15層は、層厚5cm～25cmで灰白色の粘質土である。第16層は、層厚5cm～20cmで灰色の粘質土中に土師器片を包含するが、摩耗が著しいことから二次的な堆積の様相を示している。第17層は、層厚5cm～25cmでオリーブ灰色のシルト層である。第18層は、トレンチの南西部に薄く堆積する灰白色の粘質土である。第19層は、層厚5cm～15cmでトレンチのほぼ全体に堆積する黄褐色の粘質土である。第20層は、薄く堆積する灰色の粘質土である。第21層は、層厚10cm～20cmで黒色の粘質土である。第22層は、層厚10cm～25cmで灰色の粘質土である。第23層は、層厚10cm～20cmで砂粒を含む灰色土である。第24層は、層厚が50cm以上で黒褐色の粘質土中に小枝等の流木を多く含む。

遺構は検出されなかつたが、第16層で数点の土師器片が検出され、破断面に摩耗が認められたことから二次的な堆積と考えられる。

#### 第8トレンチ(Tr-8) [第12・21・24図 図版3・6・32]

調査トレンチは、里仁古墳群が展開する尾根裾の竹林に2.0m×5.0mの北西×南東トレンチを設定し、地表下2.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～15cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚約10cmで灰黄褐色の木根等の腐植土である。第3層は、層厚5cm～20cmで明褐色の旧地表土が上方から流入したものである。第4層は、層厚約20cmでにじみ橙色の旧地表土が上方から流入したものである。第5層は、層厚5cm～15cmで黄褐色の旧地表土が上方から流入したものである。第6層～第9層は、黄色系の客土で、古代以降の遺物が混在する。第10層は、層厚40cm～10cmで黄褐色の砂質土である。第11層は、層厚約15cmでトレンチ北西の一部に堆積する灰黄褐色の砂質土である。第12層は、層厚5cm～15cmでトレンチ北西の一部に堆積する暗灰黄色土である。第13層は、層厚約10cmでトレンチ北側の一部に堆積するにじみ黄色の砂粒土である。第14層は、層厚5cm～20cmでトレンチの西側の一部に見られるにじみ黄橙色土である。第15層は、層厚約5cmと薄くトレンチの中央部に堆積するにじみ黄褐色土である。第16層は、



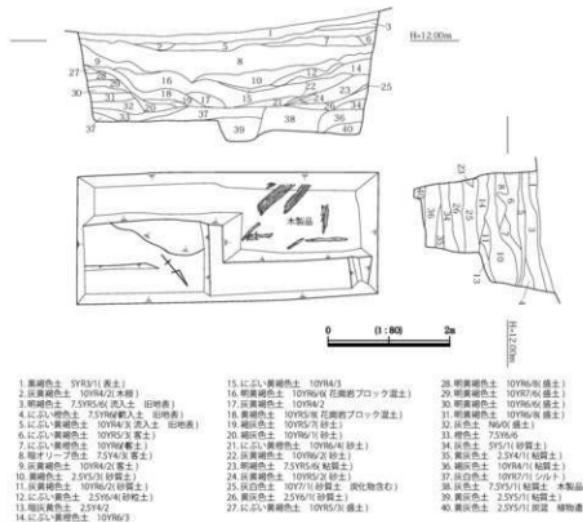
第20図 大柄遺跡 第7トレーンチ実測図

層厚15cm～30cmで花崗岩のブロックが混在する明黄褐色土である。第17層は、層厚約20cmでトレーンチ中央部の一部に堆積する灰黄褐色土である。第18層は、層厚10cm～20cmでトレーンチ南側に堆積し、花崗岩のブロックが混在する黄褐色土である。第19層は、層厚約10cmでトレーンチの南側の一部に堆積する褐灰色砂土である。第20層は、層厚約15cmでトレーンチの南側の一部に堆積する褐灰色砂土である。第21層は、層厚約10cmでトレーンチ北西の一部に堆積するにぶい黄橙色の砂土である。第22層は、トレーンチ北西の一部に薄く堆積する灰黄褐色の砂土である。第23層は、層厚約20cmでトレーンチ北西の一部に堆積する明褐色の粘質土である。第24層は、北東の第7トレーンチに薄く堆積する灰黄褐色の砂土に相当するものである。第25層は、層厚約20cmでトレーンチ北西の一部に堆積する灰白色の砂質土で、炭化物を多く含む。第26層は、層厚10cm～20cmでトレーンチ北西の一部に堆積する黄灰色の砂質土である。第27層は、層厚約15cmでトレーンチ南東に堆積するにぶい黄褐色土である。第28層は、層厚約15cmでトレーンチ南東に堆積する明黄褐色土である。第29層は、層厚約15cmでトレーンチ南東に堆積する明黄褐色土である。第30層は、層厚約10cmでトレーンチ南東に堆積する明黄褐色土である。第31層は、層厚約15cmでトレーンチ南東に堆積する明黄褐色土である。第32層は、層厚約25cmでトレーンチ南東に堆積する灰色土である。第33層は、層厚5cm～15cmでトレーンチ南東に堆積する橙色土である。第34層は、層厚約15cmでトレーンチ北西の一部に堆積する灰色の砂質土である。第35層は、層厚約15cmでトレーンチ北側の一部に堆積する黄灰色の粘質土である。第36層は、層厚約25cmでトレーンチ北西の一部に堆積する褐灰色の粘質土で炭化物を含む。第37層は、層厚約20cmで灰白色のシルト層である。第38層は、層厚約40cmでトレーンチのやや北西寄りに堆積し、黄灰色の粘質土中に木製品が検出された。第39層は、層厚約40cmでトレーンチのほぼ中央に堆積する灰色の粘質土である。第40層は、層厚約20cmでトレーンチ北西の一部に堆積する黄灰色土で炭化物、植物遺体を多く含んでいる。

第9層までは、厚く客土が施されていたが、第27～32層を掘り込んでの堤又は、水路が築かれていた可能性が考えられ、堤内にはシルト層が厚く堆積しており永期に渡って水が溜まっていたと推定され

る。堤内と推定される第38層の粘質土中で、端部が鋭角的に切断されたと思われる木製品が2点と断片的な物が数点検出されたが、土器等の時期を特定できる遺物等は検出されなかった。木製品は、基本的に東西方向に横たわり、板状の物が大半を占め、腐食が進行して木目だけが際だつが良好な遺存状態にあり、年代測定を実施した結果は第3章に記載のとおりである。

出土遺物は、第2層で検出された瓦質の土鍋（16）で、体部から底部を欠損する。口縁部は体部から大きく外反し、折り曲がる頸部から外方へ開いて立ち上がり口縁に至る。口縁上端部は、平になるよう強くヨコナデを施している。外面頸部下に指頭痕調整が残り、内外面共にヨコナデが施され、外面全体に煤が付着しており、器形等から鎌倉時代と思われる。



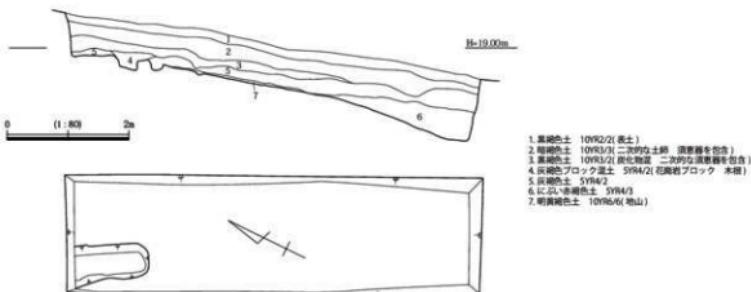
第21図 大柄遺跡 第8トレンチ実測図

### 第9トレンチ(Tr-9) [第12・22図 図版3・6]

調査トレンチは、里仁古墳群が展開する丘陵裾の緩やか傾斜地の竹林に2.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約15cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚20cm~40cmの暗褐色土で、土師器片、須恵器片を数点検出したが、著しく摩耗しており上方からの二次的な堆積と思われる。第3層は、層厚10cm~25cmでトレンチの北側に所在し、炭化物を含む黒褐色土で、須恵器片を数点検出したが、著しく摩耗していたことから上方からの二次的な堆積と思われる。第4層は、層厚約30cmで木根が腐植した灰褐色土である。第5層は、層厚約10cm~30cmの灰褐色土である。第6層は、層厚約50cmでトレンチ南側に堆積するにぶい赤褐色土である。第7層は、明黄褐色の地山である。

遺構は検出されなかったが、第2・3層で数点の土師器片・須恵器片が検出され、破断面に摩耗が認められたことから二次的な堆積と考えられる。



第22図 大柄遺跡 第9トレンチ実測図

#### 第10トレンチ (Tr-10) [第12・23・24図 図版3・6・7・8・30~32]

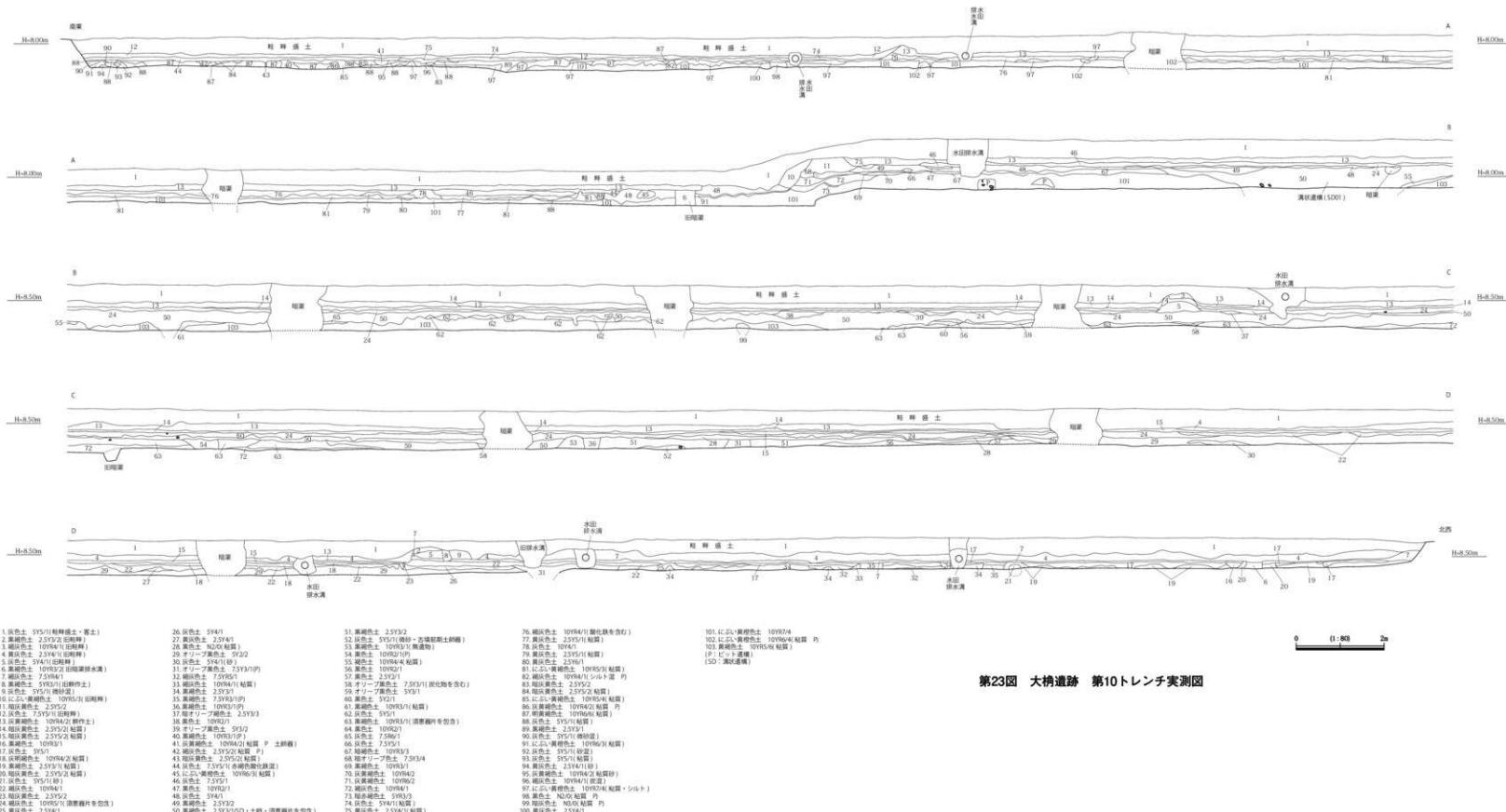
調査トレンチは、大柄集落の北東に広がる水田域の一部で、鳥取西道路の計画路線に沿って掘削された仮設の水田排水路であり、包含していたと思われる遺物の大半は掘削土と共に搬出されていた。水路の断面形は、地山まで掘り下げる逆台形を呈し、上面幅約2.0m、底面幅約0.5mで、深さは0.6m~1.2mを測り、延長160mのはば東西方向の新設水路である。当該調査では、水路法面の南側を精査後に分層し、遺構、遺物の包含状況を断面的に確認したものである。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約40cmで今回新たに設けられた水田の畦畔である。第2層から第24層が灰色系の耕作土である。第15層~第24層が褐色系の畦畔である。第25層から下層で遺物の包含が認められ、地山を掘り込んだ土坑・ピットの一部を含めて13基を確認し、第50層では幅の広い溝状遺構内に土師器を主体とする多くの遺物を確認した。遺物包含層は、第102層までは安定して堆積し、大半の土坑・ピット遺構は黄褐色の地山若しくは地山の前層あたりから掘り込まれている。

検出された土坑・ピット遺構は、排水路の保護を優先し、更に掘り下げる調査は行わなかったことから検出面での記録となった。9基の土坑・ピットはほぼ円形で、検出面での口径は25cm~70cmを測り、深さは前述のとおり確認に至らなかったが、比較的小規模のものもあり、何れもローム層の地山を掘り込んでおり、各土坑・ピット内には黒褐色土が流入していることから際立って遺存状態の確認ができる。

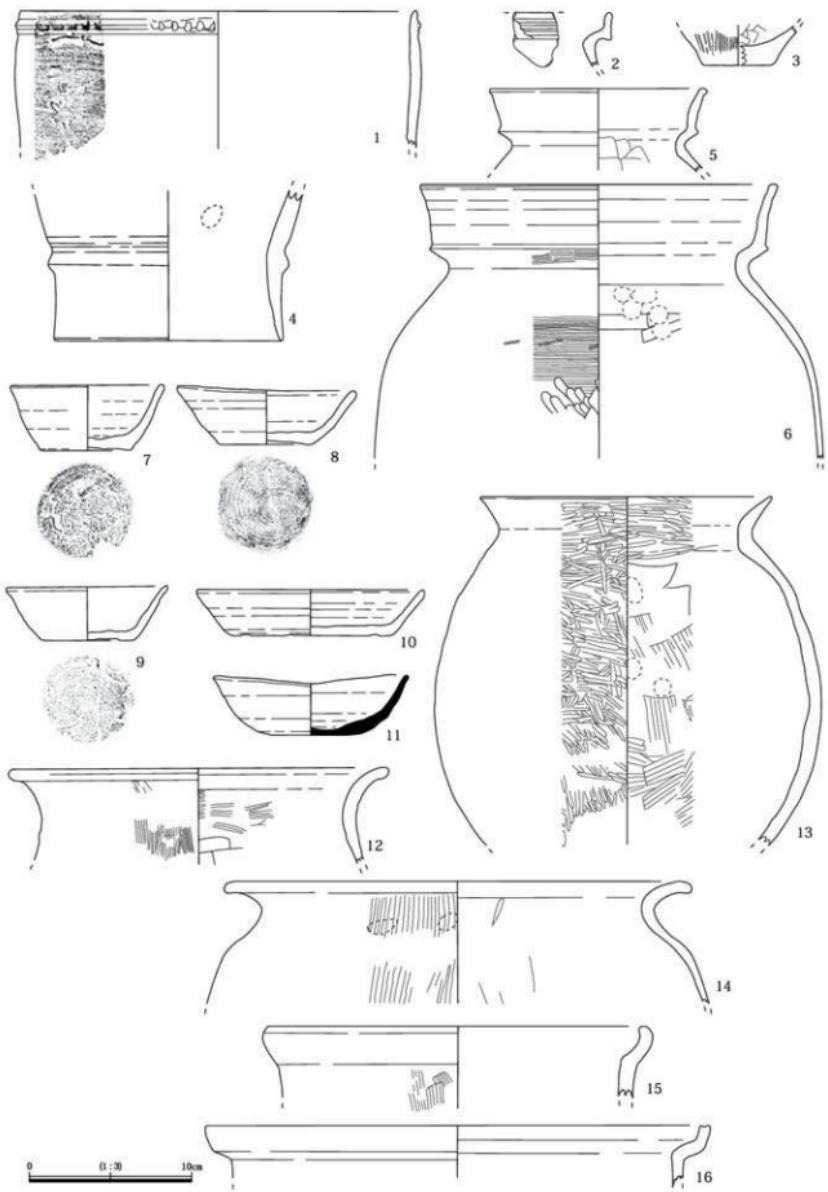
溝状遺構は、隣接する平成25年度の試掘調査の第4トレンチで検出されている溝状遺構が南方に延びているもので、堀込面の幅は約5.5mを測り、人為的なものと思われるが、底面に砂礫等の堆積物が見られないこと、埋土中からの出土遺物に坏類が多く見られたこと等から祭祀的要素も含めて検討課題となろう。

出土遺物は、耕作土下の第25層以下で出土しており、下位の層中では弥生時代後期の遺物を検出し、上位の層中では鎌倉期の遺物を検出している。(2)はほぼ直立する複合口縁の甕で、口縁端部は丸くつまんでおさめる。屈曲部の稜は、わずかに下方へ突出して頭部へとつながる。内外面共にヨコナデ後、口縁外面に3条の櫛描平行沈線を施す。(3)は少し上げ底の底部で、底面から大きく外反して立ち上がる。内面は、下から上へのヘラケズリ後ナデを施している。外面は、上方へのハケメ後底部にヨコナデを施す。(4)は、凸帯部の上位から口縁部までが欠損している甕で、底面の復元口径は14.2cmを測り、底面からほぼ直立した上方に直径14.9cmの凸帯が巡るが摩耗が著しい。橙色の内面に炭化物が多く付着



第23図 大柄遺跡 第10トレンチ実測図





第24図 大柄遺跡 出土遺物実測図

する。凸帯の上部に指押さえの指頭痕が残るが、内外面共に摩耗が著しく調整の判別は不可能である。(2・3・4)ともに弥生時代後期の所産である。(5)は外傾する複合口縁を持ち、口縁端部は外側に折り曲げて肥厚させている。屈曲の稜は、水平方向に突出している。口縁内外面にヨコナデを施し、肩部内面に右斜上方向へのヘラケズリを施す。口縁外面に煤が付着する。古墳時代前期の所産である。(15)は口縁部が体部から大きく外反する瓦質の土鍋で、屈曲する頸部からやや内湾して立ち上がり口縁に至る。口縁端部は、内側に折り曲げて内湾させ、つまんで丸くおさめる。外面に煤が付着する。内面は力を加えたヨコナデにより、やや内湾して肥厚する。外面は、縦方向のハケメの後口縁部にヨコナデ調整を施している。鎌倉時代～室町時代の所産である。

### 小結

今回の調査は、道路建設用地の発掘調査であり、幅狭の範囲であるが低地～丘陵裾部に至る要所にトレンチを設定し遺構、遺物の包含状況を確認した。

その結果、低地の水田部では弥生時代～古墳時代の土坑、ピットと大規模な溝状遺構を検出し、縄文時代晚期から中世に至る遺物の包含状況も確認された。丘陵裾部では、柱穴遺構、堤内に埋没したと思われる多くの木製品が検出された。検出された遺構、遺物の状況から低地では縄文時代晚期から人の生活痕跡が見られるが、丘陵の裾部では現水田部に比して新しい時期の遺物等が見られたことから、当初の生活拠点は低地に求められていたように思われた。この調査は東西方向への知見であり、今後は南北方向への調査を実施する機会があれば、更に大柄遺跡の範囲、定住生活の詳細等が明らかになるものと思われるが、後続して実施される道路建設用地内の詳細調査でも大きな成果がもたらされると思われる。

### 第3節 良田1号墳

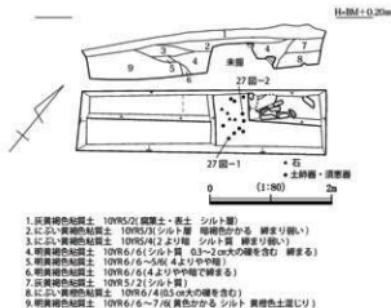
良田1号墳は湖山池南岸の鳥取市良田に所在する。現在の湖畔から南に150m、湖山池を見下ろす標高22m余りの丘陵先端に位置し、細長く南に入り込む小平野の西側谷口部にあたる。遺跡分布図では前方部を丘陵頂部の南西へ向ける全長23mの前方後円墳とされる。西側の丘陵頂部には全長26mの前方後円墳である良田2号墳が所在する。



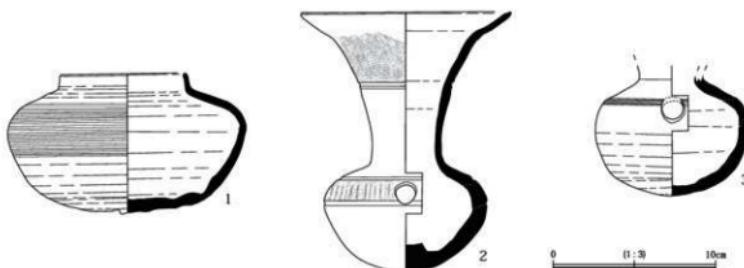
第25図 良田1号墳 調査トレンチ位置図

### 第1トレンチ(Tr-1) [第25~27図 図版8・32]

Tr 1は1号墳の後円部にあたる丘陵先端頂部に、主体部の確認を目的として設定した後線方向に長軸をとる1×4m規模のトレンチである。腐葉土厚く、トレンチ中央やや東寄りの腐葉土および表土中から須恵器および土師器片が出土。さらにそれらの下層の暗褐色かかる第2層のぶい黄褐色粘質土より、完形に近い須恵器が土師器体部片・角蹀らとともに出土した。これらの土器を残してトレンチの掘り下げを行った結果、第2層を中心として逆台形状に窪む第3~6層が確認された。状況から、後線に直交する1号墳の埋葬施設とみられ、検出した土器は墓壇上の供獻土器と考えられる。また、第9層は盛土、トレンチ北東側で検出した15~40cm大の石については埋葬施設に伴う可能性もあるが、性格については明らかにできなかった。遺物は表土および第2層出土土器のうち露出している個体については取り上げを行った。須恵器長頸壺、短頸壺、趨、土師器体部片があり、須恵器については部体がほぼ形を保った状態であり、肩部を中心に外面風化がすすむ。短頸壺(1)は完形で口径7.9cm、器高8.6cm、底部外面中央部にヘラ切り痕を残し反時計回りのヘラ削り、肩部にカキ目を施す。趨(2)(3)は同様の形態であるが(3)はやや丸味をもち円孔も上位にある。(2)の口縁部は体部径よりやや広がる口径12.9cm、口縁部高は体部高の約1.5倍をもち、器高は15.9cmを測る。(2)は底体部外面丁寧なナデ、肩部1条の沈線間に連続刺突文、口縁部上位に2条の沈線と17~18条の波状文を施す。



第26図 良田1号墳 第1トレンチ実測図



第27図 良田1号墳 第1トレンチ出土遺物実測図

## 小結

良田1号墳は、湖山池が眼下に広がり日本海を眺望する独立丘陵上にあり、古墳の立地としては優位性が窺える良所である。今回、古墳の墳形や規模などの点は明らかにはできなかったが埋葬施設の所在が確認された。埋葬施設は東西方向の丘陵主稜線に対し直交する軸を持ち、墓壙幅は1.5～2.4m程度とみられる。墓壙上の供獻土器である須恵器の年代観から、古墳は6世紀前半の時期と考えられる。

## 第4節 良田所在遺跡

良田所在遺跡は湖山池南岸の鳥取市良田に所在する。現在の湖畔から細長く南へ広がる小谷平野と、さらに枝状に入り込む狭谷部を中心と展開する。この谷部および周辺丘陵上には遺跡や古墳の分布が確認されているが、特に湖畔から300m南の東側に開けた小谷部には、7世紀末～9世紀代の木簡、169点の墨書き土器や円面鏡が出土した良田平田遺跡が展開する。今回の調査トレンチは、良田平

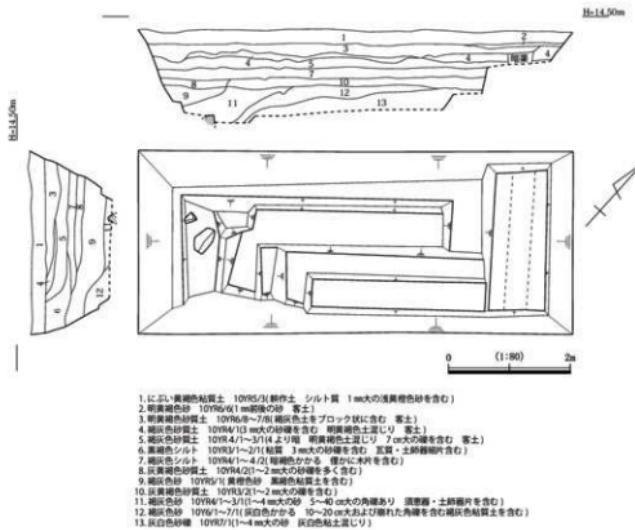


第28図 良田所在遺跡 調査トレンチ位置図

田遺跡南の谷東側に開いた小谷口に、南からTr 1、Tr 2、平野を挟んで谷西側の小谷口にTr 3を設定した。

### 第1トレンチ(Tr-1) [第28・29図 図版8・9]

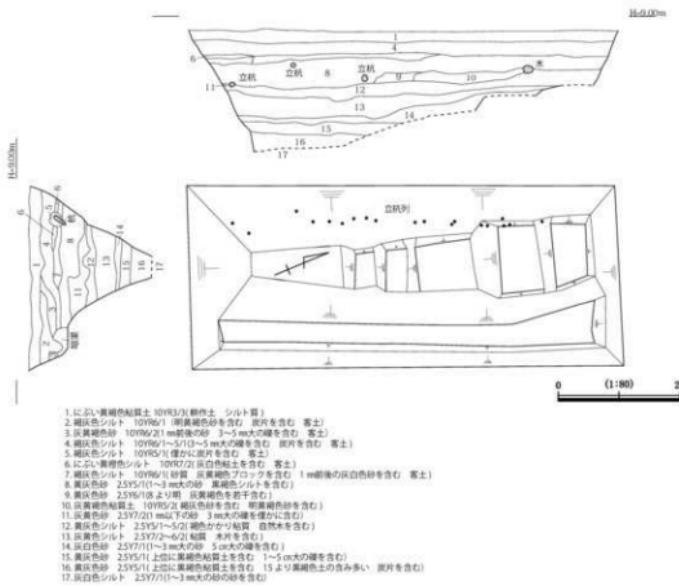
湖山池湖畔から600m南へ入りさらに東側へ開けた幅25mほどの狭谷口に設定したトレンチである。この小谷は圃場整備により四段の段状の水田が広がり、最下段の水田中央東寄りに谷の傾斜に対し直交方向、 $3 \times 7$ mのトレンチTr 1を設定した。地表面の標高14.28mを測る。地表下1.9mの標高12.47mまで掘り下げを行った。第1層耕作土下の第2、3層は真砂土が混じる客土で、第4層上面から暗渠坑を掘り込む。第4、5層は圃場整備時の埋め立て土である。以下は灰黄褐色砂と褐灰色土が混じった堆積土で、瓦質鍋口縁部が出土した第6層は粘質で黒色かかるが、以下は灰黄褐色砂の含みが下層ほど増え、第7層以下はトレンチ南西隅への傾斜が認められる。礫を多く含む第11層は40cm大の角礫が集中し、角礫間で5~6世紀代の須恵器蓋杯底部片、土器細片が出土している。第12、13層は灰白色系の砂・砂疊である。



第29図 良田所在遺跡 第1トレンチ実測図

### 第2トレンチ(Tr-2) [第28・30図 図版8・9]

湖山池湖畔から450m南へ入りさらに東側へ開けた幅20mほどの狭谷口に設定したトレンチである。この小谷は圃場整備により四段の段状の水田が広がり、最下段の水田北寄り農道下に、谷の傾斜に対し直交方向の $3 \times 7$ mのトレンチTr 2を設定した。地表面の標高8.82mを測る。地表下2.0mの標高6.80mまで掘り下げを行った。第1層耕作土下の第2、3層は暗渠の上層埋土で、第4、6、7層は圃場整備時の埋め立て土である。また、トレンチ西壁沿いに圃場整備以前の杭列を検出した。第8層以下は北から南および東から西向きへの傾斜が認められ、褐灰色土を基調に灰黄褐色もしくは灰白色砂が混じった堆積土である。白色かかる第13層灰黄色シルトや第14層灰白色砂を挟んで、再び黒褐色粘質土を含む黄灰色砂層、最下層は灰白色シルト層である。杭列以外に遺物は認められなかった。



第30図 良田所在遺跡 第2トレンチ実測図

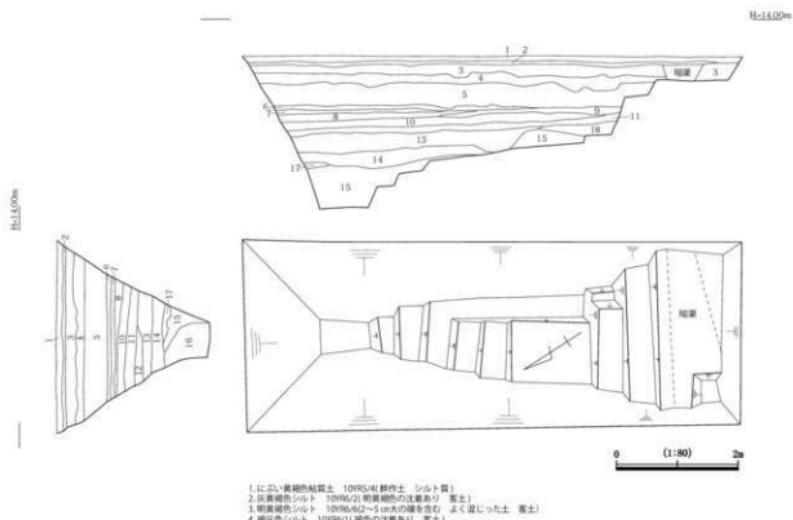
### 第3トレンチ(Tr-3) [第28・31図 図版8・9]

湖山池湖畔から600m南へ入った西側へ開いた幅10mほどの谷に谷の傾斜に対し直交方向に設定した3m×8mのトレンチである。地表面の標高13.38mを測る。地表下2.5mの標高10.88mまで掘り下げを行った。第1層耕作土の下は第6層までが圃場整備時の整地層で、特に第5層の褐灰色シルトは所謂真砂土で厚さ40cmを測る。第7層以下、トレンチ北東隅へ向けて傾斜が認められ、第14層以下の傾斜が著しい。第7～12層は黄灰色シルトおよび粘質土で、第13層黄灰色疊を挟んで第14層黄灰色シルト、再び第15層砂疊と互層状になる。第13層および第15層は崩れた地山疊を多く含む崩落状の堆積である。遺物は客土中から須恵器片、陶磁器片、ビー玉、第8層から土錘4点、叩き目のある土師器片、第10層から弥生土器底部片、土師器細片、第11層から土師器片、第13層から瓦質土器片、土師器細片、第14層から瓦質土器片、漆器片が出土している。

### 小結

良田の谷が狭小となる東側谷部には、古代官衙関連施設が存在したと考えられる良田平田遺跡が広がる。Tr 2はそこから尾根一つを隔てた100m南に位置し、同様に東に開けた狭小谷でありながら、圃場整備以前の杭列と旧自然地形を確認したにとどまる。遺物は皆無であった。さらに南のTr 1も谷部の傾斜と堆積層から僅かに中世瓦質鍋片や古墳時代後期の須恵器片などが出土するに過ぎない。対岸丘陵際の水田部に設定したTr 3についても谷傾斜の確認とその堆積層から弥生土器や土師器片、瓦質片、漆器片などが出土しておりTr 1～3の中で最も遺物量が多いが一袋分にも満たずすべて細片である。良田平田遺跡の展開する小谷部ではその開発が縄文時代晩期に遡る可能性が高い。

いとされ、古墳時代には井戸や掘立柱建物が構築されている。また丘陵上の良田古墳群や高住古墳群などとの関連などからも谷部一帯について一応の注視は必要と思われる。



- 1.に(2)黄褐色粘土質土 1095/41耕作土・シルト質土
- 2.灰黃褐色シルト 1096/2(削)黄褐色の(注着あり) 粘土
- 3.明褐色シルト 1096/2(削)黄褐色の(注着あり) よく混じった土、粘土
- 4.褐色シルト 1097/1(削)黄褐色の(注着あり) 黄褐色のシルト
- 5.褐色土 1097/2灰 黄褐色土ブロックを含む 真砂土、粘土
- 6.に(2)黄褐色シルト 2.5Y4/3(2)やや褐色の(注着あり) 線維とかかる 粘土
- 7.黄褐色シルト 2.5Y4/1(削)黄褐色を含む 由来不明
- 8.真砂土 2.5Y4/1(削)黄褐色を含む 黄褐色のシルト
- 9.真砂色シルト 2.5Y4/1~4(2)黄色を含む 真砂色粘土ブロックを多く含む 土層、土跡断片含む
- 10.真砂色シルト 2.5Y4/10(2)灰色 黄褐色を含む 0.5~2mの大塊を含む 生生土部、土跡断片含む
- 11.真砂色シルト 2.5Y4/10(2)灰色 黄褐色を含む 0.5~2mの大塊を含む 土層、1~5mの大塊を含む 土跡断片含む
- 12.真砂色粘土 2.5Y4/1~4(2)シルト混じり 黄褐色を含む
- 13.真砂色砂質土 2.5Y6/10(3~10cm大の隙間) 1m削取の砂 黄褐色粘土を含む 瓦面・土跡断片含む
- 14.真砂色シルト 2.5Y4/1~3(2)真砂色を含む 3~5cmの大塊を含む 瓦面・漆器片含む
- 15.真砂色シルト 2.5Y4/1~3(2)真砂色を含む 3~5cmの大塊を含む 瓦面・漆器片含む
- 16.真砂色シルト 2.5Y4/2(2)真砂色を含む 瓦面 黄白色粘土(土じり)
- 17.真砂色砂 2.5Y4/10(1~3 m)の砂色砂を含む 5cmの大塊を含む
- 18.真砂色粘土シルト 2.5Y4/1(2)灰を含む 1~5 mの大塊を含む 瓦白色粘土を含む

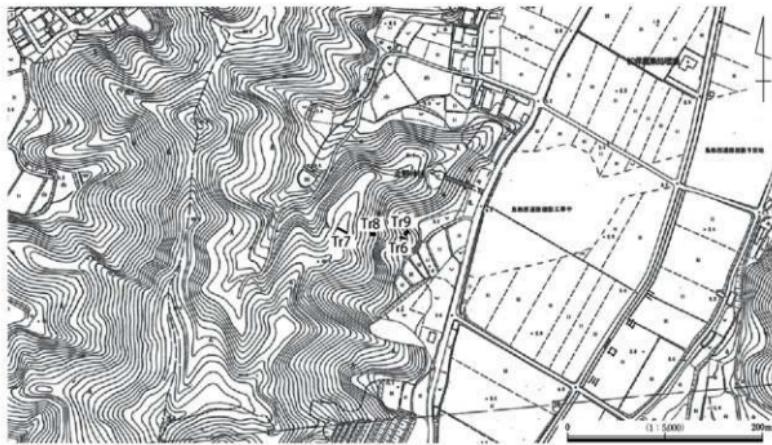
第31図 良田所在遺跡 第3トレンチ実測図

## 第5節 高住宮ノ谷古墳群

高住宮ノ谷古墳群は、池と名の付く湖沼では国内最大で、周囲長18kmを測る汽水湖の「湖山池」南岸の高住集落後背地に位置し、標高921mの鶴峰山系から派生する丘陵尾根の先端部に展開している。また、丘陵の尾根上からは、湖山池周遊ポイントの拠点となっている「青島」がヒヨウターン形に眺望できる等、風光明媚な丘陵部で古墳の築造にあたっての選地条件が満たされている。

発掘調査の対象となっている一帯は、元果樹園の荒廃地と檜の植林に覆われていたが、道路建設工事に先行して伐採されており、丘陵を形成している花崗岩が風化したいわゆる真砂土の露頭が点在し、計画路線外の隣地では真砂土の採土が行われている。

今回実施した発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に伴う試掘調査で、丘陵の道路工事計画路線の稜線上に所在する古墳の有無とその規模を確認することを目的に、平成22年度に鳥取市が実施した調査対象地を更に拡大して継続的に調査するもので、既調査区の北側に4箇所のトレンチを設定し確認調査を行った。なお、トレンチNoについては、既調査済トレンチNoを継承している。

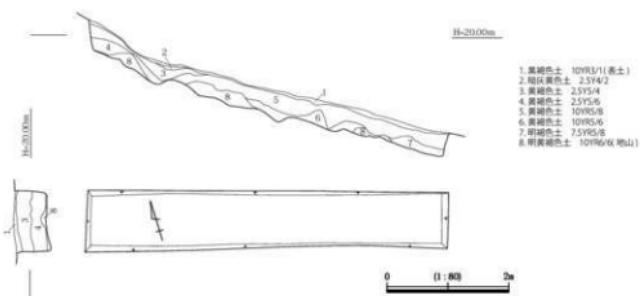


第32図 高住宮ノ谷古墳群 調査トレンチ位置図

### 第6トレンチ(Tr-6) [第32・33図 図版9]

調査トレンチは、主丘陵尾根から東に派生する東支稜尾根の末端部に1.0m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下0.5mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚2cm～10cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚約5cmで暗灰黄色の砂質土が、トレンチ西側の一部に所在する。第3層は、層厚5cm～20cmで黄褐色の砂質土が、トレンチ西側の一部に所在する。第4層は、層厚5cm～20cmで黄褐色の砂質土がトレンチ西側の一部に所在する。第5層は、層厚10cm～40cmで黄褐色の細粒の砂質土である。第7層は、層厚5cm～20cmの明褐色の砂質土がトレンチ東側の一部に所在する。第8層は、明褐色の起伏を呈する地山で、墳丘を特定するような遺構、遺物共に検出されなかった。



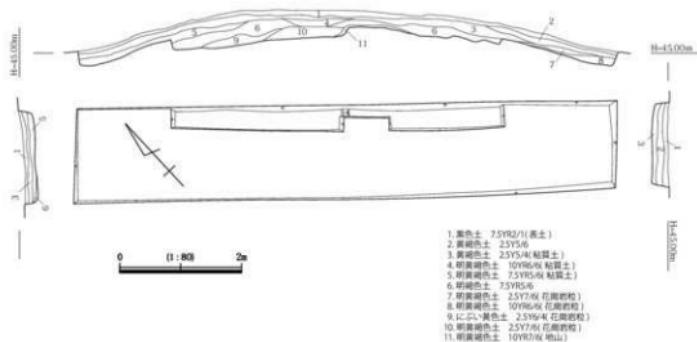
第33図 高住宮ノ谷古墳群 第6トレンチ実測図

### 第7トレンチ(Tr-7) [第32・34図 図版9・10]

主丘陵尾根で路線計画範囲の最北に丘陵頂部を横断する1.5m×9.0mの東西トレンチを設定し、トレンチを約30cm掘り下げたところで、詳細な確認を行うために、トレンチの中央に0.3m×3.0mのサブトレンチを設定し、地表下0.6mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約5cm～10cmで黒色の表土である。第2層は、層厚約10cmの黄褐色土で、トレンチ東側の一部に所在する。第3層は、層厚5cm～15cmで黄褐色の粘質土である。第4層は、層厚約10cmで明黄褐色の粘質土で丘陵頂部の一部に所在する。第5層は、層厚約15cmで明褐色の粘質土でトレンチの西側に所在する。第6層は、層厚15cm～30cmの明褐色土である。第7層は、層厚約8cmで明黄褐色の砂質土でトレンチ東側の一部に所在する。第8層は、層厚約10cmで明黄褐色の砂質土で、トレンチ東側の一部に所在する。第9層は、層厚約15cmでくびい黄色の砂質土でトレンチのやや西側の一部に所在する。第10層は、層厚約18cmで明黄褐色の砂質土でトレンチの中央部に所在する。第11層は、明黄褐色の硬くしまった地山である。

調査前の地表観察では、不自然な高まりとわずかな段差が認められたことから古墳の可能性を指摘されたが、遺構、遺物共に検出されなかった。



第34図 高住宮ノ谷古墳群 第7トレンチ実測図

### 第8トレンチ(Tr-8) [第32・35図 図版9・10]

調査トレンチは、主丘陵尾根の東斜面に点在する凹地へ2.0m×5.0mの東西トレンチを設定し、地表下0.7mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

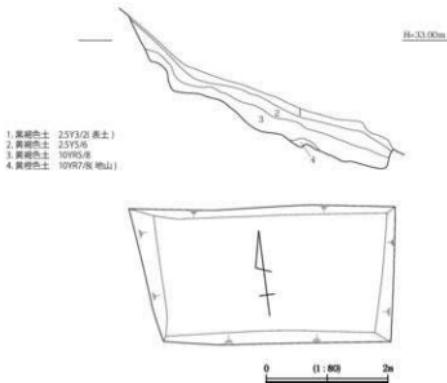
基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm～15cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚15cm～25cmで黄褐色砂質土である。第3層は、層厚15cm～35cmで黄褐色の砂質土である。第4層は、黄橙色で不整形な起伏の地山が所在する。

調査前の地表観察では、陥没した横穴墓の可能性が指摘されたことから試掘調査に至ったが、自然地形で遺構、遺物共に検出されず、風倒木による凹地であると思われる。

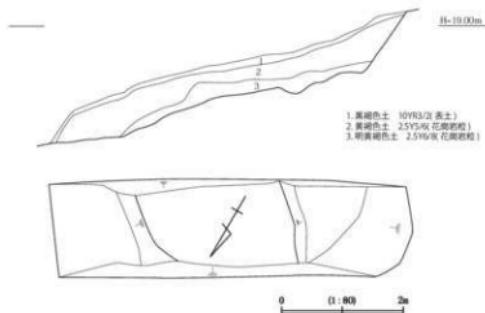
### 第9トレンチ(Tr-9) [第32・36図 図版9・10]

調査トレンチは、主丘陵尾根の東斜面に点在する凹地へ1.5m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下0.7mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約10cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚20cm～60cmで黄褐色の砂質土である。第3層は、層厚15cm～40cmで明黄褐色の砂質土である。3層の下位には、明黄褐



第35図 高住宮ノ谷古墳群 第8トレンチ実測図



第36図 高住宮ノ谷古墳群 第9トレンチ実測図

色で不整形な起伏の地山が所在する。

調査前の地表観察では、陥没した横穴墓の可能性が指摘されたことから試掘調査に至ったが、自然地形で遺構、遺物共に検出されず、風倒木による凹地であると思われる。

#### 小結

今回の試掘調査では、東斜面に突出する支稜尾根に設定した第6トレンチでは、流失した砂質土が起伏を形成したもので、人為的な痕跡は認められなかった。

第7トレンチでは、丘陵尾根の廃園となっている果樹園との間に僅かながら段差を持つ高まりが認められたことから墳丘の可能性も想定されたが、地表下から比較的浅く地山に達し、周溝、埋葬施設等の墳墓を特定する遺構は検出されなかった。この尾根の高まりは低く、墳丘が流失若しくは後世に著しい削平を受けていた可能性も残るが、墳墓としては特定しがたい。

第8・9トレンチは、傾斜面に際だつ凹地が認められたことから、横穴墓の所在が想定されたが、土層観察でも安定した自然堆積の様相を示しており、何れも倒木の根に抉り取られた凹地であると判断された。

#### 第6節 高住宮ノ谷遺跡

高住宮ノ谷遺跡は、池と名の付く湖沼では国内最大で、周囲長18kmを測る汽水湖の「湖山池」南岸に位置し、湖畔の高住集落から南方の丘陵裾に所在している。

発掘調査の対象となっている一帯は、前面に水田が耕作され、近年の発掘調査で古墳時代の遺構、遺物が検出されている。

今回の発掘調査は、高住集落の守護神である北野神社南方丘陵の裾部を中心とするもので、北野神社の南に形成された小さな渓地形の裾部では、流水紋で知られる高住銅鐸の出土地として伝えられている所在地も含まれていることから、調査に先立ち地中電磁探査を行ったが、良好な金属反応は得られていない。また、本調査は、平成22年度に鳥取市が実施した調査対象地を更に拡大して継続調査とするもので、既調査区の北側と東に面する傾斜地に6箇所のトレンチを設定し確認調査を行った。

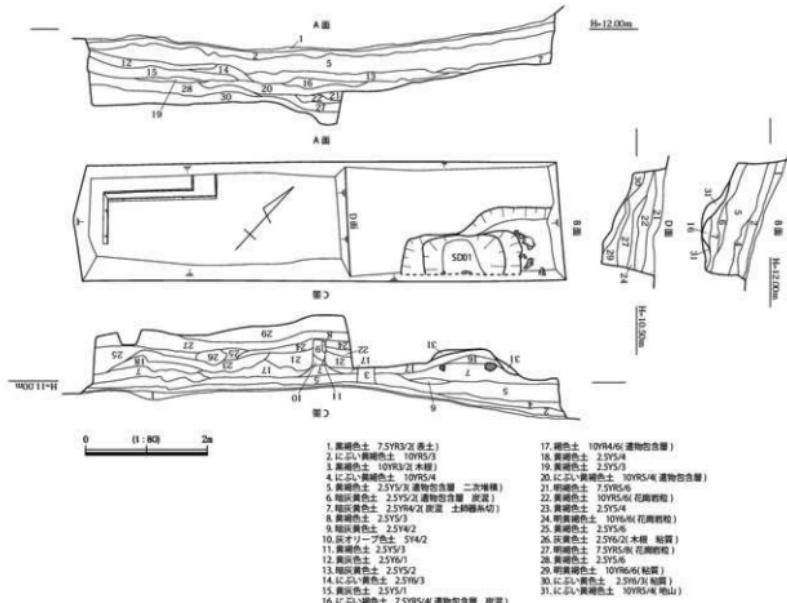


第37図 高住宮ノ谷遺跡 調査トレンチ位置図

#### 第4トレンチ(Tr-4) [第37~39図 図版9~11・32]

北野神社南方の丘陵裾部で、高住銅鐸の出土地として伝えられている北野神社南の小さな谷地形の緩斜面に2.0m×8.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.2mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。また、約70cm掘り下げた所で、溝状遺構を検出し、遺構の保護と詳細な確認調査を行うために、トレンチの中央から南側を地山まで掘り下げ、1条の溝状遺構を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚約3cmで黒褐色の表土ある。第2層は、層厚10cm～20cmにぶい黄褐色土である。第3層は、木根の腐食後に堆積した黒褐色土である。第4層は、層厚約10cmにぶい黄褐色土で、トレチ北側に所在する。第5層は、層厚10cm～40cmの黄褐色土で土師器片、須恵器片を包含するが、遺物の器壁が著しく摩耗していること、新旧の土器が混在することから、上方からの二次堆積と思われる。第6層は、層厚約10cmの暗灰黄色土で、炭化物を含み土師器片を包含する。第7層は、層厚10cm～30cmの暗灰黄色で、溝状遺構の上面に堆積し、炭化物を含み底部に糸切り痕の残る土師器片を包含する。第8層～第11層は、後世に掘られた擾乱層で黄色系の流入土が堆積している。第12層は、層厚10cm～15cmの黄灰色土でトレチ南側の一部に所在する。第13層は、層厚10cm～20cmの暗灰黄色土でトレチ東側の一部に所在する。第14層は、層厚約10cmにぶい黄色土でトレチ東側の一部に所在する。第15層は、層厚10cm～20cmの黄灰色土南側の一部に所在する。第16層は、層厚5cm～15cmにぶい褐色土で炭化物を含み、土師器片を包含する溝状遺構の埋土である。第17層は、層厚8cm～15cmの褐色土で土師器片を包含し、一部が溝状遺構の底面に堆積している。第18層は、層厚約15cmの黄褐色土でトレチ南側の一部に所在する。第19層は、層厚約10cmの黄褐色土でトレチで南側の一部に所在する。第20層は、層厚5cm～15cmにぶい黄褐色土で土師器片を包含する。第21層は、層厚15cm～30cmの明褐色土である。第22層は、層厚約10cmで黄褐色の砂質土である。第23層は、層厚10cm～20cmの黄褐色土でトレチの南側に所在する。第24層は、層厚約10cmで明黄褐色の砂質土である。第25層は、層厚5cm～40cmの黄褐色でトレチの南側に所在する。第26層は、木根が腐食した灰黄色の粘質土である。第27層は、層厚10cm～30cmで明褐色の砂質土である。第28層は、層厚10cm～20cmの黄褐色土でトレチ南側に所在する。第29層は、層厚約25cmで明黄褐色の粘質土である。第30層は、層厚10cm～35cmにぶ

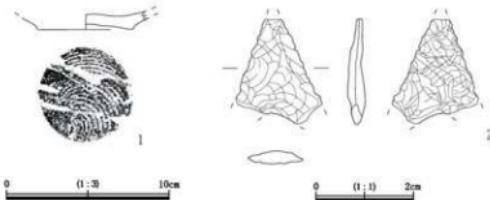


第38図 高住宮ノ谷遺跡 第4トレチ実測図

い黄色の粘質土である。第31層は、にぶい黄褐色の地山である。

遺構は、トレンチの北東面で溝状遺構(SD 01)を検出し、北から南東に屈曲する形状で一部が検出された。規模は、北面で幅約1.1m、深さは地山を掘り込んで約0.4m、東面で幅約1.2m、深さは地山を掘り込んで約0.3mを測り、比較的小規模ではあるものの検出面が一部であることからその性格は特定できなかったが、第7・16・17・20層で土師器片、須恵器片を検出した。

出土遺物は、第7層で検出された土師器の壺(1)で、底部が逆「八」の字状に大きく開いて立ち上がり、外面はナデ調整が施され、底面に糸切り痕が残る。(2)は第3層で検出された凹基無茎鐵の石鐵で、基部に抉りを持つものであり、サスカイトを材とする。先端部の先と脚部の大半を欠損するが、抉り部の痕跡が僅かに残り、先端部はほぼ直線で鋸歯状を呈し、最大残存長2.0cm、最大残存幅1.8cm、最大厚0.4cm、重さ1.04gを測る。当該トレンチを含む周辺では、他に石鐵と同時期の遺構、遺物を検出される背景ないことから、トレンチの上方からの流入土に混入したものと思われ、時期的なものは不明である。

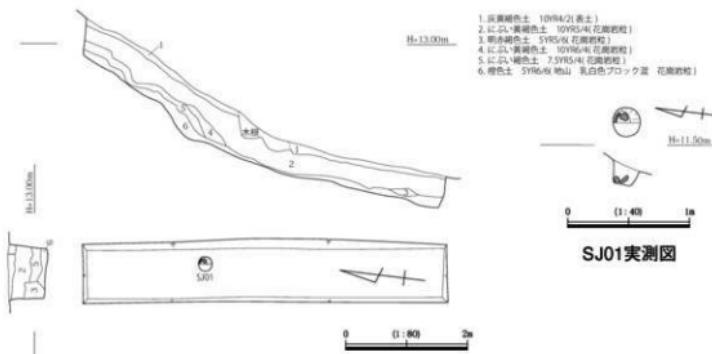


第39図 高住宮ノ谷遺跡 出土遺物実測図

#### 第5トレンチ(Tr-5) [第37・40図 図版9・11]

北野神社南側に延びる支後線の南斜面に1.0m×6.0mの南北トレンチを設定し、地表下約0.9mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認し、約70cm掘り下げた所で土器埋設遺構(SJ 01)を検出した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚約10cmで灰黄褐色の表土ある。第2層は、層厚20cm～50cmでにぶい黄褐色の砂質土である。第3層は、層厚約30cmで明赤褐色の砂質土でトレンチの北と南側の一部



第40図 高住宮ノ谷遺跡 第5トレンチ実測図

に所在する。第4層は、層厚約25cmでにぶい黄褐色の砂質土でSJ 01の掘込面である。第5層は、層厚10cm～15cmでにぶい褐色の砂質土でトレンチの北側に所在する。第6層は、橙色の地山で乳白色のブロックが混在する。

#### 【土器埋設遺構(SJ 01)】〔第37・40図 図版9・11〕

土器埋設遺構(SJ 01)は、トレンチ内の中央からやや北寄りで、緩傾斜の地山が急傾斜となる変換点で検出された。遺構を保護し、後の詳細調査に試料提供する為、今回は東面を半裁しての確認調査を行った。土坑の平面形は口径24cmの円形で、深さは20cmを測る。坑底径は15cmを測り、皿状の梢円形である。断面は、地山を掘り込んだバケツ状を呈している。

土坑内には、手の平程度の土師器片2点が検出された。土師器は、同一個体と思われる壺の胴部断片と思われるが、内面を向き合わせて東側を突き合わせ、V字形に開いて自立させている。土師器は煮沸時のものと思われる煤が多量に付着し、器壁の摩耗が著しく進行しており、断片であることから時期の特定には至らなかった。

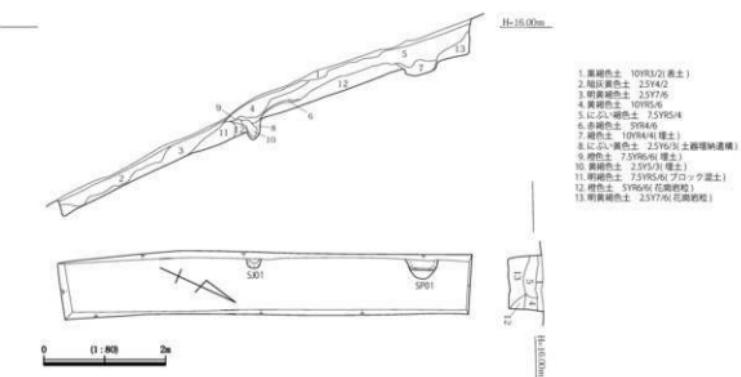
#### 【第6トレンチ(Tr-6)】〔第37・41図 図版9・11〕

北野神社南側に延びる支線の南斜面に1.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下約0.6mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認し、約30cm掘り下げた所でピット(SP 01)、土器埋設遺構(SJ 01)を検出した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚約5cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚10cm～25cmの暗灰黄色土でトレンチ南側に所在する。第3層は、層厚5cm～25cmの明黄褐色土でトレンチ南側に所在する。第4層は、層厚10cm～25cmの黄褐色土である。第5層は、層厚10cm～40cmのにぶい褐色土である。第6層は、層厚3cm程度の薄い赤褐色土である。第7層は、SP 01の埋土である。第8層は、SJ 01の埋土で、ピット底面から土師器片が1点検出された。第9層は、SJ 01の埋土である。第10層は、SJ 01の埋土である。第11層は、層厚約30cmの明褐色土で白色ブロックが混入する。第12層は、層厚10cm～35cmで橙色の砂質土でSP 01・SJ 01の掘込面である。第13層は、層厚約40cmでトレンチ北側の一部に厚く堆積している。

#### 【ピット遺構(SP 01)】〔第37・41図 図版9・11〕

ピット遺構(SP 01)は、トレンチの西面で検出された。SP 01の平面形は梢円と思われるが、トレンチ



第41図 高住宮ノ谷遺跡 第6トレンチ実測図

の西壁面でその一部が検出されたことから検出範囲での観察となった。平面短口径は約50cmで、深さは30cmを測る。坑底径は約40cmを測り、皿状の楕円形である。断面は、地山を掘り込んだ楕円形を呈し、遺構内から遺物は検出されなかった。

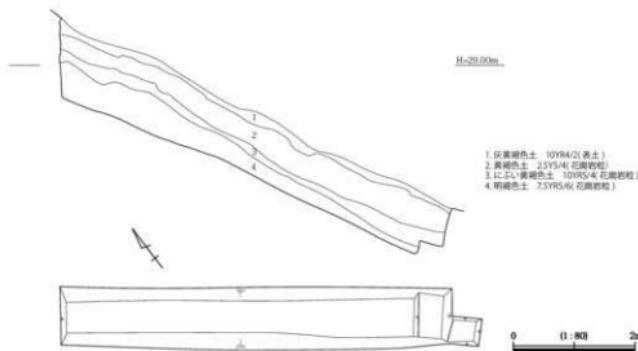
#### 【土器埋設遺構(SJ 01)】〔第37・41図 図版9・11〕

土器埋設遺構(SJ 01)は、トレンチ内のほぼ中央で、検出面は少し段差が生じる変換点で検出された。平面形は円形と思われるが、トレンチの西壁面から一部がはみ出した程度で検出されたことから検出範囲での観察となった。平面短口径は約30cmで、深さは40cmを測る。坑底径は約20cmを測り、円形と思われる。断面は、地山を掘り込んだ袋状を呈し、遺構内から土師器片が数点検出された。

#### 第7トレンチ(Tr-7) 〔第37・42図 図版9・12〕

主丘陵尾根の東に面する小高い傾斜地に1.0m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下約1.3mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚5cm～10cmで灰黄褐色の表土である。第2層は、層厚20cm～55cmで黄褐色の砂質土である。第3層は、層厚10cm～30cmでにぶい黄褐色の砂質土である。第4層は、層厚15cm～60cmで明褐色の砂質土が厚く堆積していた。各層共には安定した自然堆積を示しており、遺構、遺物は検出されなかった。

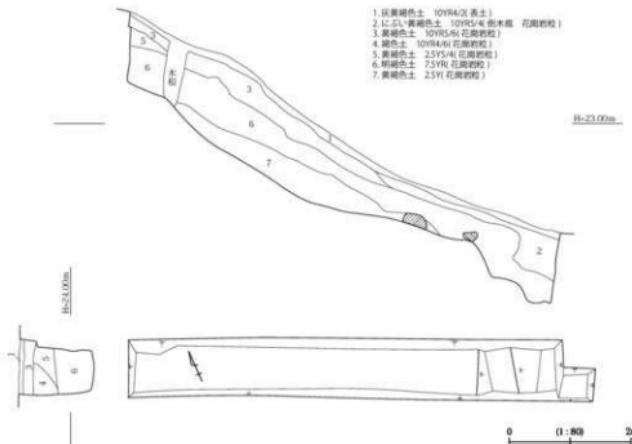


第42図 高住宮ノ谷遺跡 第7トレンチ実測図

#### 第8トレンチ(Tr-8) 〔第37・43図 図版9・12〕

主丘陵尾根の東に面する小高い傾斜地の中腹に1.0m×7.0mの東西トレンチを設定し、地表下約1.3mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚約5cm～15cmで灰黄褐色の表土である。第2層は、層厚5cm～70cmでにぶい黄褐色の砂質土で、トレンチ東端部に風倒木と思われる凹地を形成している。第3層は、層厚20cm～45cmで黄褐色の砂質土である。第4層は、層厚約40cmで褐色の砂質土がトレンチ西側に所在する。第5層は、層厚約35cmで黄褐色の砂質土がトレンチ西側に所在する。第6層は、層厚20cm～85cmの明褐色の砂質土である。第7層は、層厚10cm～50cmで黄褐色の砂質土である。各層共には安定した自然堆積を示しており、遺構、遺物共に検出されなかった。

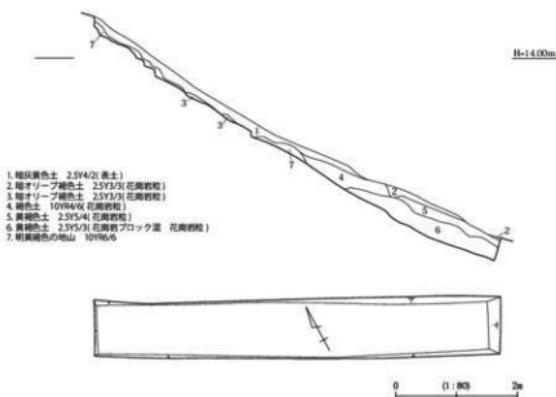


第43図 高住宮ノ谷遺跡 第8トレンチ実測図

**第9トレンチ(Tr-9)** [第37・44図 図版9・12]

主丘陵尾根の東に面する小高い傾斜地の裾に1.0m×7.0mの東西トレンチを設定し、地表下約0.5mまで掘り下げて造構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が<sup>a</sup>、層厚約10cmで暗灰黄色の表土である。第2層は、層厚5cm～15cmで暗オリーブ褐色の表土である。第3層は、層厚約5cmで薄く地山の凹地に堆積する暗オリーブ褐色の砂質土である。第4層は、層厚20cm～30cmで褐色の砂質土である。第5層は、層厚10cm～20cmで黄褐色の砂質土である。第6層は、層厚20cm～35cmで黄褐色の砂質土に花崗岩のブロックが混入している。第



第44図 高住宮ノ谷遺跡 第9トレンチ実測図

7層は、明黄褐色土の地山である。各層共にほぼ安定した自然堆積を示しており、遺構、遺物は検出されなかった。

### 小結

今回の調査では、丘陵尾根の東斜面に6箇所のトレンチを設定し、試掘調査を行った。その結果、東斜面の高所では遺構遺物を検出することはできなかったが、裾部に設定した第4トレンチで溝状遺構の一部を検出し、埋土中で検出した土師器片は奈良時代のものと思われるが、遺構の特定には至らなかった。北野神社南側に設定した第5トレンチでは、小規模ではあるが、特異な土器の埋設遺構が検出されたが、土器の器壁が著しく摩耗していたことから遺構の時期を特定することはでなかった。しかし、掘込面が傾斜地で屈曲する場所を意図的に選地したものと見られ、土器埋設遺構以外の用途も検討すべきであろう。第6トレンチも第5トレンチと同様に北野神社の南側に設定した。ここでは、土器の埋設状況は異なるものの、ほぼ同規模で傾斜地形の変換点に掘り込まれていたことから、関連する遺構の可能性は高い。

## 第7節 内海中所在遺跡

内海中所在遺跡（かつみなか）は、白兎海岸の南西約2.9km、県道御熊・白兎線沿いで御熊集落の北東約500mの谷平野に位置する。700mほど北には古代～中世の集落遺跡として知られる内海中寺ノ谷遺跡が所在する。

今回の調査は道路整備に伴って、奥まった谷平野の水田に1箇所のトレンチを設定した。



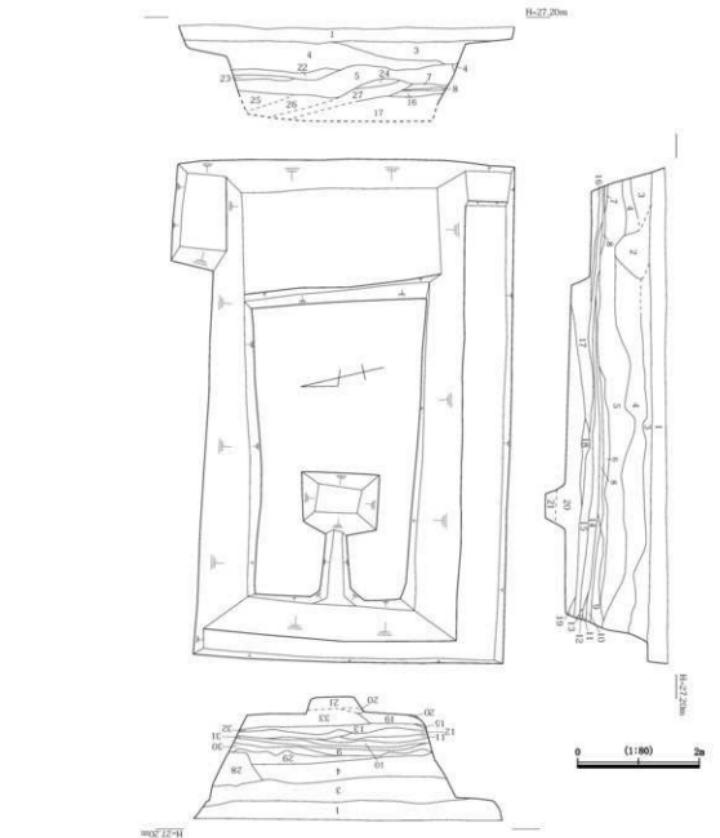
第45図 内海中所在遺跡 調査トレンチ位置図

### 第3トレンチ(Tr-3) [第45・46図 図版12・13]

調査対象地は東西を南北方向に延びる丘陵に挟まれた幅約50mの峡谷平野部に位置し、段々状に整地された水田面の標高は27m余りである。この谷の中央付近に5m×8mのトレンチを設定したが当初から厚い客土の存在が想定されており表土及び客土の掘削を重機によって実施したため、その調査面積は8.1m×5.5m程度となった。調査は地表面下2m程度の地山の岩盤まで掘り下げを行った。

その結果、現地表面下1m付近(標高26m付近)まで現代とみられる客土(第3～5層)がなされており、その下20～30cm程度に灰色砂層(第6～13層)、青灰色シルト層(第14～16層)が堆積する。その下の標高25.2m付近までは砂層、シルト層が混じりながら主として砂礫層が堆積し、以下が地山の岩盤となる。

客土下の堆積層中に水田等の遺構存在の可能性を想定したが、明瞭に遺構の存在を示すものは確認されなかった。また遺物も、客土中から土器細片が僅かに1片出土したほかには検出されなかった。



1. 黄褐色粘土 10YR4/2-~黄褐色粘土層土 (10YR3/2) (軟土)  
 2. 反黄色砂礫層  
 3. 隆起色粘土層 10YR5/2(1-4cmの大さの塊を多く含む 上方に黄褐色無機質分沈着)  
 4. 反黄色砂礫層 10YR6/2(より厚い) 1-20cmの大さの塊を多く含む 黄褐色無機質分沈着  
 5. 黄褐色砂礫層 10YR5/2(10cm-15cm-N6/0)を層間に含む 1-20cmの大さの塊を多く含む 黄褐色無機質分沈着  
 6. 反黄色砂 NS/0(黄褐色無機質分沈着をミナリ状に含む) 10YR5/1(1-6cmの大さの塊を多く含む)  
 7. 反黄色砂 NS/0(1-2cmの大さの塊を多く含む)  
 8. 反黄色砂 NS/0(6-7cmの大さの塊を多く含む)  
 9. 反黄色砂 NS/0(6-7cmの大さの塊を多く含む)  
 10. 反黄色砂 NS/0(6-7cmの大さの塊を多く含む)  
 11. 反黄色砂 NS/0(6-7cmの大さの塊を多く含む)  
 12. 反黄色砂 NS/0(1-3cmの大さの塊を多く含む)  
 13. 反黄色砂 NS/0(やや緑色) 0.5-1cmの大さの塊を多く含む 黄褐色無機質分沈着  
 14. 青灰色シルト 5.5B/7-5/1(白色土層を多く含む)  
 15. 青灰色シルト 5.5B/7/14 よりやや緑色 やや粘土を含む 0.5cmの大さの塊を多く含む  
 16. 青灰色シルト 5.5B/7/15 よりやや緑色 0.5cmの大さの塊を多く含む
17. 墓灰色砂礫層 10YR5/1(1-6cmの大さの塊を多く含む)  
 18. 黄褐色シルト 5.5B/7/15よりやや緑色 黄褐色砂を含む 0.5cmの大さの塊を多く含む  
 19. 墓灰色砂 SG5/1(やや青灰色を含む)  
 20. 墓灰色砂礫層 10YR5/1(1-6cmの大さの塊を多く含む)  
 21. 墓灰色砂 NS/0(1-2cmの大さの塊を多く含む)  
 22. 墓灰色砂礫層 10YR5/1(1-10cm的大さの塊を多く含む)  
 23. 黄褐色シルト NS/0  
 24. 黄褐色シルト NS/0(2.5-4cmの大さの塊を多く含む)  
 25. 黄褐色シルト 5.5A/1(1-3cmの大さの塊を多く含む)  
 26. 墓灰色砂礫層 5.5A/1(1-20cmの大さの塊を多く含む 墓灰色砂を含む)  
 27. 墓灰色砂礫層 5A/0(1-10cmの大さの塊を多く含む 墓灰色砂を含む)  
 28. 墓灰色砂 NS/0(1-2cmの大さの塊を多く含む)  
 29. 墓灰色砂礫層 10YR5/2(5cm以上) 1-3cmの大さの塊を多く含む 上方に黄褐色無機質分沈着  
 30. 反黄色砂 NS/0(6cm以上) ややシルトを含む 黄褐色粘土ブロックを多く含む  
 31. 墓灰色シルト SG5/1(黄褐色無機質分沈着)  
 32. 墓灰色砂 5B/4(11-15cmの大さの塊を多く含む 墓灰色砂を含む)  
 33. 墓灰色砂 SG4/1(と細粒灰白色土 SG4/1の混在 1-3cmの大さの塊を多く含む 相合を含む)

第46図 内海中所在遺跡 第3トレチ実測図

## 小結

今回の調査地内からは当該期の明瞭な遺構、遺物は検出されなかった。しかしながら周辺の丘陵上には中世城館、裾には横穴石室等も遺存しており、周辺での開発等には注意が必要である。

## 第8節 桂見遺跡

桂見遺跡は、JR鳥取駅から西へ約5km、湖山池南東岸の鳥取市桂見地内に位置する。周辺平野部には縄文時代から中・近世にかけての遺跡がひろがり、低丘陵上には弥生時代から中・近世にかけての墳墓が展開する。今回の調査は、携帯電話基地局整備に伴うもので、倉見神社の北東約20mの丘陵裾に1ヶ所のトレンチを設定した。

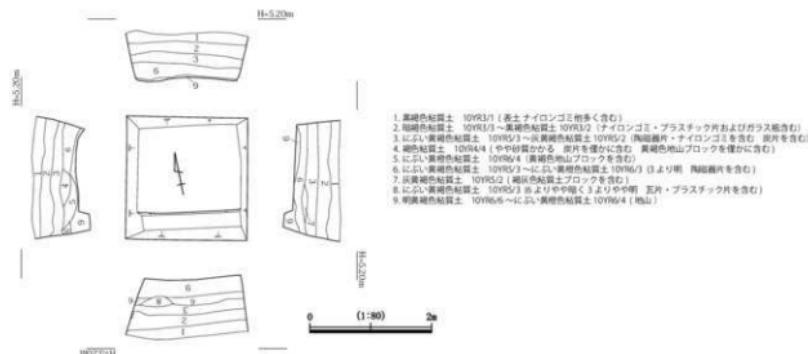


第47図 桂見遺跡 調査トレンチ位置図

### 第1トレンチ(Tr-1) [第47・48図 図版13]

調査対象地は湖山池南東部に立地する桂見遺跡の西側丘陵裾部に所在する。調査は、前面に展開する水田地帯より一段高い丘陵裾部(地表面標高5.00m付近)に2m×2mのトレンチ1ヶ所(Tr-1)を設定し、現地表面下0.8m付近の地山まで掘下げを行った。

その結果、地表面下0.6m付近まで(第1～3層)はナイロンゴミや現代陶磁器等を含む堆積層で、その下の第6層(にぶい黄褐色粘質土～にぶい黄橙色粘質土)が近代以降の陶磁器や須恵器、土師器片を含む遺物包含層である。



第48図 桂見遺跡 第1トレンチ実測図

第6層上面から掘り込まれる浅い落ち込みが認められるが、現代の搅乱で、地山の第9層(明黄褐色粘質土～にぶい黄橙色粘質土)上面も含めて当該期の明瞭な遺構は検出されなかった。

遺物は主に第3層および第6層から出土したが、上述のとおり、近代以降の陶磁器と瓦、須恵器片と土師器片である。

### 小結

今回の調査地内からは当該期の明瞭な遺構は検出されなかった。しかしながら近代以降の遺物と混じってはあるものの須恵器、土師器片等の出土もあり、調査地周辺に集落跡等の遺構が存在する可能性は否定できず、周辺での開発等には注意が必要である。

### 第9節 秋里遺跡

秋里遺跡は鳥取平野の中心を流れる「千代川」下流域の右岸に広がる鳥取平野有数の集落遺跡である。しかし遺跡の広がり、性格等は未解の部分が多く、小規模な開発等の度に調査を重ね資料の蓄積を図つ



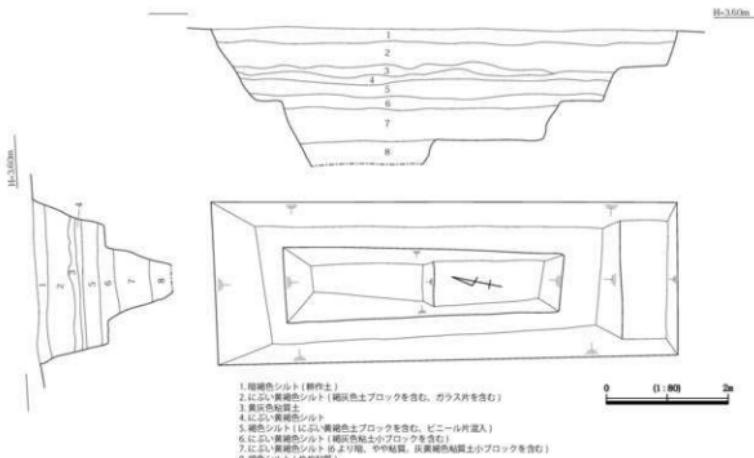
第49図 秋里遺跡 調査トレンチ位置図

ている。

今回発掘調査の対象地は、一般国道9号線の南北に面する住宅街の一画で、蔬菜等を栽培していた農地から宅地造成への計画による試掘調査及び県立中央病院の改築予定地、県道鳥取砂丘線沿線に新築予定のコンビニエンスストアの広告塔設置工事に伴うものである。

### 第1トレンチ(Tr-1) [第49・50図 図版13]

福川左岸約120mの住宅地内に残る畠地に設定した2.7m×7.6mのトレンチである。現地表の標高は3.4m前後を測る。耕作土(第1層)下層の第2～5層は現代の客土とみられ、第2層にガラス片、第5層にはビニール片が含まれている。第5層から下層にはにぶい黄褐色シルト層(第6・7層)が厚さ70cm前後で堆積し、その下層に均一な褐色シルト層(第8層)が認められる。第6～8層の各上面で遺構検出を行ったが遺構は認められず、遺物も出土しなかった。



第50図 秋里遺跡 第1トレンチ実測図

### 第2トレンチ(Tr-2) [第49・51・59図 図版13・35]

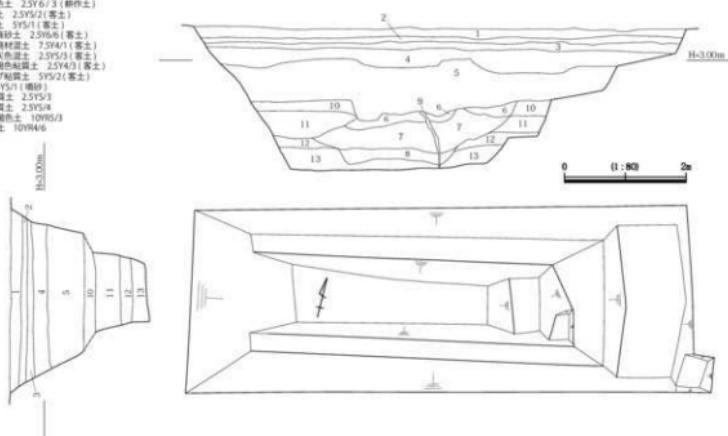
当該地は、宅地造成計画地内の道路予定地で、下水道の中継升が敷設される西側に3.0m×8.0mの東西トレンチを設定し、地表下約2.2mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～18cmのにぶい黄色の耕作土である。第2層は、層厚5cm～10cmで暗灰黄色の客土である。第3層は、層厚5cm～15cmで灰色の粘質客土である。第4層は、層厚15cm～40cmで明黄褐色の客土である。第5層は、層厚40cm～90cmで灰色混じりの客土である。第6層は、層厚約20cmで黄褐色土と灰色土が混じり合った客土である。第7層は、層厚30cm～50cmでオリーブ褐色の粘質客土である。第8層は、層厚約20cmで灰オリーブ色粘質土の客土である。第9層は、灰色砂で、客土後に湧水と共に噴き上がった粗い砂である。第10層は、層厚10cm～20cmで黄褐色の粘質土である。第11層は、層厚35cm～40cmで黄褐色の粘質土である。第12層は、層厚15cm～20cmのにぶい黄褐色土で、須恵器片が検出された。第13層は、層厚20cm～35cmで褐色の粘質土である。

当該地は、農耕地として耕作されていたが、下層は幾重にも客土が施されており、第6層中で鉄製品が検出され、第12層中で須恵器片が検出されたが、秋里遺跡の主体を構成する遺物包含層の範囲からは遠ざかるものと思われる。

出土遺物(24)は、先端部が尖った鑿状の鉄製品である。全長は8.7cm、先端部は鋭く尖り、後端部の断面形は四角形を呈し、径は0.7cm、重量は12グラムを測る。先端部は先細りして鋭角に尖り径0.3cmから直線的に厚幅の後端部に至る。腐食による地彫れが著しいが、地金は堅固に残り、出土層位、形状から中世以降の鑿状の鉄製品と思われる。

1. にじい黃色土 2.5Y6/3 (耕作土)
2. 暗灰黄色土 2.5Y5/2 (客土)
3. 黄色粘土土 5Y5/1 (客土)
4. 明黄褐色粘土土 2.5Y4/2 (客土)
5. 黄褐色粘土土 2.5Y4/1 (客土)
6. 黄褐色・灰色土 2.5Y5/3 (客土)
7. オリーブ褐色粘土土 2.5Y4/3 (客土)
8. 灰色土 7.5Y6/2 (客土)
9. 黄褐色粘土土 2.5Y5/1 (客土)
10. 黄褐色粘土土 2.5Y5/3
11. 黄褐色粘土土 2.5Y5/4
12. にじい黄褐色土 10Y9/5/3
13. 褐色粘土土 10Y9/4/6



第51図 秋里遺跡 第2トレンチ実測図

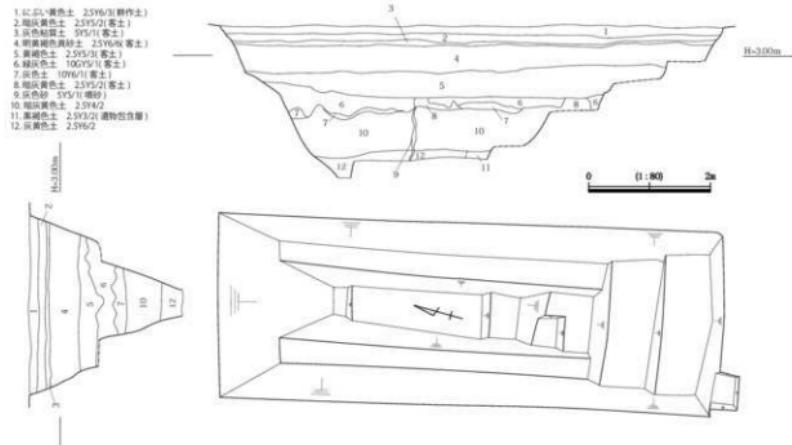
### 第3トレンチ(Tr-3) [Fig. 49・52・59] 図版13・14・34・35]

前述の宅地造成計画地内で、下水道の中継升が敷設される東側に3.0m×8.0mの南北トレンチを設定し、地表下約2.4mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm～20cmのにじい黄色の耕作土である。第2層は、層厚5cm～15cmで暗灰黄色の客土である。第3層は、層厚約5cmで灰色の客土である。第4層は、層厚25cm～45cmで明黄褐色の客土である。第5層は、層厚15cm～50cmで黄褐色の客土で、建築廃材が混在する。第6層は、層厚10cm～40cmで緑灰色の客土である。第7層は、層厚5cm～10cmで灰色の客土である。第8層は、層厚約15cmで暗灰黄色の客土である。第9層は、灰色砂で、客土後に湧水と共に噴き上がった粗い砂である。第10層は、層厚約60cmの暗灰黄色土である。第11層は、層厚10cm以上の黒褐色土で土壌器を包含する。第12層は、層厚30cm以上の灰黄色土である。

当該地は、かつて農地として耕作されていたが、客土が厚く施されており、第11層で器形の確認ができる奈良時代の坏片等がまとめて検出されたことから、秋里遺跡の拡がりを検討する際の貴重な資料となろう。

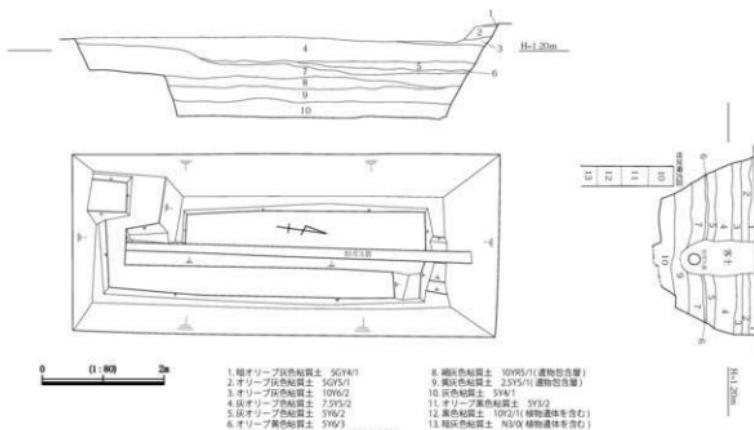
出土遺物は、7世紀末から8世紀初頭の所産と思われるもので、(14)は強く外反させる甕の口縁で、縁部外面を人差し指、内面を親指で外方に引き出すようにつまんで折り曲げ、外反させた指頭痕が残る。内面は丁寧なナデを施し、外面は縱方向ハケメ調整後ヨコナデを施している。(16)は高台の付かない須恵質の坏で、底部外面に糸切り痕が残る。外面に左方向へのケズリ後内外面共に丁寧なヨコナデを施している。(17)は、しっかりとした高台が「ハ」の字に踏ん張る須恵質の坏で、器形の成形後に糸切りで離し、高台を貼り付けている。内外面共にヨコナデを施している。



第52図 秋里遺跡 第3トレンチ実測図

#### 第4トレンチ(Tr-4) [第49・53・58・59図 図版13・14・33~35]

第4トレンチは、国道9号鳥取バイパスの直下を横断して北へ延びる道路予定地内で、層厚約1.5mと厚く施されていた客土を重機によって掘取りし、元の地表面に3.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、元の地表下1.7mまで掘り下げて垂直的に調査を行った。また、トレンチのほぼ中央には昭和47年に敷設され、現在は廃止されている都市ガス管が第9層まで掘り下げていることを確認した。



第53図 秋里遺跡 第4トレンチ実測図

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚6cm～15cmで暗オリーブ灰色の粘質土である。第2層は、層厚10cm～20cmでオリーブ灰色の粘質土である。第3層は、層厚10cm～15cmでオリーブ灰色の粘質土である。第4層は、層厚10cm～40cmで灰オリーブ色の粘質土である。第5層は、トレンチ北側に見られる層厚10cm～15cmで灰オリーブ色の粘質土である。第6層は、トレンチ北側に見られる層厚4cm～10cmでオリーブ黄色の粘質土である。第7層は、層厚10cm～50cmで灰オリーブ色粘質土で古代の遺物を包含するが、摩耗が著しい。第8層は、トレンチ南側に見られる層厚10cm～15cmで褐灰色粘質土で古代の遺物を包含する。第9層は、層厚20cm～25cmで黄灰色の粘質土で古墳時代の遺物を包含する。第10層は、層厚20cmの灰色粘質土でこれより下層は無遺物層である。

また調査終了後、更に下層を確認するため、部分的に約1.4mまで重機で下げ第10層以下の堆積状況を確認した。

第11層以下は、重機による堆積状況の確認結果で、第10層が層厚約43cmで灰色の粘質土である。第11層は、層厚約45cmでオリーブ黒色の粘質土である。第12層は、層厚約40cmで黒色の粘質土で植物遺体を含む。第13層は、暗灰色の粘質土が厚く堆積しており、層中には植物遺体を含む。

層位的には、ほぼ安定した堆積を示していたが、遺構等は検出されず、遺物の包含状況も希薄であることから、遺跡の範囲から遠ざかりつつあるように思われる。

遺物は、古墳時代前期から中世までの土器片が出土しており、(3)はやや外反する複合口縁の壺で、口縁端部をつまんで丸くおさめ、屈曲部の稜は、ほぼ水平に突出する。口縁外面に10条の櫛引き平行沈線を施す。内面はヨコナデ後ミガキを施す。口縁端部は内外面共にヨコナデを施す。(15)は土師器の底部で、「ハ」の字にしっかりと踏ん張った高台から大きく外反する壺の底部である。内面は、丁寧なヘラミガキの後炭素を吸着させた黒色土器である。外面は著しく摩耗しており、調整は不明瞭である。(22)は瓦質の土鍋で、外反する体部から更に外反する口縁部を持ち、屈曲する頸部からやや内湾して立ち上がり口縁に至って、口縁端部は平坦面をつくり出す。外面全体に煮沸時の煤が付着している。内面は、力を加えたヨコナデにより、やや内湾して肥厚する。外面は、外反する手前で強く指押さえした指頭痕が残り、後にハケメ調整を施している。(13)は土玉で、2.4cm×2.3cm、環の直径は2.3cm、環の径は0.5cmを測る。ケズリ後ナデを施し、随所に指頭痕が残り、環の両端に擦れによる摩耗痕が認められる。

## 第五トレンチ(Tr-5) [第49・54・58・59図 図版13・14・34・35]

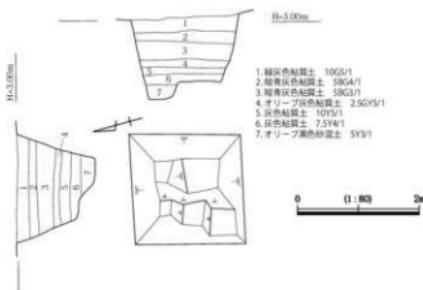
当該地は、県道鳥取砂丘線と市道江津1号線が交差する北西の隣地で、新築出店が迫ったコンビニエンスストアの広告塔敷設工事に伴うもので、設置工事の範囲に限定された制約の中で重機による客土を1m程度箇取りした後、2.0m×2.0mの方形トレンチを設定して地表下約2.3mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚15cm～20cmで緑灰色の粘質土である。第2層は、層厚10cm～20cmで暗青灰色の粘質土である。第3層は、層厚25cm～30cmで暗青灰色の粘質土で古墳時代～古代の遺物を包含するが、器壁の摩耗が著しい。第4層は、層厚10cm～15cmでオリーブ灰色の粘質土で、古墳時代の遺物を包含する。第5層は、層厚10cm～15cmで灰色の粘質土で、古墳時代前期の遺物を包含する。第6層は、層厚10cm～18cmで灰色の粘質土で古墳時代前期の遺物を包含する。第7層は、層厚25cm以上でオリーブ黒色の砂混土で、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を包含する。

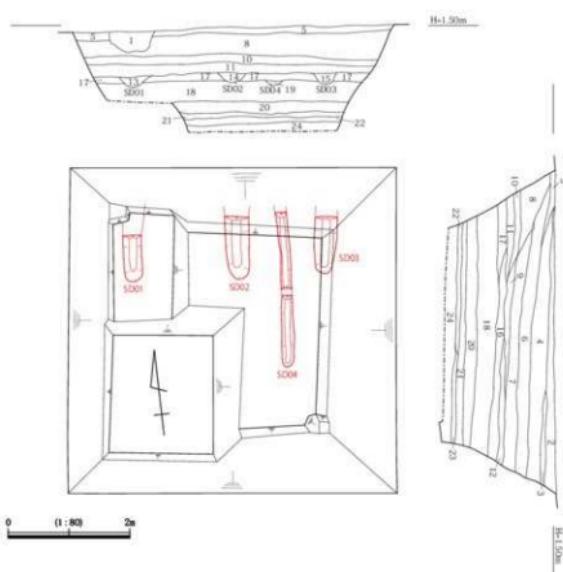
調査地は、限定された小規模の範囲での調査であったことから、遺構の確認はできなかったが、過去の調査に加えて遺跡の範囲が更に北側へ拡がることを確認した。

(12)は、弥生土器の体部に施された施文の一部が剥離したもので、曲部を綾杉文状の細い一条の横線が巡るものである。(10)は鼓形器台の受部で、脚部以下を欠損する。受部は直線的に上方へ延び端部を大きく外反させる。筒部は短く、稜は受部脚部ともに鋭く突出し、内外面共に丁寧なナデを施す。(21)は口縁部がやや外反する体部から大きく外反して折れ曲がり、頸部からやや内湾して立ち上がって口縁

に至る。口縁端部は平坦面をつくり出し、外面全体に煤が付着している。内面は、力を加えたヨコナデにより、やや内湾して肥厚する。外面は、外反する手前で強く指押さえした指頭圧痕が残り、内外面共にヘラケズリ後ナデ調整を施している。



第54図 秋里遺跡 第5トレンチ実測図



1. 黄色シルト S56/1(僅かに褐色色の付着あり、擾乱)  
 2. 黄色粘土 S56/1(黄色がかる シルト混じり)  
 3. 黄色粘土 S56/1(5より若干明度)  
 4. 黄色粘土 S56/1(5より若干明度、シルト混じり)  
 5. 黄色シルト S56/1(より鮮明なる、僅かに褐色色の付着あり)  
 6. オーピー黄色シルト S56/1(僅かに褐色色の付着あり)  
 7. 黄色粘土シルト S56/3(褐色色の付着強で粘質)  
 黄色オーピー粘土シルト S56/3(褐色色の付着強で粘質)  
 9. 黄色粘土 S56/1(シルト混じり)  
 10. 黄色オーピー粘土シルト S56/3(より粘質で褐色色の付着若干強)  
 11. 黄色粘土シルト S56/1(10より粘質で褐色色の付着若干強)  
 12. 黄色粘土シルト S56/1(9より褐色色の付着)
13. 黄色粘土シルト S56/1(1)より褐色色の付着強でシルト質)S501  
 14. 黄色粘土シルト S56/1(1)より褐色色の付着強でシルト質)S502  
 15. 黄色粘土シルト S56/1(1)より褐色色の付着強でシルト質)S503  
 16. 黄色粘土シルト S56/1(1)より褐色色の付着強でシルト質)S504  
 17. に少い黄色シルト 2.5Y6/3(1)より褐色色の付着強、土質を僅かに含む、練まりやや弱い)  
 18. 黄色シルト 2.5Y5/3(4)より褐色色の付着強、土質細片、固片を含む、練まりやや弱い)  
 19. 黄色粘土シルト 2.5Y6/1(1)より褐色色の付着強でシルト質)S505  
 20. 黄色粘土シルト 2.5Y5/1(4)より褐色色の付着強でシルト質)S506  
 21. 黄色粘土 S57/1(褐色を含む シルト混じり)  
 22. 黄色粘土 S57/1(擦れた褐色色を含む、粘質強)  
 23. 黄色粘土 S57/2(9よりシルト質で褐色強)  
 24. 黄色粘土 S57/2(23より明で擦れた褐色強、6.5m~1cm大的の黄色粘土ブロックを含む)

第55図 秋里遺跡 第6トレンチ実測図

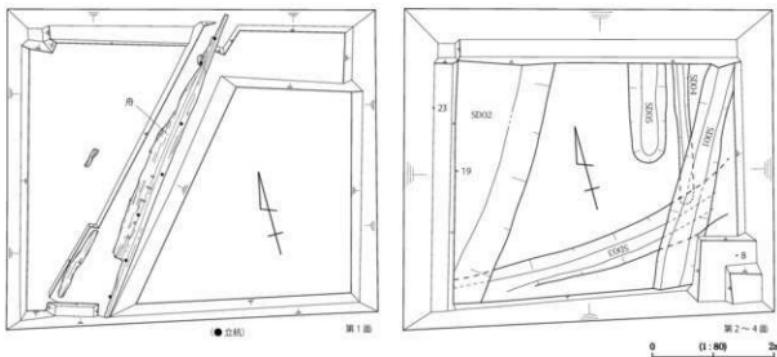
### 第6トレンチ(Tr-6) [第49・55図 図版13~15]

第6トレンチは、鳥取県立中央病院の南端敷地内で、旧救急搬送用ヘリポートの跡地に位置し、層厚約3.2mの造成土を重機により鋤取りした後、元の水田面に5.0m×5.0mの方形トレンチを設定し、手掘で掘り下げ、最終的に幅1.2mの「L」の字形に1.8mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。上層は、元の水田面で擾乱と灰色系の耕作土が堆積し、灰オリーブ色シルトの第8層で土師器片を検出したが、著しい摩耗が認められた。標高0.7mの第17層を掘り込んだ南北に軸をとる3条の溝状遺構(SD 01~03)を検出し、直下の第18層を掘り込んだ南北に軸をとる1条の溝状遺構を検出した。溝状遺構(SD 01)幅30cm・延長1.4m・深さ20cm、溝状遺構(SD 02)幅40.0cm・延長1.2m・深さ16.0cm、溝状遺構(SD 03)幅36.0cm・延長1.4m・深さ16cm、溝状遺構(SD 04)幅18.0cm・延長2.7m・深さ12.0cmの規模で検出された。これらの溝状遺構は、出土遺物から中世のものと思われる。第16・18層では古墳時代の遺物を少量包含するが細片であった。

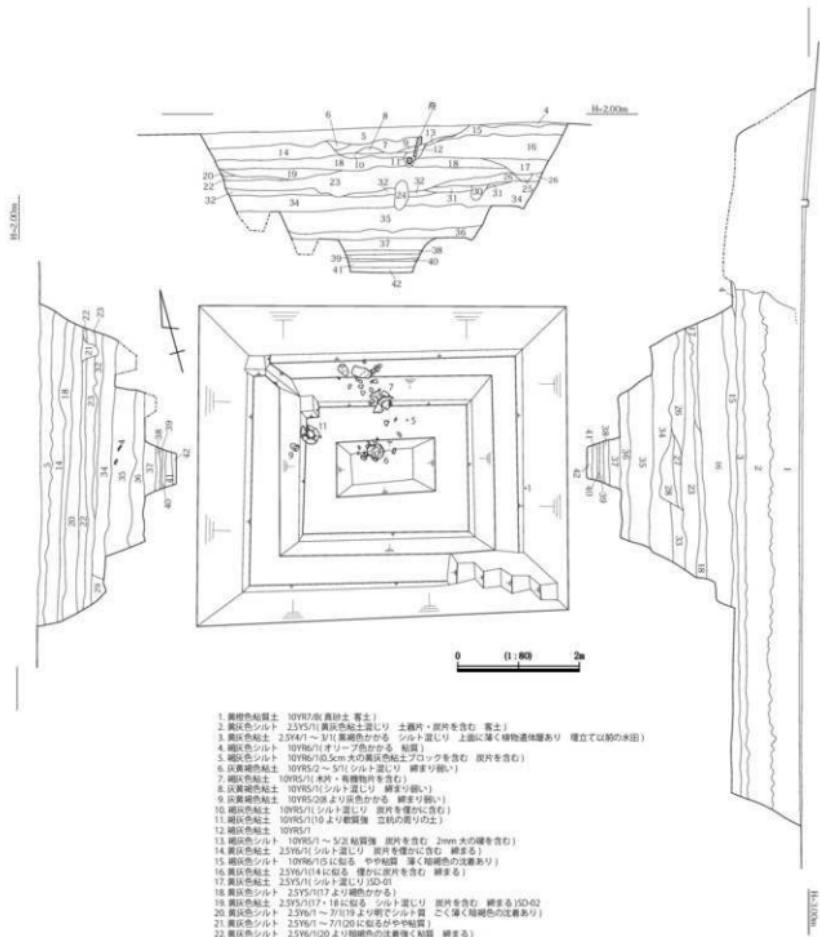
第24層以下は、更に1.8mまで重機による深掘確認の結果、上層はオリーブ黒色土、中層は黒色土、下層はオリーブ黒色土で各層ともに無遺物で粘質土が厚く堆積していた。

### 第7トレンチ(Tr-7) [第49・56~59図 図版13・15・16・33~35]

今回の調査は、中央病院関連施設建設に伴うもので、調査地は中央病院正面玄関へ続く県道の左側歩道の一部および来客用駐車場に位置する。アスファルト舗装面は標高2.9m余りで、重機による鋤取り範囲は南北12.0×東西13.0m、深さ約1.1mである。客土は約0.8mの厚さが認められ、真砂土を主体とする第1層、弥生土器細片や土錐などを含む黄灰色シルト第2層に大きく分かれる。標高2.0mで埋め立て前の水田面を確認した。手掘りの範囲は南北5.0×東西6.0m、標高1.8m弱から開始した。標高1.6mで、主軸をN・37°-Eに振る土留め状の遺構が検出された。45~85cm間隔に打ち込まれた長さ44~126cmを測る立杭上に扁平な舟底が東面となるよう固定している。トレンチ内で田舟の重なり部分が認められるものの元々の田舟の長さは4.3m以上になる。鋤取り南壁面やトレンチ北側のサブトレンチから遺構の長さは10m以上を測り、区画の一部と思われる。なお、田舟取り上げ時に第7層より19世紀後半の在地産陶器口縁部が出土している。以下、標高1.3mに広がる第18層が瓦質羽釜片などを含む中世遺物包含層で、その上面に溝状遺構SD 01、第18層下にSD 02を検出、SD 02の基盤層第20層下にPit 01を検出した。須恵器細片などを含む第23・26層下にSD 03~05を検出した。標高0.9mに広がる第34層は暗褐色の強い沈着により硬化が認められ、古墳時代前期の遺物を含み、トレンチ北寄りで元は完



第56図 秋里遺跡 第7トレンチ実測図



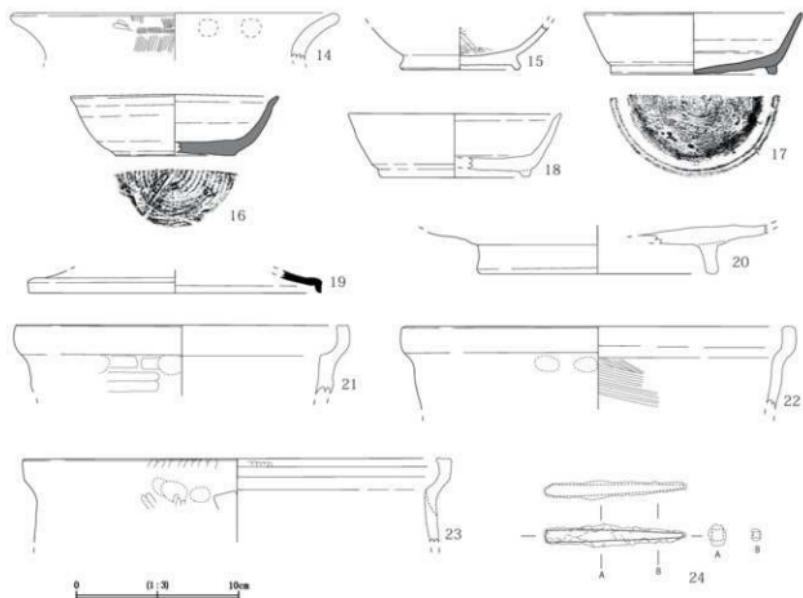
第57図 秋里遺跡 第7トレンチ土層図



第58図 秋里遺跡 出土遺物実測図(1)

(3・13: 第4トレンチ、10・12: 第5トレンチ、1・2・4~9・11: 第7トレンチ)

形とみられる高杯、壺、鼓形器台、杯が出土している。その下層である第35層は弥生時代後期の遺物包含層で標高0.5mを測る。以下、無遺物層となり、標高0.2mで砂層である第36層、標高-0.25mで黒色を帯びる黄灰色粘土、以下標高-0.6mまで粘質の強い黄灰色粘土層を確認した。



第59図 秋里遺跡 出土遺物実測図(2)

(24: 第2トレンチ、14・16・17: 第3トレンチ、15・22: 第4トレンチ、21: 第5トレンチ、18~20・23: 第7トレンチ)

## 小結

今回の調査では、広範囲にトレンチを配し、層位的に遺構の有無、遺物の包含状況を確認した。国道9号線を介して南の第1トレンチでは、遺構、遺物は確認されず遺跡の端部に相当する可能性があり、第2・3トレンチでは遺構の検出はできなかったが、少量の遺物包含層を確認することができた。国道9号線の北に設定した第6トレンチでは、4条の溝状遺構と少量の遺物を確認し、第7トレンチでは、弥生時代後期から古墳時代前期の所産と思われる土器溜、近世の舟縁を立てかけて土止めに転用したと思われる遺構が検出された。最も北に位置する第5トレンチでは、2.0m×2.0mの小規模な調査面積であったが、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多量に出土したことから、遺跡の範囲が更に北へ拡がる事が確認された。

この結果から、秋里遺跡の範囲を検討する基礎資料に加わるものと思われ、今後に行われる詳細調査にも寄与するものと思われる。

## 第10節 下坂本清合遺跡

しまおかもとせいご  
下坂本清合遺跡は、鳥取市氣高町下坂本集落の後背地と県道矢口鹿野線の東方に広がる水田域に所在しており、南の鷺峰山山系から北の日本海に向けて幾重にも派生している丘陵にも多くの古墳群が展開

している。当該下坂本集落の後背丘陵にも古墳群が展開しており、古墳群としての区分はなされているが、長く延びる丘陵尾根上に5群の古墳群が展開しており、水田域のはば中央を流れる河内川を介して東丘陵にも7群の古墳群が同一丘陵に展開している。

又、従前に行われた水田域の詳細調査では、丘陵裾部で弥生時代終末期に相当する竪穴式住居跡が類例の少ない焼失したままの状態で検出されている。焼失住居は、屋根が土で覆われていたらしく竪穴式住居を構成する建築部材、屋根材等が火災で倒壊し、炭化状態で検出されており、当時の建築様式を今に伝える貴重な資料となっている。

今回実施した発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に伴う試掘調査で、前述の調査で検出された遺構、遺物包含層等の範囲を確認するために丘陵の裾部～中腹に至る調査と水田域に道路工事の過程で新たに掘削された沈砂地の調査である。鳥取県東部では、丘陵の傾斜地に生活拠点が確認されることが希であったが、同事業の「乙亥正屋敷廻遺跡」では狭谷の急傾斜地を「L」字状にカットして住居群を構えている類例も見つかっており、当該遺跡と近い場所にあることから、平坦地に近い地形については、注視する必要があると思われる丘陵尾根である。



第60図 下坂本清合遺跡 調査トレンチ位置図

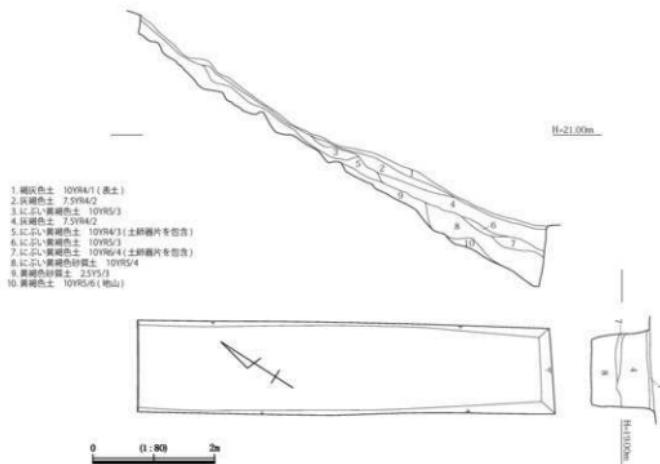
#### 第14トレンチ (Tr-14) [第60・61図 図版16]

調査トレンチは、県道矢口鹿野線との比高差が約14mを測る丘陵の中腹で、孟宗竹が繁茂する傾斜地に、1.5m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下約1.0mまで掘り下げ遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約5cm～15cmで褐色の表土である。第2層は、層厚10cm～20cmでトレンチのほぼ中央に堆積する灰褐色土である。第3層は、層厚5cm～15cmでトレンチの中央に堆積するにぶい黄褐色土である。第4層は、層厚15cm～35cmでトレンチの南側に堆積する灰褐色土である。第5層は、層厚5cm～25cmでにぶい黄褐色土で土師器片を包含する。第6層は、層厚約10cmの間層でトレンチ南側に堆積するにぶい黄褐色土である。第7層は、層厚約15cmでトレンチ南側に堆積するにぶい黄褐色土で土師器片を包含する。第8層は、層厚20cm～55cmでトレンチ南側に堆積するにぶい黄褐色の

砂質土で土師器片を包含する。第9層は、層厚10cm～30cmで地山の上面に堆積する層厚10cm～30cmで黄褐色の砂質土である。第10層は、黄褐色の地山である。

堆積状況から、斜面上方からの流入土が裾部で厚く堆積しており、第6層～8層で検出された土師器片も摩耗が著しいことから、トレンチ上方からの転落土と推定される。



第61図 下坂本清合遺跡 第14トレンチ実測図

### 第15トレンチ(Tr-15) [第60・62・66図 図版16・17・36・37]

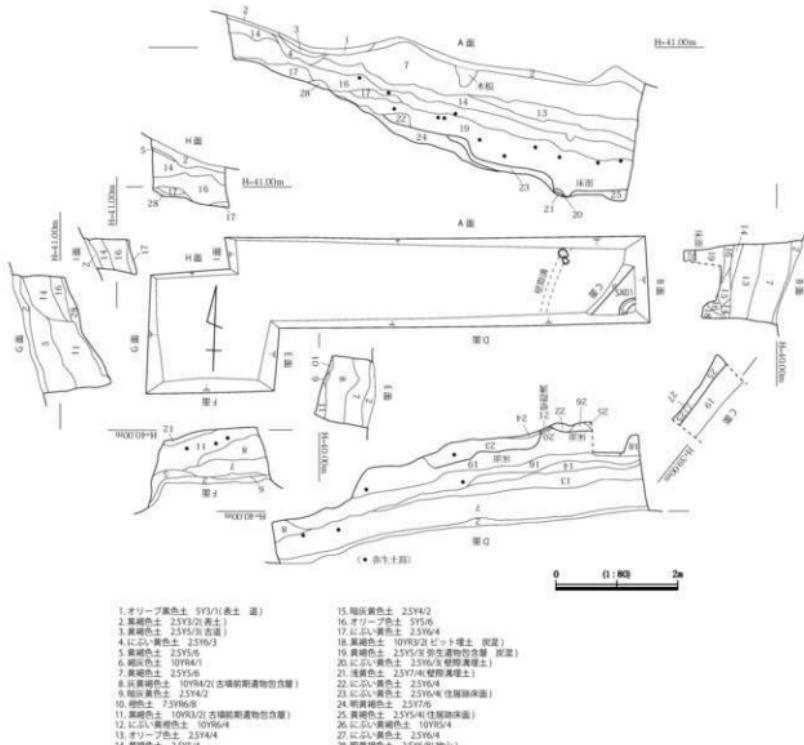
調査トレンチは、県道矢口鹿野線との比高差が約31mを測る西丘陵の中腹で、孟宗竹が繁茂するテラス状の張り出し地に1.5m×7.0mの東西トレンチを設定した。調査は、地表下約2.0mまで掘り下げて住居跡に関連すると思われる遺構、遺物を確認したが、遺構の状況を詳細に把握するためにトレンチの西側を2.0m×2.0mの範囲で拡張した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約10cmのオリーブ黒色土で、現在は利用頻度の低い里道の路面である。第2層は、層厚5cm～10cmの黒褐色土を呈する表土である。第3層は、層厚5cmで里道に堆積した黄褐色土である。第4層は、層厚約15cmで里道に堆積したにぶい黄色土である。第5層は、層厚5cm～50cmの黄褐色土である。第6層は、層厚約10cmの褐灰色土である。第7層は、層厚50cm～60cmで、器壁が摩耗した古墳時代の土師器片を数点含む黄褐色土である。第8層は、トレンチ西側の一部に所在する層厚30cm～40cmの灰黄褐色土で、古墳時代前期の遺物を包含する。第9層は、トレンチ西側の一部に所在する薄厚の暗灰黄色土である。第10層は、トレンチ西側の一部に所在する薄厚の橙色土である。第11層は、トレンチ西側の一部に所在する層厚約40cmで、古墳時代前期の土師器を多く包含する黒褐色土である。第12層は、トレンチ西側の一部に所在する層厚約10cmのにぶい黄橙色土である。第13層は、層厚25cm～35cmのオリーブ褐色土である。第14層は、層厚10cm～20cmの黄褐色土である。第15層は、トレンチ西側の一部に所在する層厚約20cmの暗灰黄色土である。第16層は、層厚10cm～40cmのオリーブ色土で、古墳時代前期の土器を包含する。第17層は、トレンチ西側の一部に所在し、起伏のある地山の上に堆積するにぶい黄色土である。第18層は、層厚約35cmで炭化物を含んだビット(SX 01)の埋土である。第19層は、層厚10cm～70cmで弥生時代の土器片を包含する黄褐色土である。第20・21層は、溝状遺構に

薄く堆積した黄色系の埋土である。第22層は、層厚約20cmにぶい黄色土である。第23層は、層厚約10cmにぶい黄色土が平坦面を形成する。第24層は、地山の上に堆積した層厚約20cmの明黄褐色土である。第25~27層は、層厚約15cmで黄色系の床面である。

第19層の弥生時代後期の包含層下面で、溝状の遺構を検出し、上層では古墳時代前期の包含層が検出されたことから、県東部では類例の少ない丘陵中腹に於ける住居跡が考えられる。

出土遺物は、第8層から下位で出土している。(1・2・5)は弥生時代後期の甕で、外反する複合口縁の甕(1)は、肩部を残して下位の体部を欠損し、口縁端部はつまんで丸くおさめている。屈曲部の稜は、水平方向に突出し、体部は肩が張らず底部へ至ると思われる。口縁部外面は、12条の櫛描平行沈線を施した後、端部にナデを施す。肩部の内面は、ナデ後一部に6条の波状文を施し、体部はケズリ後、ナデを施す。(2)は、直立する複合口縁を持つ甕で、頭部以下を欠損し、口縁部は丸くおさめ、屈曲部の稜は突出しないでやや内側に肥厚する。口縁外面に5条の櫛描平行沈線の後、内外面共にナデが施され、外面に煤が付着している。(5)は(2)と同位で検出されている甕の底部で、底面に至る屈曲部はわずかに丸みをもち、やや不安定な平底となっている。外面は、強いハケメ後にミガキを施しており、煮沸時と思われる煤が多く付着している。内面は、底部から上方へ放射状に強いハケメ後に軽くナデを施す。(4)



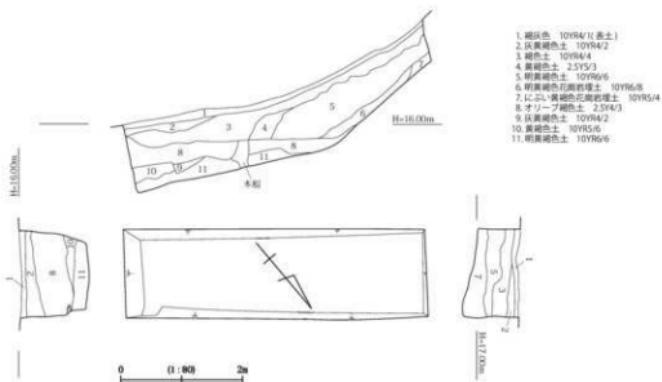
第62図 下坂本清合遺跡 第15トレンチ実測図

は、古墳時代前期の複合口縁を有する甕で、やや内湾気味に直立して屈曲部で立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。屈曲部の後はわずかに突出し、頸部で大きく「ハ」の字を開く。口縁部外面の中央には強く内曲させた指頭痕が連続して巡る。内外面共にヨコナデを施した後、口縁端部から屈曲部にかけて軽くミガキが施され、煮沸時と思われる煤が付着する。内面は頸部から肩部にかけて下位にケズリを施す。(6)は、最下層の床面に掘られた壁際溝中に坏部を上にして検出された高坏で、内湾する椀形の坏部であるが脚部以下を欠損する。坏部と脚部の接合部は、坏部に脚部を挿入しており、接合部に小円孔が残る。内面は丁寧なヨコナデ、外面はヨコナデ後ミガキを施している。調整後に内外面共に赤褐色の朱塗りが施されている。弥生時代後期の所産である。(7)は緩やかに内湾し、外上方へ延びる古墳時代前期の高坏で脚部を欠損する。口縁端部は、つまんで外傾させて丸くおさめている。外面は、ヨコナデ後一部にミガキを施している。内外面ともに赤褐色の朱塗りが施され、内面に右斜方向への暗赤色を呈する放射状暗文が見られる。(8)は紡錘形の土錘で、長さ4.3cm、太さ0.6~1.0cm、孔径0.3cm、重さ4gを測る。内面にはケズリ調整痕が明瞭に残ることから、未使用品と思われる。土錘は、当該遺跡が入り江に面することから、漁労の錘として生産されたものと思われるが、その形態から時期を特定することは不可能であり、其伴遺物から古墳時代前期と推定される。(9)は凝灰岩質で敲打痕を有するもので、長さ14.8cm、幅9.0cm、厚さ6.1cm、重さ940gを測り、打痕の凹みが両端部を中心に多数認められる。其伴遺物から古墳時代前期と思われる。

#### 第16トレンチ(Tr-16) [第60・63図 図版16・17]

調査トレンチは、県道矢口鹿野線との比高差が約8mを測る西丘陵の裾部で、狭いテラス状面に1.5m×5.0mの東西トレンチを設定した。調査は、地表下約1.1mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約10cmで褐灰色の表土である。第2層が層厚5cm~30cmで上方からの流入土と思われる灰黄褐色土である。第3層は、層厚10cm~45cmの褐色土である。第4層は、層厚約40cmの黄褐色土である。第5層は、層厚30cm~70cmの明黄褐色土である。第6層は、層厚10cm~15cmで明黄褐色の砂質土が短期間で流入したものである。第7層は、層厚約15cmの砂質土である。第8層は、層厚15cm~50cmでオリーブ褐色土である。第9・第10層は、層厚約20cmの黄褐色系の堆積土で、第9層が陥没したものと思われる。第11層は、層厚20cm~30cmで明黄褐色土の堆積である。



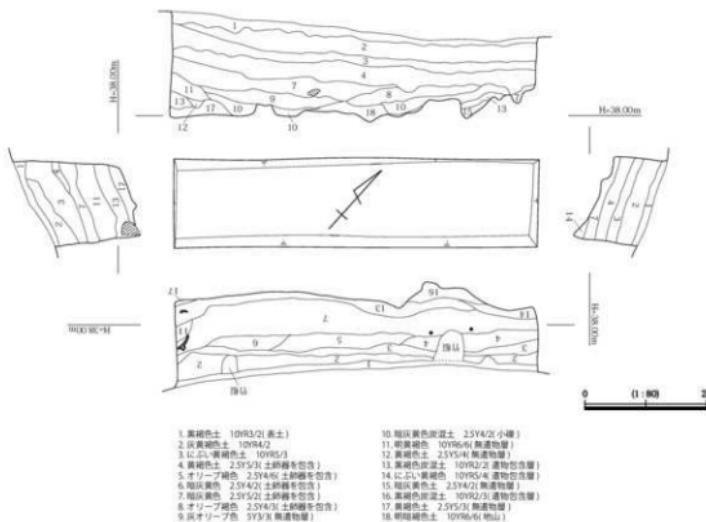
第63図 下坂本清合遺跡 第16トレンチ実測図

第8層上面がほぼ平であることから事業の痕跡とも考えられるが、遺物等が検出されなかつことから、遺構面としての確認はできなかったこと。

### 第17トレンチ (Tr-17) [第60・64・66図 図版16・17・18・36]

調査トレンチは、県道矢口鹿野線との比高差が約31mを測る西丘陵の中腹で、孟宗竹が繁茂する緩斜面に直交する1.5m×6.0mの南北トレンチを設定した。調査は、地表下約1.7mまで掘り下げて遺構、遺物を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～20cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚10cm～30cmで灰黒褐色土である。第3層は、層厚10cm～40cmでにぶい黄褐色土である。第4・5・6層は、層厚10cm～30cmで古墳時代の土師器片を包含する黄褐色系土で沈着が認められる。第7層は、層厚20cm～60cmで古墳時代の土師器片を包含する暗灰黄色土である。第8層は、層厚10cm～20cmで古墳時代前期の土師器片を包含するオリーブ褐色土である。第9層は、層厚約20cmの灰オリーブ色土である。第10層は、層厚10cm～20cmで古墳時代前期土師器を包含し、炭化物を含み、小礫が混在する暗灰黄色土である。第11層は、層厚約30cmの明黄褐色土である。第12層は、層厚約10cmの黄褐色土である。第13層は、層厚10cm～30cmで古墳時代前期の土師器片を包含し、小礫が混在し炭化物を含む黒褐色土である。第14層は、層厚約10cmで古墳時代前期の土師器片を包含するにぶい黄褐色土である。第15層は、層厚約15cmの暗灰黄色土である。第16層は、層厚約25cmで古墳時代前期の土師器片を包含し、炭化物を含む黒褐色土である。第17層は、層厚約20cmの黄褐色土である。第18層は、起伏面が連続する地山である。トレンチでの堆積状況は、緩やかな谷地形に沿ってほぼ安定した堆積を示しており、包含されている遺物の大半は古墳時代前期に相当し、上方からの流入土に包含されているものと推定される。



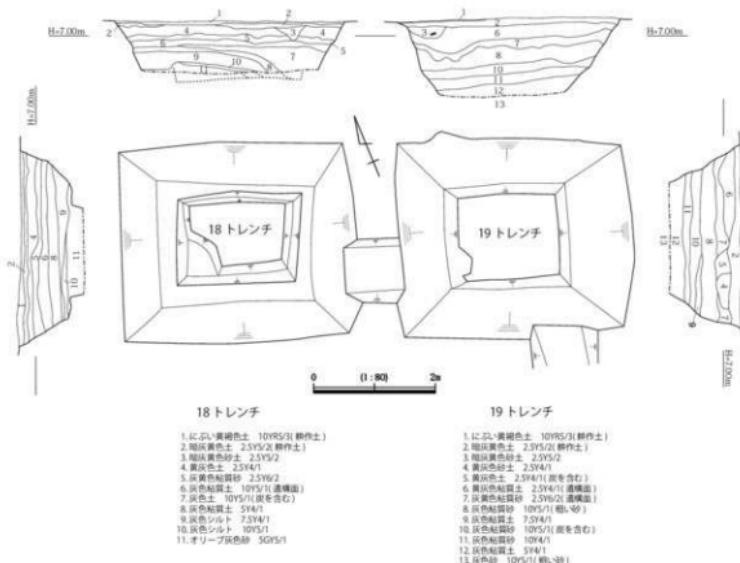
第64図 下坂本清合遺跡 第17トレンチ実測図

出土遺物は、細片状態のものが多く検出されているが、(3)は古墳時代前期の外反する複合口縁の甕で、外面に多く煤が付着するが、肩部を残して下位を欠損する。口縁端部は肥厚して丸くおさめ、屈曲部の稜を下方へ鋭くつまみ出して突出する。口縁部は、内外面共にヨコナデを施し、内面はミガキの後ヨコナデを施す。

### 第18トレンチ(Tr-18) [第60・65図 図版16・18]

調査トレンチは、県道矢口鹿野線の東側に隣接する水田に掘削された工事用の仮沈砂地で、2箇所の内の西側の既開口部に3.0m×4.0mの南北トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約5cm～10cmに亘る黄褐色の耕作土である。第2層は、約5cmで暗灰黄色の耕作土である。第3層は、トレンチ北側の一部で検出された凹地で、暗灰黄色の砂土が堆積しており、遺構の可能性も残る。第4層は、層厚5cm～20cmで黄灰色の水田底土である。第5層は、層厚5cm～15cmの灰黄色の粘質砂である。第6層は、層厚5cm～20cmで灰色粘質土の遺構検出面である。第7層は、溝状遺構と推定される落ち込みに堆積した埋土で、炭化物を含み第8層が堆積してから短期間に堆積したものと思われる。第8層は、層厚5cm～15cmの灰色の粘質土で、溝状遺構が掘られて最初に堆積したものである。第9層は、層厚5cm～30cmの灰色シルトで、溝状遺構の掘込面である。第10層は、層厚約5cmの灰色シルトで、東方へ緩やかに下降している。第11層は、層厚30cm以上のオリーブ灰色砂で、今回調査を行った最下層である。

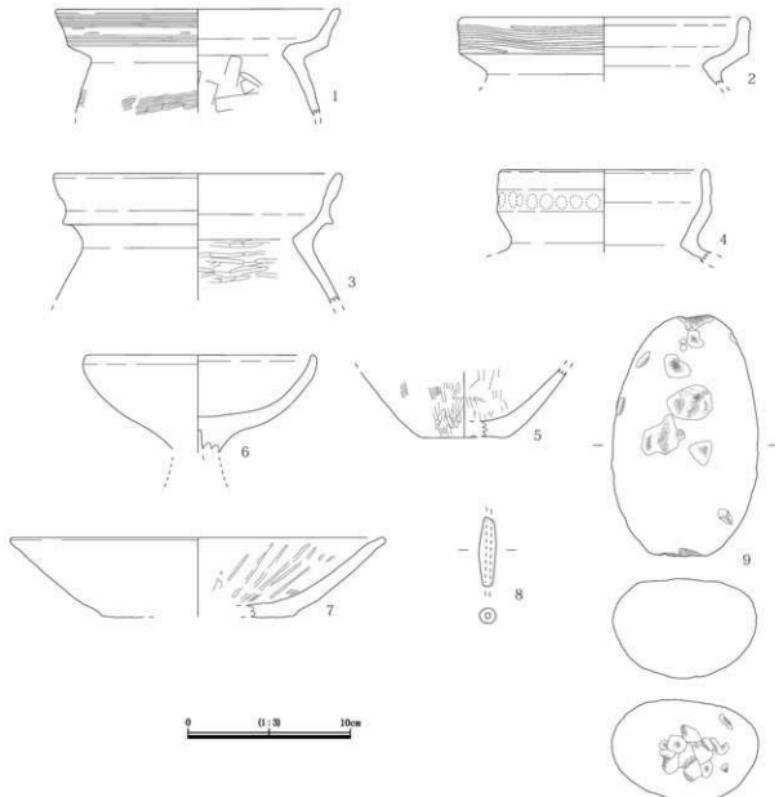


第65図 下坂本清合遺跡 第18・19トレンチ実測図

**第19トレンチ (Tr- 19)** [第60・65図 図版16・18]

調査トレンチは、県道矢口鹿野線の東側に隣接する水田に掘削された工事用の仮沈砂地で、2箇所の内の東側の既開口部に3.0m×4.0mの東西トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、第1層がトレンチの一部に残る薄厚でにぶい黄褐色の耕作土である。第2層は、層厚10~20cmで暗灰黄色の水田床土である。第3層は、トレンチ北側で検出された凹地で、第6層を掘り込んでおり、暗灰黄色砂の埋土中から土師皿片を検出したが、細片であることから時期等の詳細は不明である。第4層は、トレンチ東側で検出された層厚約20cmの凹地で、後述の第5・7・8層を掘り込んでおり、黄灰色砂の埋土中に炭化物を含むが、時期等の詳細は不明である。第5層は、トレンチ東側で検出された層厚約20cmで炭化物を含んだ黄灰色土が堆積する凹地で、第7・8層を掘り込んでおり、南面は第4層の凹地に切り込まれているが、時期等の詳細は不明である。第6層は、層厚10cm~40cmの黄灰色粘質土で、北側で検出された凹地の掘込面である。第7層は、層厚10cm~20cmの灰黄色粘質



第66図 下坂本清合遺跡 出土遺物実測図

土で、遺構の掘込面である。第8層は、層厚5cm～30cmの灰色の粘質砂で、粗い砂が短期間で堆積したものである。第9層は、トレンチ南側の一部に見られる層厚約10cmの灰色粘質土である。第10層は、層厚約5cm～15cmの炭化物を含む灰色粘質砂で、西方向へ緩やかに傾斜している。第11層は、層厚約5cm～15cmの灰色粘質砂で、西方向へ緩やかに傾斜している。第12層は、層厚25cm以上の灰色粘質土で、西方向へ緩やかに傾斜している。第13層は、上面のみの検出で、灰色の粗い砂が堆積していた。

## 小結

今回の調査区周辺では、丘陵裾の水田部で弥生時代後期の住居跡と思われる床面と多くの出土遺物が検出されており、丘陵部までその広がりを確認するため、丘陵下部から中腹にかけて4箇所のトレンチと県道矢口鹿野線の東側に隣接する水田の工事用仮沈砂地を精査しての確認調査である。

調査の結果、丘陵下部のトレンチでは器壁の摩耗が著しい土師器片を検出したが、遺構等は検出されなかった。中腹では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層と県東部では類例の少ない丘陵中腹に於ける住居跡の所在が想定された。

県道矢口鹿野線の東側に隣接する水田部のトレンチでは既に開口していたことから、詳細な遺物の時期、出土状況を把握することはできなかったが、土師器片と凹地の掘込面が検出され、この辺りまで遺跡の拡がりが確認された。

## 第11節 上原古墳群

上原古墳群は、鳥取市気高町上原及び飯里に所在し、県道鷲峰気高線の西方丘陵に展開する。調査対象となった古墳は、戦国大名【亀井茲矩】の墓所から南西に約1kmに所在する。

今回実施した発掘調査は、柿京寺川砂防堰堤建設工事及び水井出川砂防工事に伴う試掘調査で、工事によって削平される範囲の3箇所にトレンチを設定し、遺跡の有無を確認した。



第67図 上原古墳群 調査トレンチ位置図

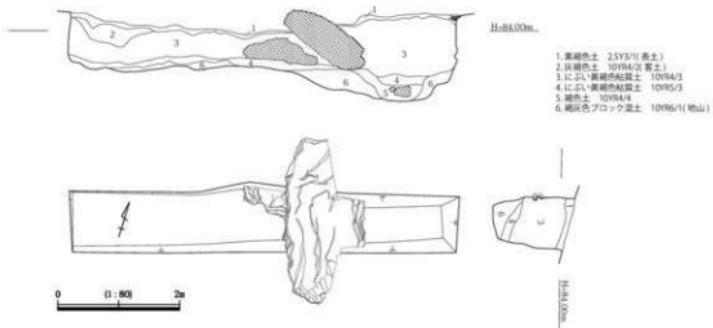
### 第1トレント(Tr-1) [第67・68図 図版18]

調査地は、気高町上原地内の「柿京寺川」に建設が予定されている柿京寺川砂防堰堤予定地内で、北丘陵尾根の裾部に古墳の可能性がある石材の一部が地表から露出しており、予定地外の隣地には横穴式石室の所在が数基確認されている。

トレントは、前述の石材を取り込むように1.0m×6.5mの東西トレントを設定し、地表下約1.4mまで掘り下げて古墳の是非、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～15cmで黒褐色の表土である。第2層は、トレントの西側の一部に認められる層厚約30cmで灰褐色の客土で、北丘陵裾に沿って延びる山道を造成する際の堆土と思われる。第3層は、層厚30cm～100cmで人頭大の礫を含むにぶい黄褐色の粘質土が厚く堆積している。第4層は、層厚5cm～20cmにぶい黄褐色の粘質土で、北丘陵からの流入土である。第5層は、層厚約25cmの褐色土で、凹地に堆積する褐色の礫混土である。第6層は、褐灰色の地山である。

当初、古墳の石室を構成する石材ではないかと思われていた石材は、歪で石室を構成する材としても不向きであり、埋土も北丘陵からの流入土であることから、自然石が転落したものと考えられ、遺物等も検出されなかった。



第68図 上原古墳群 第1トレント実測図

### 第2トレント(Tr-2) [第67・69図 図版18・19]

当該地は、気高町飯里地内の「水井出川」に施工される水井出川砂防工事予定地内で、周辺には封土が流失して石室を構成する石組みが露わになった横穴式石室が点在する。調査地は、堰堤関連施設の敷設予定地に1.5m×6.0mの南北トレントを設定し、地表下約1.4mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm前後と薄厚で黒褐色の表土である。第2層は、層厚15cm～25cmで砂礫を多く含むにぶい赤褐色土で、水井出川の氾濫と南丘陵からの流出土が地表面を下ったものと思われる。第3層は、層厚10cm前後の暗褐色土である。第4層は、層厚20cm～35cmで指頭大の礫を多く含む灰黃褐色土が厚く堆積したもので、トレントの北側では、第8層で検出した集石遺構上面の堆積に沿って下層からの起伏が見られる。第5層は、層厚10cm前後の褐色粘質土である。第6層は、層厚10cm～20cmの粒礫を多く含む灰黃褐色土で、南丘陵からの流出土と思われる。第7層は、層厚10cm～40cmの粒礫を含む暗灰黄色土で、集石遺構上面の堆積に沿って下層からの起伏が見られる。第8層は、トレント北側の一部に見られる層厚20cm前後で黒褐色の粘質土で、集石遺構の検出面である。第9層は、トレント北側に所在する集石遺構の盛り土の一部で、炭化物を多く含むオリーブ黑色土である。第10層は、

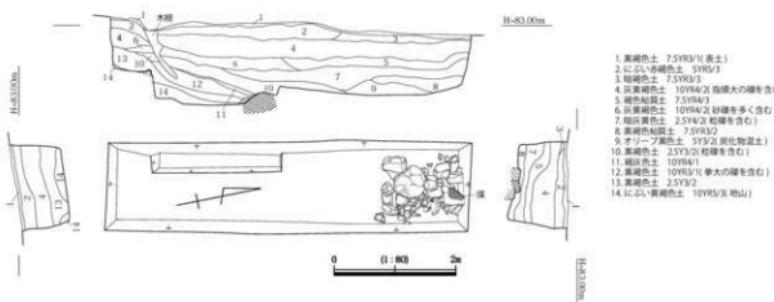
層厚20cm前後で粒礫を多く含んだ黒褐色土で、南丘陵からの流出土が堆積したものと思われる。第11層は、トレンチ南側の一部に見られる薄厚の褐灰色土で、南丘陵からの流出土が堆積したものと思われる。第12層は、トレンチ南側の一部に所在し拳大の礫を含む黒褐色土で、南丘陵からの流出土が堆積したものと思われる。第13層は、層厚10cm～30cmの黒褐色土で、南丘陵からの流出土が堆積したものと思われる。

### 【集石造構】〔第67・69図 図版18・19〕

集石造構は第8層中で検出されたが、トレンチ壁の各面での観察でも掘込面が見られないことから、旧地表面に露頭していた集石造構に第8層を含む上層が堆積していったものと思われる。

石材は全て凝灰岩で構成され、拳大～人頭大の割裂片を不規則に重ね、中心となる頂部に幅約50cm程度の他に比して大きな自然石を積んでいる。着目されるのは、トレンチ北面に接する扁平石の上面のみが直径30cm程度の半円形状に黒く煤けて沈着が見られ、集石の隙間から青灰色の須恵器片が1点検出されたが、時期の特定には至らなかった。

本調査は、トレンチによる制約下の試掘調査であることから、更なる掘り下げ等は行わず、以後の詳細調査に委ねることとしたが、形態から埋葬施設である可能性が高く、地山を掘り込んで埋葬後に石材を積み重ねたもので、以後に多量の土砂が堆積したものと推定される。



第69図 上原古墳群 第2トレンチ実測図

### 第3トレンチ(Tr-3) 〔第67・70図 図版18・19〕

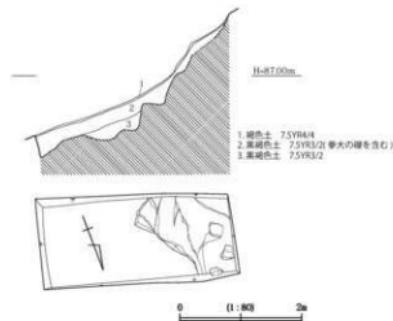
当該地は、「水井出川」に施工される水井出川砂防工事に係る堰堤関連施設への取り付け道の予定地で、周辺には封土が流失して石室を構成する石組みが露わとなっている横穴式石室が点在する。調査地は、横穴式石室の石材ではないかと思われる巨石の一部が露頭している傾斜地で、巨石の一部を掛けて1.5m×3.0mの東西トレンチを設定し、地表下約0.3mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が薄厚で褐色の表土である。第2層は、層厚20cm～30cmで拳大の礫を多く含む黒褐色土である。第3層は、起伏の岩肌に堆積した層厚20cm前後黒褐色土である。

当初、古墳の石室を構成する石材ではないかと思われていた石材は、岩肌の一部が露頭していたものであり、遺物等も検出されなかった

### 小結

今回の発掘調査では、水井出川に施工される堰堤関連施設の敷設予定地の第2トレンチで、凝灰岩を高く積み上げた集石造構を確認したが、周辺に点在する横穴式石室とは、形態、構造等を異にするもので、構築時期についてもかなりの差違があるものと思われる。石積の形態等から、中世以降の埋葬施設に類似性があり、土砂の堆積状況では近世以前に遡ると思われる。

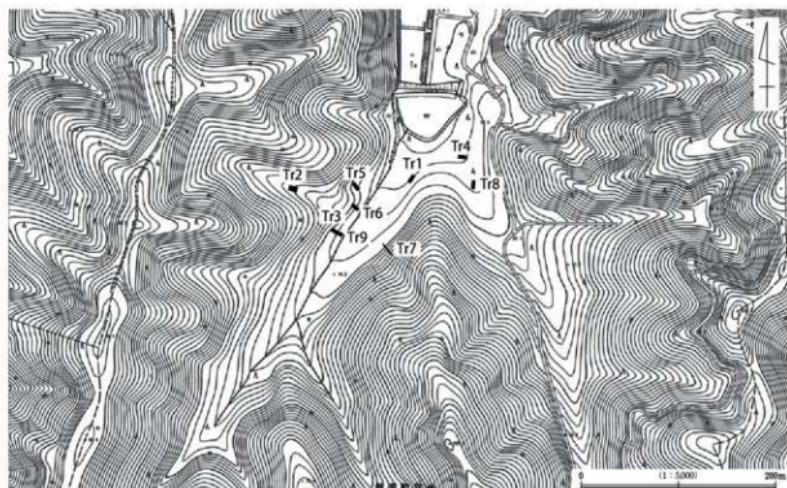


第70図 上原古墳群 第3トレンチ実測図

## 第12節 日光長谷遺跡

日光長谷遺跡は、鳥取市気高町日光の山麓に位置し、コハクチョウの越冬地で知られる日光集落の水田を潤す溜め池の南に所在する。当該地は、両翼の低丘陵が迫る谷間に更に南方から派生する低丘陵が舌状に突出して、渓を二方向に分岐する狭小な渓地形が形成されている。周辺に見られる遺跡の分布状況は、東の丘陵に下坂本古墳群、西の丘陵には櫛掛古墳群が展開し、丘陵の南端には縄文時代早期の押型文土器を出土している柄杓目遺跡が所在している。

今回実施した発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に伴う試掘調査で、道路新設予定地内に9箇所のトレンチを設定し、遺跡の有無と広がりを確認した。



第71図 日光長谷遺跡 調査トレンチ位置図

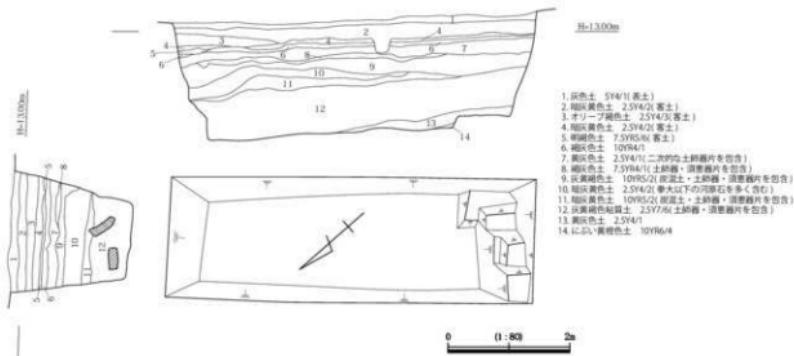
### 第1トレンチ(Tr-1) [第71・72・81図 図版19・20・38]

調査トレンチは、両翼丘陵の間に2.0m×6.0mの南北トレンチを設定し、地表下約2.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm程度で灰色の表土である。第2層は、層厚10cm～30cmで暗灰黄色の旧耕作土で、層中からビールピンが検出された。第3層は、層厚10cm～30cmで暗灰黄色の旧耕作土である。第4層は、層厚5cm程度でビニール等が混在し、花崗岩ブロック粒が混入する暗灰黄色の客土である。第5層は、層厚5cm程度でトレンチの北側の一部に見られる明褐色の客土である。第6層は、層厚5cm程度の褐色土である。第7層は、層厚5cm～25cmの黄灰色土で、破断面の摩耗が著しい土師器片を包含する黄灰色土である。第8層は、層厚5cm程度で時期の特定はできないが、土師器片、須恵器片を包含する褐色土である。第9層は、層厚5cm～35cmで灰黃褐色土に炭化物が混入し、8世紀頃の土師器片、須恵器片を包含するが、摩耗が著しく二次的な様相を呈している。第10層は、層厚10cm～30cmで拳大以下の河原石を多く含む暗灰黄色土である。第11層は、層厚10cm～20cmで炭化物が混入する暗灰黄色土に土師器片、須恵器片を包含するが、摩耗が著しい。第12層は、層厚50cm～80cmと厚い灰黃褐色の粘質土で、8世紀頃の土師器片、須恵器片を包含する。第13層は、層厚約20cmの黄灰色土で、遺物等は見られない。第14層は、にぶい黄橙色の地山である。

包含されている遺物は、各層中で破断面に摩耗が著しいことから、狭い渓地形の上方から土砂の流失が繰り返されて堆積したもので、二次的な遺物包含層と推定され、遺構は確認されなかった。

出土遺物は、第8層から検出された低い高台が取り付く須恵器の环(15)で、口縁部が欠損している。焼成不良により坏部の中心が大きく落ち込んでいるが、「八」の字形に開くしっかりとした高台が貼り付く。内外面共にナデの痕跡が認められるが、器壁が著しく摩耗していることから詳細は不明である。器形から8世紀初頭と思われる。



第72図 日光長谷遺跡 第1トレンチ実測図

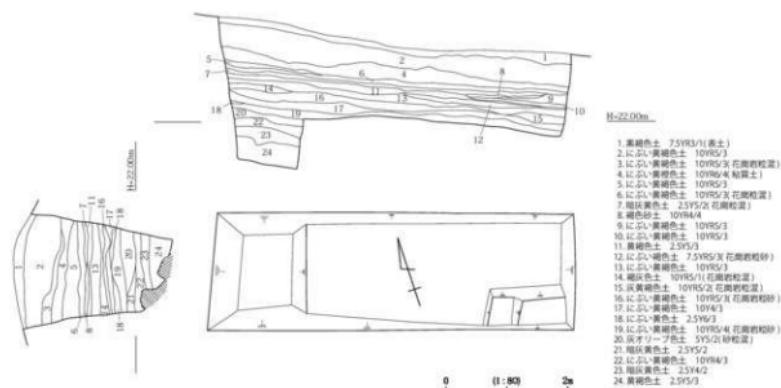
### 第2トレンチ(Tr-2) [第71・73図 図版19・20]

調査トレンチは、本遺跡の所在を構成すると思われる渓地形の西の支渓で、新設道の坑口に接する狭小の渓に2.0m×6.0mの東西トレンチを設定し、流失土が厚く堆積する様相を呈していたことから、西側の一部を特に地表下約2.5mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm程度で黒褐色の表土である。第2層は、層厚15cm～55cmの

にぶい黄褐色土である。第3層は、層厚15cm程度で花崗岩粒が混入するにぶい黄褐色土である。第4層は、層厚5cm～25cmでにぶい黄橙色土の粘質土である。第5層～第20層は、薄厚で花崗岩粒が多く混入する黄色及び褐色系の堆積土で、上流からの土砂が流失と堆積を繰り返しており、遺物等も確認されなかった。第21層は、層厚10cm程度でトレンチの西側の一部に堆積する暗灰黄色土である。第22層は、層厚10cm～20cmのにぶい黄褐色土である。第23層は、層厚10cm程度の暗灰黄色土である。第24層は、層厚40cm程度で黄褐色の軟弱土である。

溪地形の上方から土砂の流失が高い頻度で繰り返されており、遺構、遺物等は検出されなかった。

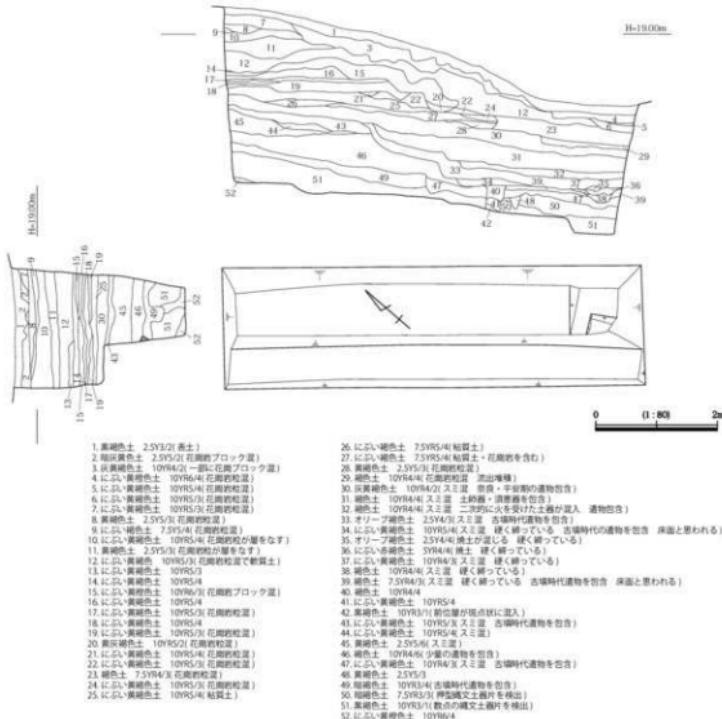


第73図 日光長谷遺跡 第2トレンチ実測図

### 第3トレンチ(Tr-3) [第71・74・81図 図版19・20・37～39]

調査トレンチは、新設道路予定地内の南端で西丘陵裾に2.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下約3.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm程度で黒褐色の表土である。第2層～第29層は、薄厚と複雑な起伏が緩やかに下降し、花崗岩粒が多く混入する黄色及び褐色系の堆積土で、上流からの土砂が流失と堆積を繰り返しており、遺物等も確認されなかった。第30層は、層厚10cm～30cmの炭化物が混入する灰黃褐色で、奈良～平安期の遺物を包含する。第31層は、層厚20cm～35cmの炭化物を混入する褐色土で、奈良～平安期の土師器片、須恵器片を包含する。第32層は、層厚10cm程度の炭化物が混入する褐色土で、二次的に加熱を受けている土師器片、須恵器片を包含する。第33層は、層厚15cm～25cmの炭化物が混入が見られる硬化したオリーブ褐色土で、古墳時代後期の遺物を包含し、凸レンズ状に膨らみをもつ焼土の検出面である。第34層は、層厚10cm程度で炭化物が混入し、硬化したにぶい黄褐色土で古墳時代後期の遺物を包含している。第35層は、オリーブ褐色で硬化してレンズ状に膨らんだ焼土面の一部である。第36層は、にぶい赤褐色に硬化して凸レンズ状に膨らんだ焼土の断面である。第37層は、にぶい黄褐色に硬化した焼土の断面である。第38層は、褐色に硬化して凸レンズ状に膨らんだ焼土の底面である。第39層は、層厚5cm程度で炭化物が混入し、硬化した褐色土で古墳時代後期の遺物を包含する。第40層は、褐色土が堆積した幅25cm深さ40cmのピット状の一部である。第41層は、にぶい黄褐色土が堆積したピット状の一部である。第42層は、黒褐色土が堆積したピット状の一部である。第43層は、層厚5cm～20cmで炭化物が混入するにぶい黄褐色土で古墳時代後期の遺物を包含する。第44層は、トレンチ



第74図 日光長谷遺跡 第3トレンチ実測図

の北側の一部に見られる層厚10cm程度で炭化物が混入するにぶい黄褐色土で、古墳時代後期の遺物を包含する。第45層は、トレンチの北側に見られる層厚10cm～30cmで、炭化物が混入する黄褐色土で、古墳時代後期の遺物を包含する。第46層は、層厚20cm～55cmの褐色土で古墳時代後期の遺物を少量包含する。第47層は、層厚5cm～20cmの炭化物が混入するにぶい黄褐色土で、古墳時代後期の遺物を包含し、レンズ状焼土面の下面である。第48層は、黄褐色土が堆積したピット状の遺構である。第49層は、トレンチの北側に見られる層厚10cm～20cmの暗褐色土で、古墳時代後期の遺物を少量包含する。第50層は、層厚15cm～30cmの暗褐色土で、縄文時代早期の押型文土器を少量包含する。第51層は、層厚約25cmで、黒褐色土の上面に少量の押型文土器を包含する。第52層は、にぶい黄褐色の地山である。

出土遺物は、(1～7)が縄文時代早期の押型文土器で高山寺式系に併行すると思われる楕円文の深鉢形である。これらはいずれも小片で口縁部・胴部と見られ、底部は検出されていないが、逆円錐形状の尖底と思われる。胎土中に径2mm程度の繊維を多く混入させ、焼成は比較的良好で、調整痕等から複数個体と思われる。調整は、整形後に内外面共にヨコナデを施し、外面は短径6mm・長径10mm前後の穀粒形を呈する楕円文の押型文原体は、縦位を基調に回転させており、胴部内面に見られる幅広の斜行沈線等の施は施されていない。器厚は1.0cm程度と比較的の薄厚である。器形の推定ができる(1)は、「八」の字に開く口縁部の口唇部をつまんで直立させ、端部を平にしている。(4)は、直立する口縁端部を外方へ

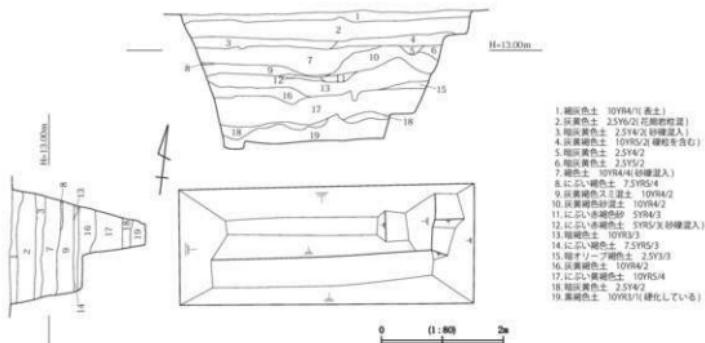
折り曲げて端部をナデて平にしている。(2・3・5・6・7)は、部位の推定はできないが、胴部の一部である。この外に胎土等から同一個体と思われる数点の細片が検出されており、押型文の施文が施されていないことから、底部に近い部位と思われる。(9)は、外面に繩文を施しただけの深鉢である。整形後の内面に条痕を施し、外面は単節L<sub>R</sub>の繩文原体を横位に回転させている。不明瞭な点も見られるが、胎土中には径2mm程度の纖維を混入させている。

(11)は、須恵器の坏身で、底部を欠損している。立ち上がりは、内傾して緩やかに上方へ向く、端部は丸くつまんでいる。受部は立ち上がりに沿って上方へ延び、端部も丸くつまんでいる。残存する器形から椀状になると思われ、内外面共に回転によるナデ調整が施されている。7世紀前半の所産と思われる。(12)は、基部から「ハ」の字に大きく外反する須恵器の低脚高杯で、基部の一部を残して上位の坏部を欠損している。整形後、内外面共にヨコナデを施している。7世紀前半の所産と思われる。(14)は、口縁端部が大きく外反する土師器の壺で、頸部以下を欠損する。内面のくびれ部は、指押さえで整形後にハケメ調整を施す。口縁端部は、折り曲げ後につまりみ出して丸くおさめ、仕上げは内外面共にヨコナデを施している。(16)は須恵器の壺で、肩部以下が欠損している。頸部は大きく外反し、直線的に口縁端部まで立ち上がって、口縁端部は丸くおさめている。頸部内面はタタキ痕を残し、口縁は内外面共にヨコナデを施す。仕上げは、口縁外面に櫛状工具による2条の沈線を巡らせ、最後に鋭く尖った施文具によるヘラ記号を施している。

#### 第4トレンチ(Tr-4) [第71・75図 図版19・20・21]

調査トレンチは、新設道路予定地が中央の低丘陵で谷分かれする東方の渓口に2.0m×5.0mの東西トレンチを設定し、地表下約2.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm～15cmで褐灰色の表土である。第2層は、層厚20cm～35cmで花崗岩粒が混入する灰黄色土である。第3層は、層厚10cm～15cmで砂礫が混入する暗灰黄色土である。第4層は、層厚10cm～20cmで砾粒を含む灰褐色土である。第5層は、凹地に堆積した暗灰黄色土である。第6層は、層厚20cm程度の暗灰黄色土である。第7層は、層厚20cm～45cmで砂礫が混入する褐色土である。第8層は、トレンチの西側の一部に所在する薄厚にぶい褐色土である。第9層は、層厚15cm



第75図 日光長谷遺跡 第4トレンチ実測図

～25cmで炭化物が混入する灰黄褐色土である。第10層は、トレンチの東に所在する層厚30cm程度の砂が混入する灰黄褐色土である。第11層は、トレンチの中程の一部に所在する層厚10cm程度のにぶい赤褐色砂である。第12層は、トレンチの中程の一部に所在する層厚5cm程度の砂礫が混入するにぶい赤褐色土である。第13層は、15cm～40cmの暗褐色土である。第14層は、トレンチの東側に所在する層厚10cm程度のにぶい褐色土である。第15層は、トレンチの西側に所在する層厚10cm程度の暗オリーブ褐色土である。第16層は、層厚15cm～30cmの灰黄褐色土である。第17層は、層厚30cm～50cmの厚く堆積したにぶい黄褐色土である。第18層は、層厚5cm～20cmの暗灰黄色土である。第19層は、層厚20cm以上で、硬化した黒褐色土である。

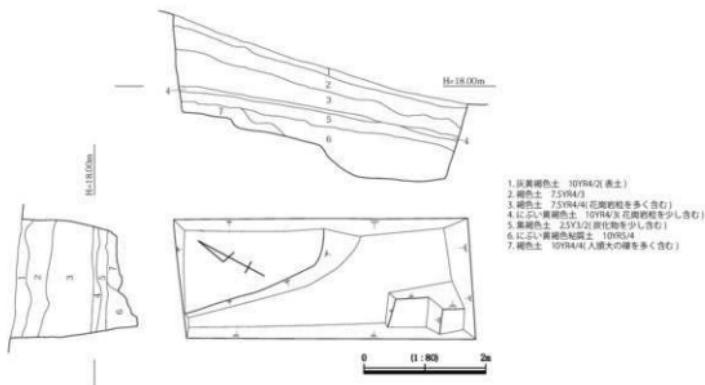
トレンチの中程に水路状の凹地が認められ、土砂が堆積と流失を繰り返しているが、生活の痕跡を示す遺構、遺物は検出されなかった。

#### 第5トレンチ(Tr-5) [第71・76図 図版19・21]

調査トレンチは、本遺跡の所在を構成すると思われる渓地形が西の支溪に取り付く傾斜地に2.0m×5.0mの南北トレンチを設定し、地表下約2.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm～25cmで灰黄褐色の表土である。第2層は、層厚25cm～45cmの褐色土である。第3層は、層厚15cm～90cmで花崗岩粒を多く含む褐色土である。第4層は、層厚5cm～15cmで花崗岩粒を少し含むにぶい黄褐色土である。第5層は、層厚10cm～25cmで炭化物をわずかに含む黒褐色土である。第6層は、層厚約70cmと厚く堆積したにぶい黄褐色の粘質土である。第7層は、トレンチの西側に所在する層厚20cm程度の褐色土で人頭大の礫を多く含む。

傾斜する地形に沿ってほぼ安定した堆積を示しており、人の生活痕を示す遺構、遺物等は検出されなかった。



第76図 日光長谷遺跡 第5トレンチ実測図

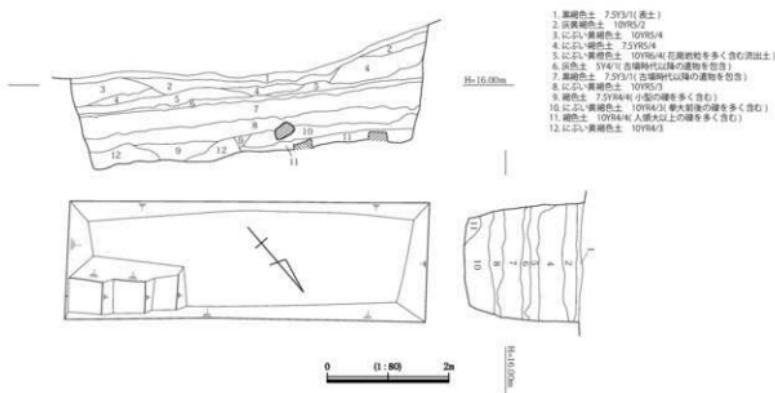
#### 第6トレンチ(Tr-6) [第71・77図 図版19・21]

調査トレンチは、本遺跡の所在を構成すると思われる渓地形と西の支溪の交差地に2.0m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下約2.0mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～15cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚5cm～20cmの

灰黄褐色土である。第3層は、トレンチの東側に所在する層厚35cm程度のびい黄褐色土である。第4層は、層厚10cm～45cmのびい褐色土である。第5層は、層厚10cm～20cmで花崗岩粒を多く含む流入土である。第6層は、層厚5cm～15cmで、古墳時代以降の遺物を包含する灰色土である。第7層は、層厚25cm～45cmで、古墳時代以降の遺物を包含する黒褐色土である。第8層は、層厚5cm～25cmのびい黄褐色土である。第9層は、礫層を含む凹地に堆積した褐色土で小型の礫を多く含む。第10層は、層厚10cm～40cmで拳大の礫を多く含むびい黄褐色土である。第11層は、層厚20cm程度の硬化した褐色土で人頭大以上の礫を多く含む。第12層は、トレンチ西側に所在する層厚30cm程度のびい黄褐色土である。

薄厚の第6層で、二次堆積の様相を示す古墳時代以降の遺物を検出し、第7層でも古墳時代以降の遺物包含層を検出したが、遺構等は検出されなかった。



第77図 日光長谷遺跡 第6トレンチ実測図

### 第7トレンチ(Tr-7) [第71・78図 図版19・21]

調査トレンチは、本遺跡の中程へ舌状に突き出した低丘陵の西裾に1.5m×9.0mの南北トレンチを設定し、地表下約1.6mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

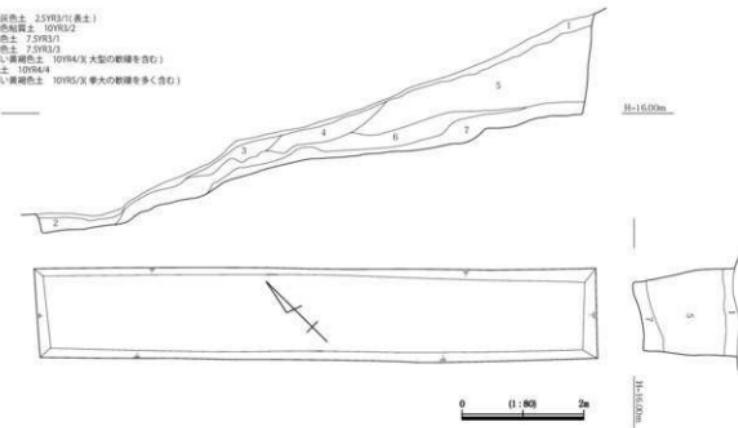
基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～20cmで暗赤褐色の表土である。第2層は、谷部に所在する層厚10cm～20cmで黒褐色の粘質土である。第3層は、層厚約25cmの黒褐色土である。第4層は、トレンチの中程に所在する層厚約30cmの暗褐色土である。第5層は、トレンチの南側に厚く堆積しており、大型の軟礫を含む層厚約120cmのびい黄褐色土である。第6層は、層厚5cm～30cmの褐色土である。第7層は、層厚5cm～40cmで拳大の軟礫を多く含むびい黄褐色土である。

各層共に丘陵の斜面に沿って継続的に安定した堆積を示しており、遺構、遺物共に検出されなかった。

### 第8トレンチ(Tr-8) [第71・79図 図版19・22]

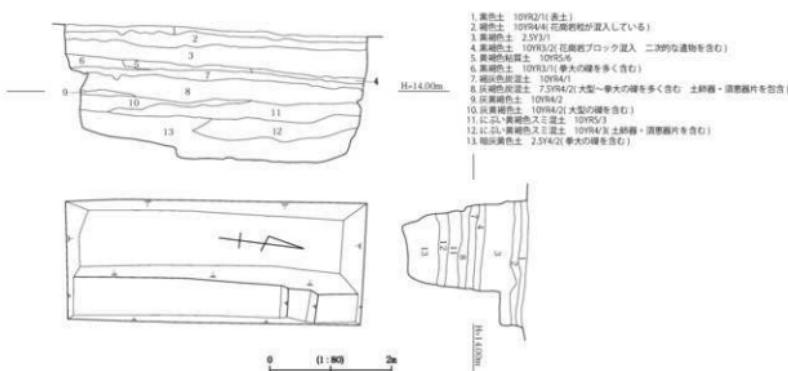
調査トレンチは、本遺跡の中程へ舌状に突き出した低丘陵の東の渓谷に2.0m×5.0mの南北トレンチを設定し、地表下約2.1mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

1. 黒赤灰土 2.5YR3/1(表土)
2. 黒褐色粘質土 10YR3/2
3. 黑褐色土 7.5YR3/1
4. 黑褐色土 10YR3/1
5. にじみ、黄褐色土 10YR4/3(大型の礫を含む)
6. 黄褐色土 10YR4/4
7. にじみ黄褐色土 10YR5/3(拳大の礫を多く含む)



第78図 日光長谷遺跡 第7トレンチ実測図

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～10cmで黒色の表土である。第2層は、層厚5cm～25cmで花崗岩粒が混入する褐色土である。第3層は、層厚25cm～50cmの黒褐色土である。第4層は、層厚5cm～10cmで花崗岩ブロックが混入する黒褐色土で、土師器片、須恵器片の二次的な包含が認められる。第5層は、層厚10cm程度で黄褐色の粘質土である。第6層は、層厚約15cm程度で拳大の礫を多く含む黒褐色土である。第7層は、層厚5cm～15cmで炭化物が混入する褐灰色土である。第8層は、層厚10cm～40cmで、拳大～大型の礫を多く含み、土師器片、須恵器片を包含するが、時期の特定には至らない。



第79図 日光長谷遺跡 第8トレンチ実測図

第9層は、トレンチ南側の一部に見られる薄厚の灰黄褐色土である。第10層は、層厚5cm～25cmで大型の礫を含む灰黄褐色土である。第11層は、層厚15cm～30cmで炭化物が混入するにぶい黄褐色土である。第12層は、層厚20cm～40cmでにぶい黄褐色土が堆積し、層中に古墳時代以降の土師器片、須恵器片を包含する。第13層は、層厚30cm～70cmで拳大の礫を含む暗灰黄色土である。

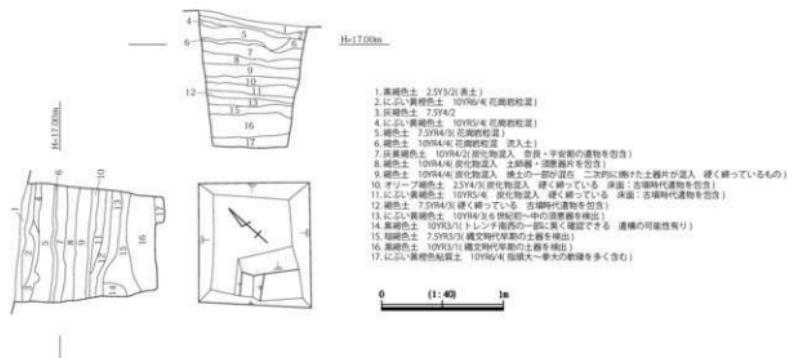
相対的に南の上流部では層厚が厚い傾向の堆積状況を見せていることから、流失土が繰り返して堆積し、第6・12層で検出されている古墳時代以降の遺物も二次的な様相を示していた。

### 第9トレンチ(Tr-9) [第71・80・81図 図版19・22・38]

調査トレンチは、第3トレンチで検出された古墳時代後期の焼土遺構、縄文時代早期の遺物包含層の広がりと性格を確認するために第3トレンチの東側に2.0m×2.0mの方形トレンチを新たに設定し、地表下約2.3mまで掘り下げた。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～10cmで黒褐色の表土である。第2層(Tr. 3-4層)は、花崗岩粒が混入する層厚5cm～15cmのにぶい黄橙色土である。第3層は、トレンチの西側に見られる層厚10cm程度の灰褐色土である。第4層(Tr. 3-5層)は、トレンチの東側の一部に見られ、花崗岩粒が混入する層厚10cm程度のにぶい黄褐色土である。第5層(Tr. 3-23層)は、花崗岩粒が混入する層厚約20cmの褐色土である。第6層(Tr. 3-29層)は、花崗岩粒が混入する層厚5cm～15cmで褐色の流入土である。第7層(Tr. 3-30層)は、炭化物を含む層厚10cm～20cmの灰黄褐色土で奈良、平安期の遺物を包含する。第8層(Tr. 3-31層)は、炭化物を含む層厚10cm～20cmの褐色土で土師器、須恵器片を包含する。第9層(Tr. 3-32層)は、炭化物を含む層厚15cm～30cmの硬化した褐色土で、焼土の一部が混入しており、二次的に焼けた土器片も見られる。第10層(Tr. 3-33層)は、炭化物を含む層厚5cm～15cmの硬化したオリーブ褐色土で、古墳時代の遺物を包含する。第11層(Tr. 3-34層)は、炭化物を含む層厚10cm～20cmの硬化したにぶい黄褐色土で、古墳時代の遺物を包含する。第12層(Tr. 3-39層)は、層厚5cm～15cmで硬化した褐色土で、古墳時代後期の遺物を包含する。第13層(Tr. 3-47層)は、層厚5cm～15cmのにぶい黄褐色土で6世紀初頭～中葉の須恵器を包含する。第14層は、トレンチの南側の一部に見られる黒褐色土の落ち込みで、遺構の可能性もある。第15層(Tr. 3-50層)は、層厚10cm～50cmに肥厚する暗褐色土で、縄文時代早期の土器を包含する。第16層(Tr. 3-51層)は、層厚40cm～50cmの黒褐色土で、縄文時代早期の土器を少量包含する。第17層は、指頭大～拳大の軟礫が多く混入するにぶい黄橙色の粘質土である。

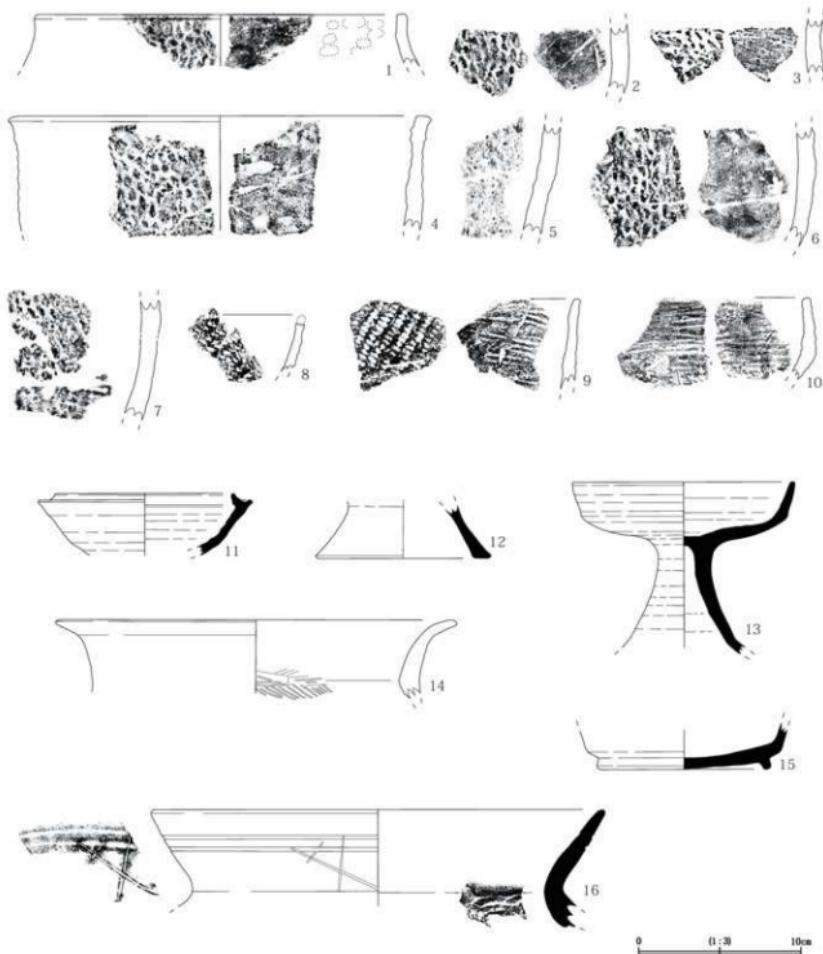
人の生活痕が見られなくなった後、土砂の流失と堆積が繰り返されており、上層では土砂の流入と堆



第80図 日光長谷遺跡 第9トレンチ実測図

積が高い頻度で繰り返されていたが、下層はほぼ安定した堆積を示していた。また、人の動きが活発に行われていたと推定される第13層～第16層では、硬く縮まった層中に高い密度で遺物が検出された。

出土遺物は、(8～10)が縄文時代の早期に比定されるものである。(8)は、口縁の端部で、不明瞭であるが外面に縄文を施しただけの鉢である。整形後の内面に丁寧なナデ調整を施し、端部を指先で揉き、工具で軽く平にしている。外面は、整形後に縄文を施しており、原体を横位に回転させており、胎土中に若干の纖維を混入させている。(10)は、二枚貝による貝殻条痕を施した薄厚の鉢で、頸部以下を欠損している。内外面共に二枚貝による貝殻条痕を横位に施した後軽くナデしている。(13)は、須恵器の無蓋



第81図 日光長谷遺跡 出土遺物実測図

高坏で底部を欠損する。坏部内面の底面は、ほぼ水平気味の平坦であり、坏部外面に稜を持ち口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸くつまんでおさめる。脚部は「ハ」の字状に開いて外反する。坏部は内外面共に回転によるヘラケズリ後ヨコナデを施している。6世紀前半の所産と思われる。

### 小結

今回の発掘調査では、南の上流部に設定したトレントの最下層で遺構は検出されなかつたが、縄文時代早期に位置付けられる遺物包含層を層位的に検出し、上層では古墳時代と推定される床面と焼土面を検出した。

縄文時代早期の遺物は、遠隔地からの流入物のような器壁が摩耗する二次的要素は見られないことから、近接地に遺構等を伴う生活拠点が所在する可能性が高い。また、昭和62年度に鹿野町教育委員会により発掘調査が実施され、縄文時代早期の押型文土器が多量に出土している「柄杓目遺跡」は、当該地から南方約3kmに所在することから、関連性の深い遺跡と考えられる。柄杓目遺跡出土の押型文土器から対比すると、柄杓目遺跡では、①山形文土器、黄鳥式の楕円文土器が出土している。②高山寺式の外面に施された穀粒形を呈する楕円文は、短径7mm・長径12mm程度とやや大きい。③内面に口縁まで達する幅広の斜行沈線が施されている。④器厚は、約12mmと比較的の厚い。等々の差異が認められ、当該遺跡の押型文土器は柄杓目遺跡出土の黄鳥式段階より新しく、同遺跡出土の高山寺式より少し古い段階に比定されると思われるが、近接する相互の遺跡関係は無視できないものであり、今後に引き継ぐ大きな課題であろう。

次に、大きく時期を隔てた古墳時代後期の焼土面、床面が検出されたことで、周辺を含めて建物跡の存在に注視する必要があるが、後に予定の詳細調査によって明らかになるものと思われるが、これらの生活面に終止符が打たれた後は、多量の土砂が高い頻度で堆積を繰り返されたものと推定される。北側の下流部では8世紀以降に位置付けられる遺物包含層を検出したが、二次的な様相を示していた。

本調査では、縄文時代早期に位置付けられる遺跡の所在が明らかとなり、その一端が成果として蓄積されることとなったが、詳細については後に予定されている綿密な調査に委ねることとする。

## 第13節 山手古墳群

山手古墳群は、鳥取市河原町山手地内に所在し、鳥取県の三大河川のひとつである一級河川の千代川右岸に位置し、同町山手と郷原との境を接する丘陵上に展開している。古墳群は、12基の古墳により構成されており、古墳群が所在する丘陵は、南方の三角山方行から派生する丘陵で、「主要地方道河原インター線」まで延びており、隣接の丘陵には「高福古墳群」、「郷原古墳群」が展開している。

今回の発掘調査は、鳥取県東部広域行政管理組合による可燃物処理場建設設計に伴う事前試掘調査である。現況は調査対象の全域が山林で、丘陵の削平後用地造成を行う計画であり、予定地の古墳群については丘陵上に高まりが見られる尾根部について遺跡の有無を確認するため、6箇所のトレントを設定し垂直的に調査を行った。なお、トレントNaについては、既調査トレントNaを継承している。

### 第6トレント(Tr-6) [第82・83図 図版22]

丘陵の北西に向けて大きく開口する谷地形の頂部で、クヌギ等の雑木が生い茂る緩斜面に1.0m×7.0mの南北トレントを設定し、地表下約1.05mまで掘り下げてた。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm～20cmの褐色土で、粘質の表土中に土師器の細片を包含し、墳丘からの転落の可能性がある。第2層は、層厚15cm程度にぶい黄褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含する。第3層は、層厚20cm～35cmにぶい黄褐色の粘質土である。第4層は、層厚20cm～30cmで墳裾部と推定される底面に堆積し、炭化物を含むにぶい黄褐色の粘質土である。第5層は、層厚20cm程度のにぶい黄褐色の粘質土で1・2cmの指頭大の地山ブロックを含む。第6層は、層厚15cm程度で黄橙色の粘質土で指頭大の地山ブロックを含む。第7層は、層厚10cm程度にぶい黄褐色の粘質土で封土の一部と

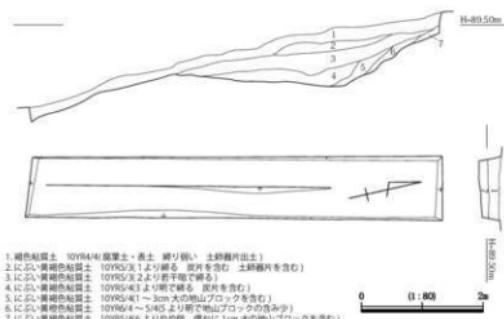


第82図 山手古墳群 調査トレンチ位置図

と思われる。

第1・2層で検出された数点の土師器片は、破断面が著しく摩耗しているが、口縁部の形状から2個体の壺と見られ、墳丘上から転落したものと思われる。

周溝は、地山を大きくカットして墳丘を造りだし、墓域を設けている。



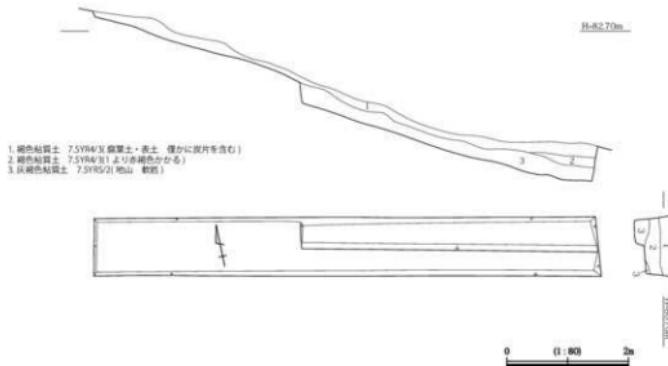
第83図 山手古墳群 第6トレンチ実測図

#### 第7トレンチ(Tr-7) [第82・84図 図版22・23]

調査トレンチは、主丘陵尾根から東に派生する支稜尾根に向かう緩斜面に1.0m×8.2mの東西トレンチを設定し、トレンチの中央から東方向を地表下0.6mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

第1層は、層厚10cm～20cmで褐色粘質の表土である。第2層は、トレンチの東側に見られる層厚15cm程度の褐色粘質で、第1層よりやや赤褐色に沈着。第3層は、層厚30cm以上の地山で、灰褐色の軟岩である。

遺構、遺物等は検出されなかった。



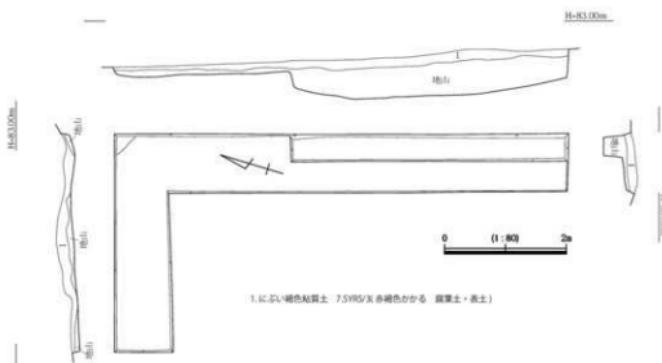
第84図 山手古墳群 第7トレンチ実測図

#### 第8トレンチ(Tr-8) [第82・85図 図版22・23]

調査トレンチは、主丘陵尾根の北端に狭い平坦面の高まりに1.0m×6.0mの南北トレンチを設定し、南側を特に地表下70cmまで掘り下げたが、詳細な確認が必要と判断されたことから、1.0m×4.0mの東西トレンチを接続して「L」字状のトレンチに拡張した。

第1層は、層厚5cm～15cmでぶい褐色粘質土の表土である。第2層以下を部分的に深く掘下げて確認したが、にぶい褐色の地山であることが明らかとなった。

遺物は検出されなかったが、周囲の地形等から墳丘が流失している可能性もある。

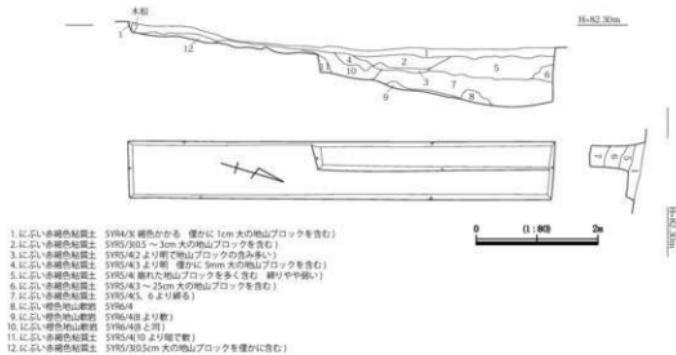


第85図 山手古墳群 第8トレンチ実測図

### 第9トレンチ(Tr-9) [第82・86図 図版22・23]

調査地は、主丘陵の突端部に1.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、トレンチ中央から北方向を特に地表下60cmまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

第1層は、層厚5cm～15cmでにぶい赤褐色の粘質土で少量の地山ブロックを含む。第2層は、トレンチのはば中央に所在する層厚20cm程度のにぶい赤褐色の粘質土層で、0.5cm～3.0cmの地山ブロックを含む。第3層は、ほぼ中央に所在する層厚10cm程度のにぶい赤褐色の粘質土層で、地山ブロックを多く含む。第4層は、ほぼ中央に所在する層厚約10cm程度のにぶい赤褐色の粘質土で、やや大きい地山ブロックを含む。第5層は、層厚30cm程度でブロックを多く含むにぶい赤褐色の地山である。第6層は、層厚約30cmのにぶい赤褐色の粘質土中に3cm～25cmの大型の軟岩を含む地山である。第7層は、層厚50cm以上でにぶい赤褐色の地山である。第8層は、層厚20cm以上でにぶい橙色の軟疊の地山である。第9層は、層厚10cm以上でにぶい橙色の軟疊の地山である。第10層は、層厚20cm以上でにぶい橙色の軟疊を含む地山である。第11層は、層厚20cm以上でにぶい赤褐色の軟疊を含む地山である。遺構、遺物とともに検出されなかった。



第86図 山手古墳群 第9トレンチ実測図

### 第10トレンチ(Tr-10) [第82・87図 図版22・24]

調査地は、主丘陵の突端部に1.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、トレンチ中央から北方向を特に地表下35cmまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

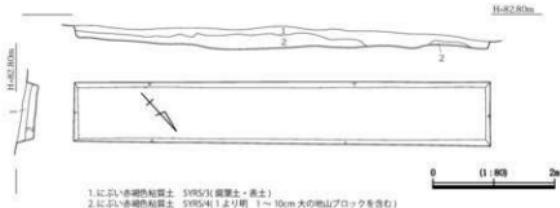
第1層は、層厚10cm～20cmでにぶい赤褐色の粘質土である。第2層は、層厚25cm以上でやや大型のブロックを含む。

遺構、遺物等は検出されなかった。

### 第11トレンチ(Tr-11) [第82・88図 図版22・24]

調査地は、主丘陵の突端部から北方の緩斜面に1.0m×7.5mの南北トレンチを設定し、地表下1.4mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

第1層は、層厚5cm～20cmでにぶい赤褐色の粘質の表土である。第2層は、層厚約20cmでにぶい赤褐色の粘質土が堆積する古墳の主体部に堆積した埋土と思われる。第3層は、層厚15cm以上でにぶい赤褐色の粘質土が堆積し、墓坑の可能性がある落ち込みに堆積した埋土である。第4層は、層厚約35cmで灰褐色の粘質土である。第5層は、薄厚で灰褐色の粘質土中に地山ブロックを含む。第6層は、層厚20cm



第87図 山手古墳群 第10トレンチ実測図

~30cmで灰褐色の粘質土中に炭化物を含む。第7層は、層厚約30cmでにぶい赤褐色の粘質土中に炭化物を含む。第8層は、層厚10cm~20cmのにぶい橙色の粘質土が肩部に堆積する。第9層は、墳裾に厚く堆積したにぶい橙色の粘質土で、地山ブロックを含み硬く締まっている。第10層は、墳裾に堆積したにぶい橙色の粘質土で、地山ブロックを多く含み硬く締まっている。第11層は、墳裾のテラス状面に堆積する層厚15cm程度のにぶい橙色の粘質土で、地山ブロックを含む。第12層は、にぶい橙色で粘質系の地山である。

トレンチ南西で、第11層を掘り込んだ墓坑と推定される埋葬施設の一部を検出しているが、隣接する東西トレンチの第10トレンチで検出されなかったことから、主体部は東西方向に所在するものと思われる。墳丘の墓域を示す周溝は検出されなかったが、裾の地山を削ることで平坦なテラス面を形成して墳形を整えている。



第88図 山手古墳群 第11トレンチ実測図

## 小結

今回の調査では、丘陵の尾根上で2基の古墳と推定される遺構面を確認し、前年の調査(平成25年度)では2基の古墳を確認しているが、何れも墳丘の封土が築造時に比して大きく流出しており、少しの掘り下げで主体部と推定される遺構面に達し、第8トレンチのように埋葬施設までも流出している可能性のある堆積状況を示すトレンチも見られた。今回は、尾根上に高まりが見られる隨所に限定しての調査であったが、丘陵尾根が細く所在する墳丘が出しやすい等の要因を示すものであり、丘陵の全体を精査することで新たな古墳の所在が確認される可能性もある。

## 第14節 古郡家所在遺跡

古郡家所在遺跡は、鳥取市街地南東側に所在する八坂山東側丘陵裾部に位置し、千代川水系大路川によって形成された河岸段丘上に立地している。隣接地には八坂古墳群、六部山古墳群、園原古墳群、越路古墳群など鳥取市内でも有数の古墳群が所在している。中でも北側丘陵上に所在している古郡家古墳群には千代川右岸最大の前方後円墳である古郡家1号墳が所在している。また南側にある七谷池周辺には須恵器を生産していた七谷窯跡群が所在している。

今回の調査は隣接地に所在する墓苑の拡張造成工事に伴うもので、丘陵裾の小規模な支稜線に挟まれた対象地内の水田耕作地に2ヶ所のトレンチを設定した。



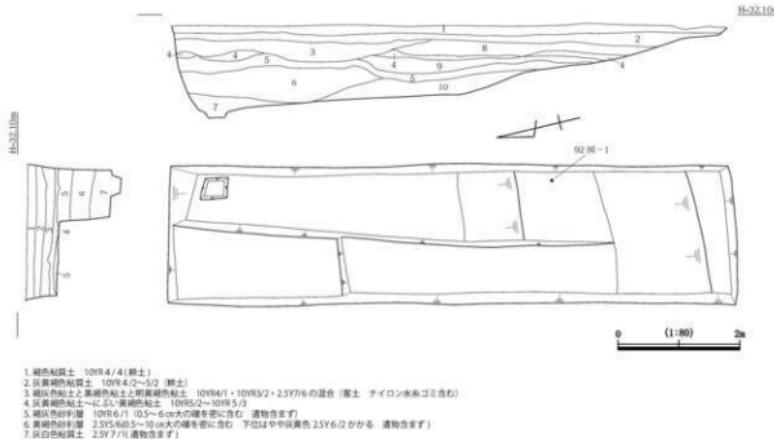
第89図 古郡家所在遺跡 調査トレンチ位置図

### 第1トレンチ(Tr-1) [第89・90・92図 図版24・39]

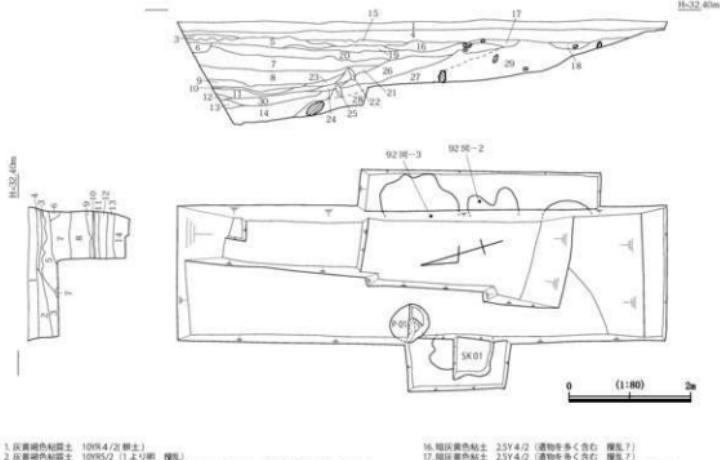
対象地内で南西～東北方向に延びる丘陵の北側丘陵裾に設定した9.1m×2.2mのトレンチである。地表面標高は32m弱である。地表面下1.5m程度の灰白色粘質土(第7層)途中まで掘下げを実施した。

地表面下20cm程度が現在の耕土(第1、2層)で、その下面から深さ30cm程度の搅乱とみられる落ち込みを部分的に検出した。耕土下の第8、4層は無遺物層で、その下の第9層(黒褐色粘土層:標高約31.4m以下)が遺物包含層である。以下谷の自然堆積層とみられる砂利層第6、10層と続き上述第7層となる。

第9層出土の遺物は自然堆積による流入遺物とみられ、瓦質の底部片や須恵器底部片、赤彩の土師器



第90図 古都家所在遺跡 第1トレント実測図



第91図 古都家所在遺跡 第2トレント実測図

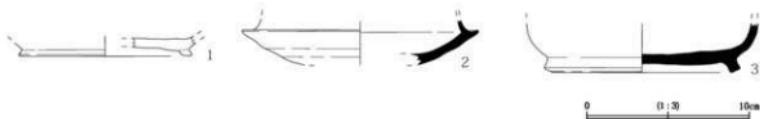
片が僅かながら出土した。(1)は瓦質の壺の底部である。「ハ」の字状に開く高さ約3mm程度高台を持ち、復元径は5.3cmを測る。なお、遺構は検出されなかった。

## 第2トレンチ(Tr-2) 〔第89・91・92図 図版25・39〕

対象地内東西方向に延びる丘陵の南側丘陵裾微高地に設定した8m×2.2mのトレンチで、部分的に拡張し面積は20.88m<sup>2</sup>となった。地表面標高は第1トレンチより一段高い32.25m程度である。

地表面下30cm前後が現在の耕土(第1、4層)で、その下は搅乱とみられる第3層および客土とみられる第5層となる。この第5層上面付近(標高31.9m程度)には部分的に擾乱とみられる第15、16、17層が認められ、以下は、北側は丘陵から続く地山(第27~29層)が南に15度程度の勾配をもって下がる。第5層と地山との間には谷の自然堆積とみられる粘土層が砂質土層や砂礫層を挟みながら堆積する。

遺物は、耕土である第4層とその下層の搅乱とみられる第16、17層から古墳時代の須恵器、土師器が出土したほか、地山を掘り込む土坑(SK-01)から土師器細片が僅かながら検出された。(3)は須恵器の高台付の壺身である。上端部は欠損しており、底部の復元径は12.0cmを測る。「ハ」の字形に開く高台を持つ。(2)は須恵器の壺身で、復元径は12.2cmを測る。



第92図 古郡家所在遺跡 出土遺物実測図

## 小結

今回の調査では第1トレンチでは二次的な堆積による遺物包含層を確認し、第2トレンチでは遺物包含層及び土坑、ピットを検出した。このことから第2トレンチ周辺は遺跡が広がっていると考えられ、開発に当たっては調査が必要になると考えられる。また、耕土や搅乱土とみられる堆積層中ながら古墳時代の遺物が出土しており、周辺の丘陵裾には横穴石室等も所在することから、周辺での開発等には注意が必要である。

## 第15節 大井所在遺跡

調査地は、鳥取市佐治町大井665-2に位置している。北西へ約500mで佐治川対岸の佐治町森坪集落に至る。大井地区には佐治川下流に平安時代の金鉢原遺跡、中世の集落遺跡の大井家ノ下モ遺跡、大井経塚、上流には古墳時代後期から平安時代の集落遺跡である大井聖坂遺跡が位置している。さらに、丘陵上には古墳時代後期の大井3号墳などの古墳も知られている。また、13世紀には佐治氏が屋敷を構えたと伝えられている。佐治川流域では最も多くの遺跡が知られている地域である。

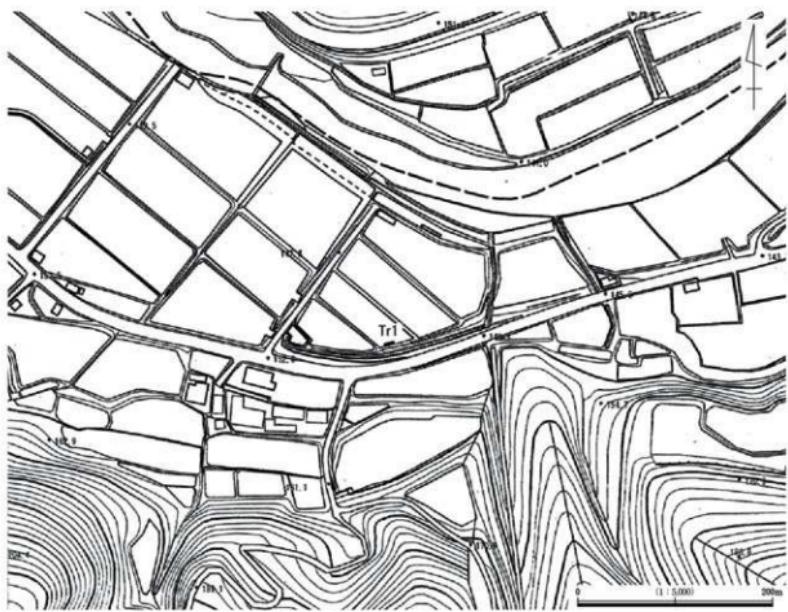
今回の調査は市道南岸線改良工事に伴って実施したもので、市道南岸線工事予定区域内にトレンチを設定し、確認調査を行った。

## 第1トレンチ(Tr-1) 〔第93~95図 図版25・39〕

市道南岸線北側の水田南東隅にトレンチを設定した。

トレンチの規模は東辺2.1m・西辺1.98m・南辺6.8m・北辺6.98mである。水田面の標高は、約148.8mであった。現在の道路との比高は約2.5mである。

表土下50cmまで掘り進めたところ、トレンチ北側において東西方向の暗渠(土管使用)が検出された。トレンチ北西隅で北壁から南南東に向かって約30cmのところで東に屈曲してトレンチ外まで続いている。



第93図 大井所在遺跡 調査トレンチ位置図

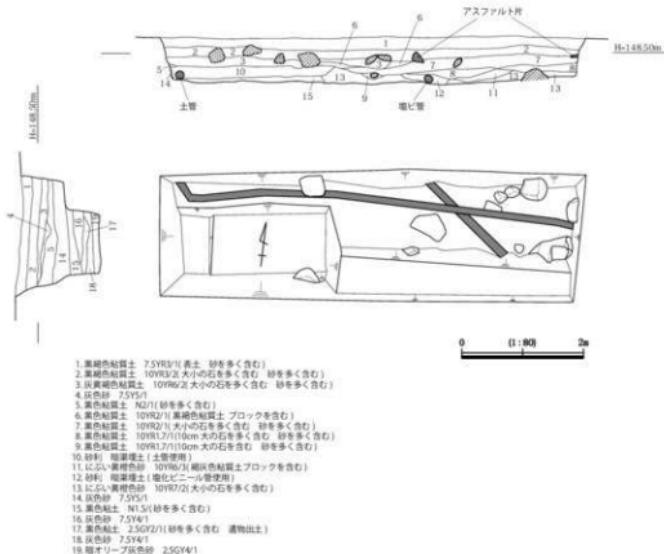
た。また、トレンチ中央部分より約1m東寄りの部分で、前記の暗渠の下に有孔の塩化ビニール管を使用した暗渠が北西-南東方向にトレンチを横断していた。土管を使用した暗渠は現在使用されていると判断して保全を図りつつ周囲を掘り下げたところ、大型の花崗岩を含む砂層を掘り下げて暗渠を設置していることが判明した。塩化ビニール管を使用した暗渠も同様であった。

土層堆積状況は、標高148.1m付近までは、暗渠も含めて耕作または場整備などの土地改良に係る土層であった。地表から約70cmを測る。

第1~10層は、表土および場整備に係る土層である。第11・12層は場整備以前の暗渠埋設にかかる土層である。第13・14層は砂層で、暗渠はこの層を掘り込んで埋設されていた。この砂層以下は、灰色系の砂と黒色系の粘土が相互に堆積している。自然流路による堆積であると考えられる。第15層は粘土層で、木の根などの有機物が含まれている。第16層は砂層である。第14層から第16層は無遺物層である。第17層は黒色粘土層であるが、砂を多く含んでいる。第18層との境の部分で土器が1点出土した。第18・19層は砂層である。第19層がやや暗い色調を呈する。無遺物層である。

遺物は、少ない。暗渠より上の層からは近世以降の磁器小片4点、須恵器杯口縁部小片1点、瓦質羽釜小片1点が出土した。暗渠直上の層と自然堆積層の境の部分からは、中世土師器壺胴部1点が出土した。自然堆積層中では第17層と第18層との境の部分で古代末の土師器壺片1点が出土した。

(1)は、土師器壺である。内面にはタール状の炭化物と煤状の炭化物、外面には煤状の炭化物が付着し、澄明皿として使用している。口径13.4cm、器高2.8cmを測る。底部は、回転糸切りで、体部は低い段を成してから緩く湾曲して立ち上がる。内は灰白色、外は灰黄色を呈する。(2)は、瓦質羽釜である。口縁端部直下に低い鈎を巡らせている。口縁部は、やや内傾している。



第94図 大井所在遺跡 第1トレンチ実測図



第95図 大井所在遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図

## 小結

今回の調査では、旧自然流路から古代の土師器壺が出土したが、わずか1点であり、上方からの流れ込みと考えられる。しかし耕作土中から、須恵器、土師器、瓦質土器などが出土しており、周辺に遺跡が存在することを示唆している。この地域の開発に当たっては十分な注意が必要になろう。

## 第16節 金沢坂津遺跡

金沢坂津遺跡は主要地方道鳥取・鹿野・倉吉線に隣接した丘陵裾部に位置する。周辺の丘陵上には岩本古墳群が所在し、南東側の水田地帯には縄文時代晩期～近世の遺物等を確認した金沢坂津口遺跡、弥生時代中期から古墳時代にかけての水田や居住域が確認された松原田中遺跡、南東側の標高44mの丸山には戦国時代に吉岡氏が築いたといわれる丸山城が所在している。

今回の調査は鳥取西道路建設計画に伴って実施したものである。当遺跡は平成25年度に試掘調査が行われ、翌年度には(公財)鳥取市文化財団による発掘調査が実施されていたが、調査が進むにつれ、遺跡が調査区外へ広がる可能性が生じた。このため遺跡の広がりを確認するために再度試掘調査を実施することになった。調査は事業計画区域内に2箇所の試掘トレンチを設定した。



第96図 金沢坂津遺跡 調査トレンチ位置図

**第1トレンチ(Tr-1)** [第96～98図 図版25・26・39]

このトレンチは開発区域のはば中央部分に設定した。現況は周辺で行われている発掘調査地から排出される残土置き場となっており、調査区域内には相当量の客土が行われていた。このため掘削に当たっては重機を使用し、調査を実施した。トレンチの規模は $1.5m \times 5.5m$ である。現地表下約70cm～1.8mは客土が行われ、西から東にかけて厚く堆積している。第2層以降は褐色から灰褐色の粘土から粗砂が厚く堆積しており、第2～第4層までは古代の遺物包含層、第5・6層は古墳時代の遺物包含層である。第7層以降は遺物を確認することはできなかったが、粘土がブロック状に含まれ、攪拌を受けたような状況を呈している。

遺構は確認することはできなかった。

遺物は第2～第6層中より土師器片や須恵器片が出土しているが、細片が多い。(1)は第4層中から出土した須恵器の坏身である。底部は回転糸切の痕跡が残り4mm程度の高台を「八」の字状に貼りつける。底径は8.2cmである。



第98図  
金沢坂津遺跡 出土遺物実測図

**第97図 金沢坂津遺跡 第1トレンチ土層実測図**

**第2トレンチ(Tr-2)** [第96図 図版25・26]

このトレンチは開発区域の北側に設定した。調査区内には相当量の客土が行われていたた

め、重機を使用し、調査を実施した。トレンチの規模は1.5m×5.5mである。現地表下約2.8mは客土が行われており、その下層も現代の遺物の堆積が確認された。

このトレンチでは遺構・遺物は検出されなかった。

## 小結

調査の結果、遺跡は当初想定していた範囲より東側に広がることが確認された。また北側については当初の範囲内に収まることを確認することができた。今後は遺跡の範囲を拡大し、周辺で行われる発掘調査に対応する必要がある。

## 第17節 天神山遺跡

天神山遺跡は鳥取平野西端に位置する湖山池東側の標高25mを測る独立丘陵「天神山」に主郭を置く天神山城とその周辺一帯に広がる遺跡である。天神山城は、15世紀後半から16世紀前半に因幡守護山名氏が守護所とした場所で天神山周囲にも関連する遺構が存在することが知られている。また湖山池周辺には、鳥取市の縄文時代を代表とする桂見遺跡、県内最大級の四隅突出型墳丘墓である西桂見墳丘墓、国史跡の布勢古墳、鳥取市史跡大熊段1号墳・2号墳が所在するなど鳥取市でも有数の遺跡が所在している。

今回の調査は、平成24年度から卯山周辺で行われている公共下水道整備に伴い実施したもので、県道鳥取空港・布勢線に接続する市道部分で調査を実施した。調査は既存道路部分で行ったため、原因者の協力のもとに調査を行った。



第99図 天神山遺跡 調査トレンチ位置図

### 第1トレンチ(Tr-1) [第99~101図 図版26・39・40]

第1トレンチは天神山城南側の市道湖南南38号線と市道桂見布勢1号線交差点の南側約25m付近に設定した調査区で1.5m×1.5mである。地表面の標高は約3.3mである。

第1層はアスファルト及び基礎碎石を含む表土部分である。第2層はよく縮まる明褐色シルトが厚く堆積し、第3層は暗褐色シルト、第4層は黒褐色シルト、第5層は黒褐色シルト、第6層は暗褐色シル

トが堆積している。第4層から第6層は遺物包含層である。

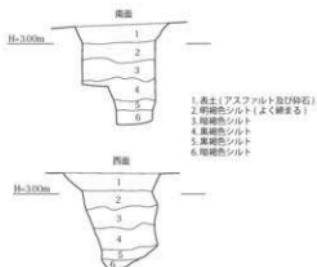
(1)は直口壺の口縁部で、口径の復元径は10.4cmである。(2)は内外面とも赤色塗彩された壺の口縁部である。端部は刻み目及び凹線を施した後、円形の浮文を施す。口径の復元径は14.2cmである。

遺構は検出できなかった。

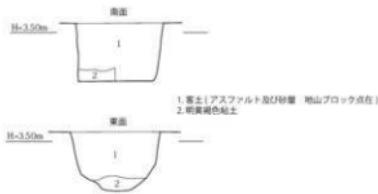
### 第2トレンチ(Tr-2) [第99・100図 図版26]

第2トレンチは第1トレンチの南側35mに設定した調査区で1.5m×1.5mである。地表面の標高は約3.7mである。

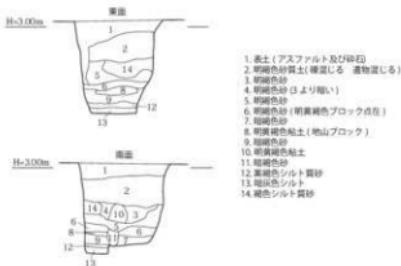
アスファルトを除去すると攪乱を受けた層が堆積しており、その下は明黄褐色の地山である。遺構、遺物を検出することはできなかった。



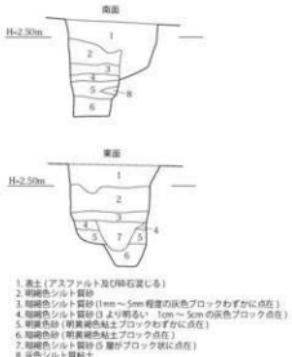
第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ



第4トレンチ

0 (1:80) 2m

第100図 天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ土層図



第101図 天神山遺跡 出土遺物実測図

### 第3トレンチ(Tr-3) [第99・100図 図版26]

第2トレンチの南側約65mに設定した調査区で $1.5m \times 1.5m$ である。地表面の標高は約3.1mである。トレンチの東側には水道管が敷設されており、攪乱を受けている。第1層はアスファルト及び基礎碎石を含む表土部分である。第2層は遺物を含む明褐色砂質土が厚く堆積している。第3、4、10、14層は第5層にブロック状に含まれる層である。第6層は地山ブロックを含む明褐色砂層である。第7層は暗褐色砂層が $15cm$ 程度堆積している。第8層は地山である明黄褐色の粘土ブロックである。第11層は第7層を掘り込むピットの埋土である。第12層は黒褐色シルトが薄く堆積し、第13層は暗灰色シルト質砂層が堆積している。

第2層中から土師器片が出土しているが、二次的な堆積状況を呈している。その他の層から遺物は出土していない。遺構は第5層下面から掘り込むピットを検出しており、深さは $25cm$ を測る。

### 第4トレンチ(Tr-4) [第99・100図 図版26]

第3トレンチの南側約55mに設定した調査区で $1.5m \times 1.5m$ である。地表面の標高は約2.9mである。トレンチの西側には側溝が敷設されており、その際に攪乱を受けている。第2層は遺物をわずかに含む明褐色シルト質砂層が厚く堆積している。第3層は $1mm \sim 5mm$ 程度の灰色粘土ブロックがわずかに含まれる暗褐色シルト質砂層で層厚は約 $17cm$ である。第4層は暗褐色シルト質砂層、第5・6層は地山ブロックを含む砂層が堆積している。第7層は土坑状遺構の埋土である。第8層は第5層中にブロック状に含まれる灰色シルト質粘土である。遺物は第2層中より土師器細片が出土している。その他の層からは遺物は出土していない。遺構は第3層下面から掘り込まれる土坑状の掘り込みを確認し、幅 $80cm$ 、深さ $50cm$ を測る。遺物は出土していない。

## 小結

今回の調査ではこれまで未調査であった卯山西側周辺に調査を実施することができた。第1トレンチでは低湿地のような土壤から弥生時代後期前半や古墳時代前期の土器を確認することができたが、溝などの遺構の埋土の可能性も否定できない。今回は調査区が狭小であり、全容を把握することはできなかったが、今後遺跡の広がりを考える上では重要なトレンチとなったと考えられる。またその他のトレンチでは時期は判然としないもののピットや土坑状の落ち込みを検出するなど、これまでにない新たな知見を得ることができた。今後も周辺の開発には注意を払いながら、天神山遺跡の範囲や卯山との関係を検討していく必要があろう。

## 第18節 岩吉遺跡

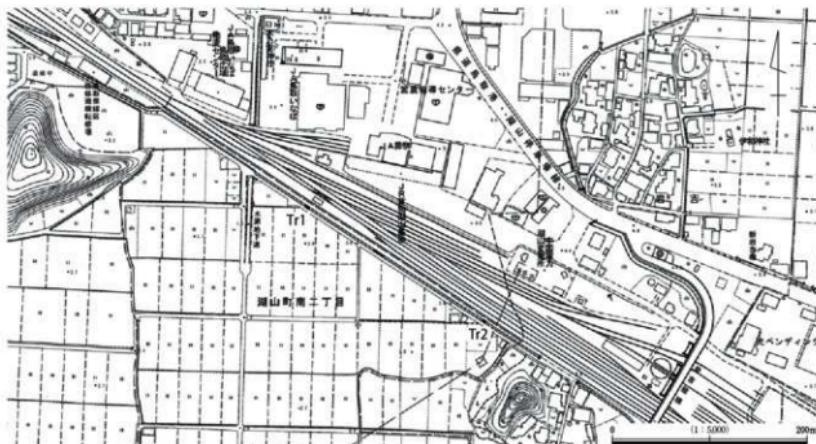
いわよし  
岩吉遺跡は千代川左岸に広がる鳥取平野西側部分のほぼ中央部に位置し、東西約 $0.8km$ 、南北 $1.0km$ 前後と非常に広範囲にわたる遺跡である。遺跡の中心部分と考えられている現在の岩吉集落や伊和神社境内を除けば周辺は水田地帯から住宅街や商業施設が立ち並ぶ街へと変貌を遂げており、それらの開発に伴う発掘調査を数々にわたり行われている。中でも1995年に行われた発掘調査では墨書き土器や木簡類が大量に出土しており、鳥取平野の中でも非常に重要な遺跡である。

今回の調査は農業関連事業に伴って実施した試掘調査である。既往調査のほとんどがJR山陰本線の北側であるが、今回の調査はJR山陰線の南側における調査である。調査は既存水路内で実施するもので、原因者の協力のもとに調査を実施した。また調査区がJR山陰本線の隣接地であり、調査に当たっては保安員を配置した。

### 第1トレンチ(Tr-1) [第102・103図 図版27]

第1トレンチは転倒ゲート設置部分に設定し、重機により既存水路部分のコンクリートを除去したのち、重機及び人力で掘削を行った。調査区は $3.5m \times 1.3m$ である。

第1層は水路部分の基礎碎石を含む砂層である。第2層～第4層は灰褐色～灰色粘土層が堆積し、第



第102図 岩吉遺跡 調査トレンチ位置図

5層は植物質を含む黒褐色粘土層、第6層は炭化物を含む灰色粘土層である。第6層には炭化物を含むものの、全体的に安定した堆積状況を呈し、攪拌等を受けた状況を見ることはできなかった。

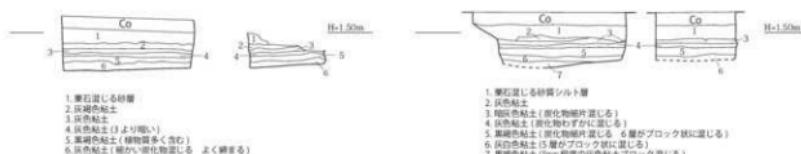
各層から遺物及び遺構を検出することはできなかった。

#### 第2トレンチ(Tr-2) [第102・103図 図版27]

第2トレンチは第1トレンチ南東側約200m付近に設置される転倒ゲート部分に設定し、調査を実施した。第1トレンチと同様に重機を使用し掘削を行った。調査区は3.5m×1.3mである。

第1層は水路部分の基礎碎石を含む砂質シルト層である。第2層は10cm程度の灰色粘土層である。第3層は炭化物の細片が混じる暗灰色粘土層、第4層はわずかに炭化物を含む灰色粘土層、第5層は炭化物を含む黒褐色粘土層、第6層は灰白色粘土層、第7層は黒褐色粘土層である。第5、6層は上下の層がブロック状に含まれることから攪拌を受けたような状況であり、水田層の可能性が高い。

各層から遺物及び遺構を検出することはできなかった。



第1トレンチ

第2トレンチ

0 1:80 2m

第103図 岩吉遺跡 第1・第2トレンチ土層図

#### 小結

今回の調査ではいずれのトレンチでも遺構、遺物を検出することはできなかった。しかし第2トレンチでは攪拌を受けたような状況が見受けられることから、調査地周辺には水田が広がっていた可能性も考えられる。今後周辺で行われる開発には注意する必要がある。

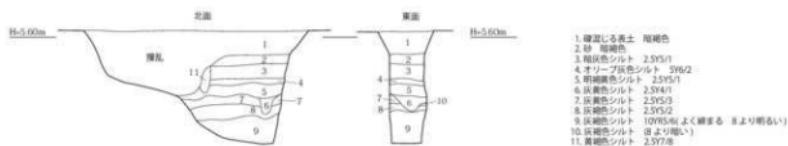
## 第19節 古海遺跡

古海遺跡は、千代川左岸の微高地上に所在する古海集落周辺に展開する。1979年に県道停車場布勢線改良工事に伴い発掘調査が行われ、縄文時代から中世にかけて土坑や溝状遺構、掘立柱建物跡などが確認されている。周辺には縄文時代から中世の複合遺跡である山ヶ鼻遺跡、大規模な護岸施設が確認された本高弓ノ木遺跡が所在する。また西側の丘陵上には山陰地方最古級の前方後円墳である本高14号墳を含む本高古墳群、県指定史跡山ヶ鼻古墳を含む宮谷古墳群、古海古墳群が展開し、北側の独立丘陵には鎮守の森として国の天然記念物に指定されている大野見宿命神社社叢が広がっている。

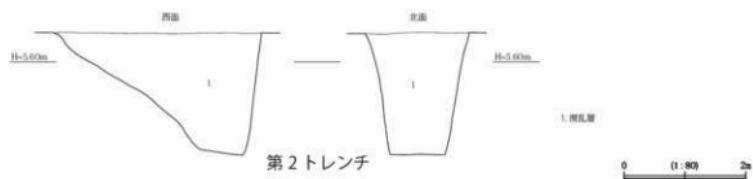
今回の調査は店舗建設設計に伴い実施したもので、2箇所のトレーニングを設定した。なお、以前調査地はガソリンスタンドが建てられていた場所である。調査に当たってはガソリンスタンド建設の際の客土が考えられたため、原因者の協力を得て調査を行った。



第104図 古海遺跡 調査トレーニング位置図



第1トレーニング



第105図 古海遺跡 第1・第2トレーニング土層図

### 第1トレンチ(Tr-1) [第104・105図 図版27]

第1トレンチは開発区域の北西端に1.0m×3.6mの規模で設定し、掘削を行った。第1・2層は造成時の客土で50cm程度行われている。第3層が旧表土、第5層下面から第7・8層を掘り込むピット状の遺構を検出している。

遺物はいずれの層からも出土していない。

### 第2トレンチ(Tr-2) [第104・105図 図版27]

第2トレンチは開発区域の南側中央部分に3.0m×8.0mの規模で設定し、掘削を行った。この場所は以前ガソリンスタンドの店舗部分が建設されていた部分で、現地表下約2.0mまで掘削を行ったが、コンクリート片などの現代のものが大量に含まれており、著しい擾乱を受けていることが確認された。遺構・遺物は検出できなかった。

#### 小結

今回の調査は店舗建設設計画に伴い実施したもので、トレンチを2箇所設定し、埋蔵文化財の有無を確認したが、客土や著しい擾乱を受けていることが確認できた。また第1トレンチでは時期不明ながらピットを確認していることから周辺で開発が行われる際には注意を払う必要があろう。

### 第20節 青谷上寺地遺跡

青谷上寺地遺跡は、JR青谷駅の南側の平野部に広がる集落跡である。遺跡周辺はかつて潟湖があり、その西側のほとりに遺跡が存在していたことが推定されている。平成11年度から一般国道9号青谷・羽合道路の改築工事及び一般県道青谷停車場井手線の整備事業に伴い発掘調査が行われ、多種多様で極めて保存状態の良い出土遺物等から「地下の弥生博物館」とも称され、平成20年3月28日に国史跡に指定されている。北西側の丘陵上には吉川古墳群、南側の丘陵上には露谷古墳群などの古墳群が所在している。

今回の調査は遺跡隣接地で不動産売買の計画が検討され、遺跡の範囲を確認するために実施したもので、事業計画区域内に3箇所のボーリング調査を行った。土壤採取にあたっては機械ボーリングで実施し、使用した機械は土壤汚染調査専用機械であり、振動と回転にて高精度なサンプリングを可能としている。また通常のボーリングとは違い、掘削時に水を使用しないため、汚染物質等を洗い流さずサンプリングができるメリットがある。



第106図 青谷上寺地遺跡 調査トレンチ位置図

調査地点はJR山陰本線に並行するように設定し、西側から番号を振った。サンプルは $\phi$ 86mm、深さGL-6mで行った。

#### 第1トレンチ(Tr-1) [第106図]

事業区域内の西側に設定した調査区である。GL-2.0m付近まで堆積している第1層及び第2層はアスファルト及びコンクリート片、砂を主体とする盛土層である。第3層以下はシルト層が厚く堆積している。GL-2.4mから2.8m付近はデルタの堆積の様相を呈す。GL-5m付近には海ニナが混じる。

#### 第2トレンチ(Tr-2) [第106図]

Tr-1の東側約90m付近に設定した調査区である。GL-3.0m付近まで堆積している第1層はアスファルト及びコンクリート片からなる盛土層である。GL-3.0m以下は均一なシルト層が堆積している。Tr-1と同様にデルタの堆積の様相を呈し、シルトは海性粘土である。また海性粘土の中には硫化物を確認することができる。

#### 第3トレンチ(Tr-3) [第106図]

事業区域内の東側に設定した調査区である。GL-2.0m付近まで堆積している第1層はアスファルト及びコンクリート片、真砂土からなる盛土層である。GL-2.0mからは均一なシルト、シルト混じり砂層、均一なシルト層が堆積している。これらはTr-1と同様にデルタの堆積の様相を呈す。またシルト層は海性粘土と考えられる。

#### 小結

調査の結果、GL-2.0m付近までは盛土層が確認され、それ以降については海性粘土の堆積やデルタフロントの堆積が認められることから、青谷上寺地遺跡の範囲が事業計画区域まで広がらないことが確認できた。なお、周辺の状況についてはまだ不明な点が多くあり、今後の開発事業等に際しては注意を要する地域といえる。

# 第3章 自然科学分析

## 大柄遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

大柄遺跡は、鳥取県鳥取市大柄地内の丘陵裾部に位置する。測定対象試料は、木片1点である(表1)。

### 2 測定の意義

遺跡の年代を確認する。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  ( $1\text{M}$ ) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、 $0.001\text{M}$ から $1\text{M}$ まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が $1\text{M}$ に達した時には「AAA」、 $1\text{M}$ 未満の場合は「Aaa」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素( $\text{CO}_2$ )を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 $1\text{mm}$ のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$ 濃度( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暴年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暴年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応

する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料No.1の $^{14}\text{C}$ 年代は  $42990 \pm 380$ yrBP、曆年較正年代 ( $1\sigma$ ) は  $44612 \sim 43817$ cal BC の範囲で示される。

試料の炭素含有率は50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

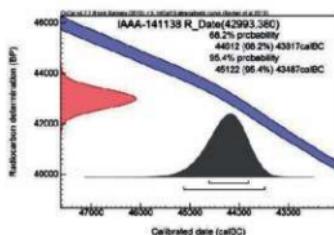
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-141138	No1	大柄遺跡	木片	AAA	$-22.30 \pm 0.46$	$42,990 \pm 380$ $0.47 \pm 0.02$

[# 6795]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-141138	$42,950 \pm 380$	$0.48 \pm 0.02$	$42,993 \pm 380$	$44612\text{calBC} - 43817\text{calBC}$ (68.2%)	$45122\text{calBC} - 43487\text{calBC}$ (95.4%)

[参考値]



【図版】曆年較正年代グラフ (参考)

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887  
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



# 写 真 図 版





乙亥正屋敷廻遺跡 遠景(南東から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ完掘状況(南から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ土層断面(西から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ土坑(SK01)断面(西から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ土器検出状況(東から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ機織具検出状況(東から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ板梯子検出状況(南から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第4トレンチ桃の実が詰まった壺

図版2



乙亥正屋敷廻遺跡 第5トレンチ完掘状況(南から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第5トレンチ土層断面(西から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第6トレンチ完掘状況(西から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第6トレンチ土層断面(南から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第7トレンチ完掘状況(東から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第7トレンチ土層断面(南から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第7トレンチ土坑(SX01)検出状況(西から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第8トレンチ完掘状況(北東から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第8トレンチ土層断面(南東から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第9トレンチ



乙亥正屋敷廻遺跡 第9トレンチ土層



乙亥正屋敷廻遺跡 第10トレンチ



乙亥正屋敷廻遺跡 第10トレンチ土層



大柄遺跡 遠景(南東から)



大柄遺跡 第1トレンチ土層断面(南東から)



大柄遺跡 第1トレンチ完掘状況(北東から)

図版4



大柄遺跡 第1トレンチ土層断面(南西から)



大柄遺跡 第1トレンチSD01検出状況(南から)



大柄遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(南西から)



大柄遺跡 第2トレンチSD01～04検出状況(南東から)



大柄遺跡 第3トレンチ完掘状況(北西から)



大柄遺跡 第3トレンチ土層断面(北から)



大柄遺跡 第4トレンチ土層断面(南から)



大柄遺跡 第4トレンチ完掘状況(西から)



大柄遺跡 第4トレンチ完掘状況(南東から)



大柄遺跡 第5トレンチ完掘状況(南東から)



大柄遺跡 第5トレンチ土層断面(北東から)



大柄遺跡 第5トレンチSP01完掘状況(北東から)



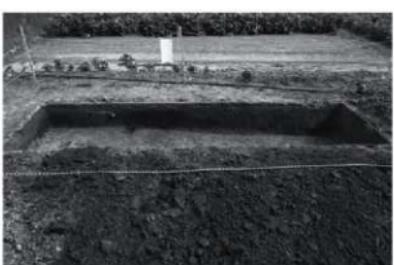
大柄遺跡 第5トレンチSK01完掘状況(南西から)



大柄遺跡 第5トレンチSK02完掘状況(北西から)



大柄遺跡 第6トレンチ完掘状況(南西から)



大柄遺跡 第6トレンチ土層断面(北西から)

図版6



大柄遺跡 第7トレンチ完掘状況(南から)



大柄遺跡 第7トレンチ土層断面(東から)



大柄遺跡 第8トレンチ完掘状況(北西から)



大柄遺跡 第8トレンチ土層断面(北東から)



大柄遺跡 第8トレンチ木製品検出状況(北東から)



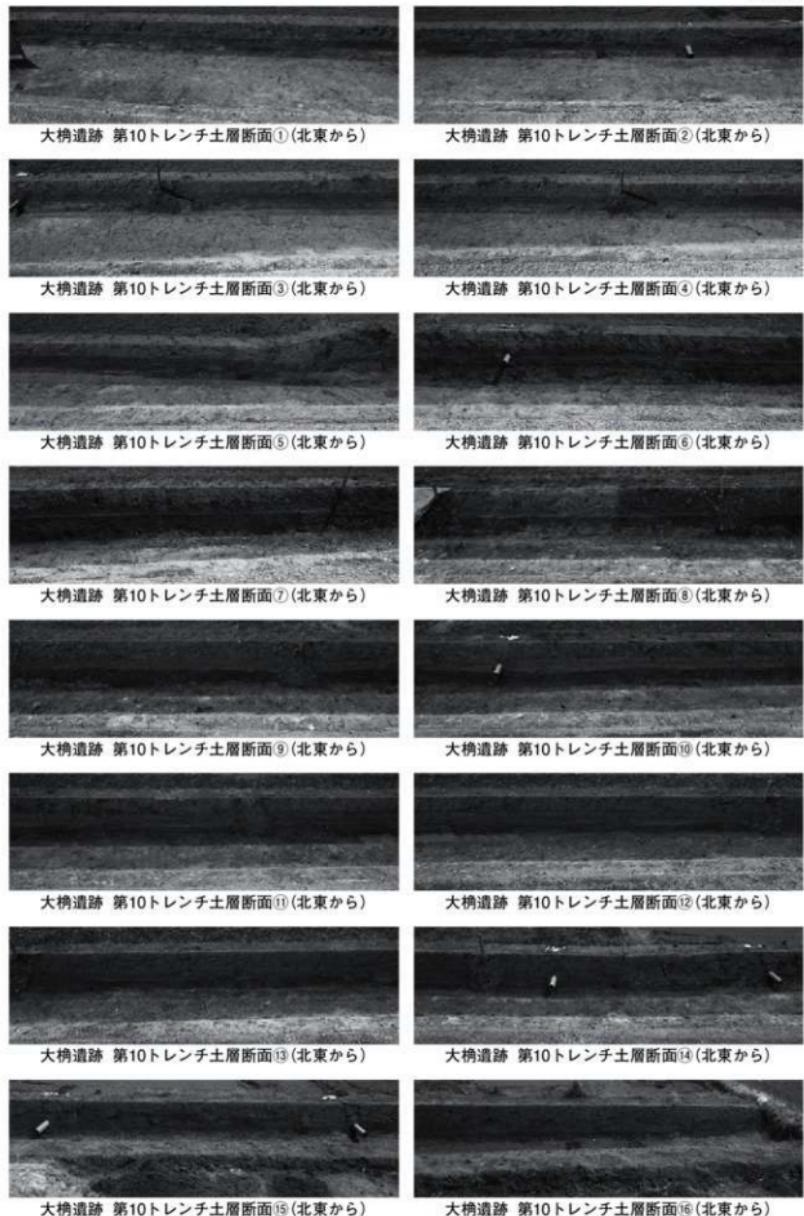
大柄遺跡 第9トレンチ完掘状況(北西から)



大柄遺跡 第9トレンチ土層断面(南西から)



大柄遺跡 第10トレンチ完掘状況(南東から)



図版8



大柄遺跡 第10トレンチ土坑検出状況①(北東から)



大柄遺跡 第10トレンチ土坑検出状況②(北東から)



大柄遺跡 第10トレンチ溝状遺構検出状況(北東から)



良田1号墳 遠景(南から)



良田1号墳 第1トレンチ掘下げ(南西から)



良田1号墳 第1トレンチ北壁断面(南から)



良田1号墳 第1トレンチ供献土器出土状況(南東から)



良田所在遺跡 遠景(北から)



良田所在遺跡 第1トレンチ掘下げ(北東から)



良田所在遺跡 第1トレンチ土層断面(東から)



良田所在遺跡 第2トレンチ掘下げ(北東から)



良田所在遺跡 第2トレンチ北西壁断面(東から)



良田所在遺跡 第3トレンチ掘下げ(南西から)



良田所在遺跡 第3トレンチ南東壁断面(西から)



高住宮ノ谷古墳群・遺跡 遠景(東から)



高住宮ノ谷古墳群 第6トレンチ完掘状況(南東から)



高住宮ノ谷古墳群 第6トレンチ土層断面(南西から)

図版 10



高住宮ノ谷古墳群 第7トレンチ完掘状況(北西から)



高住宮ノ谷古墳群 第7トレンチ土層断面(南西から)



高住宮ノ谷古墳群 第8トレンチ完掘状況(東から)



高住宮ノ谷古墳群 第8トレンチ土層断面(南から)



高住宮ノ谷古墳群 第9トレンチ完掘状況(北東から)



高住宮ノ谷古墳群 第9トレンチ土層断面(北西から)



高住宮ノ谷遺跡 第4トレンチ完掘状況(北東から)



高住宮ノ谷遺跡 第4トレンチ土層断面(北西から)



高住宮ノ谷遺跡 第4トレンチ溝状遺構検出状況(北西から)



高住宮ノ谷遺跡 第5トレンチ完掘状況(北から)



高住宮ノ谷遺跡 第5トレンチ土層断面(西から)



高住宮ノ谷遺跡 第5トレンチ(SJ01)検出状況(南から)



高住宮ノ谷遺跡 第6トレンチ完掘状況(北西から)



高住宮ノ谷遺跡 第6トレンチ土層断面(南東から)



高住宮ノ谷遺跡 第6トレンチ(SP01)検出状況(北東から)



高住宮ノ谷遺跡 第6トレンチ(SJ01)検出状況(北東から)

図版 12



高住宮ノ谷遺跡 第7トレンチ完掘状況(北西から)



高住宮ノ谷遺跡 第7トレンチ土層断面(南西から)



高住宮ノ谷遺跡 第8トレンチ完掘状況(南東から)



高住宮ノ谷遺跡 第8トレンチ土層断面(南西から)



高住宮ノ谷遺跡 第9トレンチ完掘状況(北西から)



高住宮ノ谷遺跡 第9トレンチ土層断面(南西から)



内海中所在遺跡 調査地遠景(北から)



内海中所在遺跡 第3トレンチ掘下げ状況(北から)



内海中所在遺跡 第3トレンチ西壁断面(東から)



桂見遺跡 遠景(東から)



桂見遺跡 第1トレンチ(北から)



秋里遺跡 遠景(南西から)



秋里遺跡 第1トレンチ掘り下げ(南から)



秋里遺跡 第1トレンチ東壁断面(北西から)



秋里遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)



秋里遺跡 第2トレンチ土層断面(南から)

図版 14



秋里遺跡 第3トレンチ完掘状況(南から)



秋里遺跡 第3トレンチ土層断面(西から)



秋里遺跡 第4トレンチ完掘状況(南から)



秋里遺跡 第4トレンチ土層断面(東から)



秋里遺跡 第4トレンチ深掘り土層断面(南から)



秋里遺跡 第5トレンチ完掘状況(西から)



秋里遺跡 第5トレンチ土層断面(南から)



秋里遺跡 第6トレンチ完掘状況(南から)



秋里遺跡 第6トレンチ土層断面(南から)



秋里遺跡 第6トレンチ溝状遺構(SD01~03)検出状況(南から)



秋里遺跡 第6トレンチ溝状遺構(SD04)検出状況(南から)



秋里遺跡 第6トレンチ遺物検出状況(北から)



秋里遺跡 第6トレンチ深掘り土層断面(北から)



秋里遺跡 第7トレンチ完掘状況(西から)



秋里遺跡 第7トレンチ土層断面(南から)



秋里遺跡 第7トレンチ舟形検出状況(南から)

図版 16



秋里遺跡 第7トレンチ舟縁を留めた舟釘(東から)



秋里遺跡 第7トレンチ舟の重なり部分(北から)



秋里遺跡 第7トレンチ舟の立て杭(南から)



秋里遺跡 第7トレンチ溝状構造(SD04・05)検出状況(北から)



秋里遺跡 第7トレンチ弥生土器検出状況(北から)



下坂本清合遺跡 遠景(東から)



下坂本清合遺跡 第14トレンチ(南東から)



下坂本清合遺跡 第14トレンチ土層断面(南西から)



下坂本清合遺跡 第15トレンチ完掘状況(西から)



下坂本清合遺跡 第15トレンチ土層断面(南から)



下坂本清合遺跡 第15トレンチ壁際溝検出状況(南から)



下坂本清合遺跡 第15トレンチ弥生土器検出状況



下坂本清合遺跡 第15トレンチ高环検出状況



下坂本清合遺跡 第16トレンチ完掘状況(南東から)



下坂本清合遺跡 第16トレンチ土層断面(北東から)



下坂本清合遺跡 第17トレンチ完掘状況(北東から)

図版 18



下坂本清合遺跡 第17トレンチ土層断面(南東から)



下坂本清合遺跡 第18・19トレンチ完掘状況(東から)



下坂本清合遺跡 第18トレンチ土層断面(南から)



下坂本清合遺跡 第19トレンチ土層断面(南から)



上原古墳群 遠景(東から)



上原古墳群 第1トレンチ完掘状況(西から)



上原古墳群 第1トレンチ土層断面(南から)



上原古墳群 第2トレンチ完掘状況(南から)



上原古墳群 第2トレンチ土層断面(東から)



上原古墳群 第2トレンチ埋葬施設検出状況(東から)



上原古墳群 第2トレンチ埋葬施設(南から)



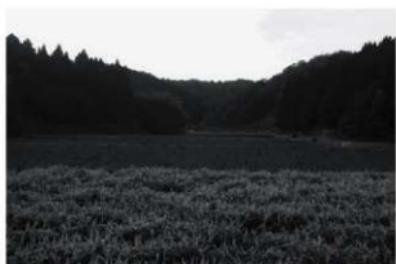
上原古墳群 第2トレンチ炭化物の痕跡が残る埋葬施設



上原古墳群 第3トレンチ完掘状況(東から)



上原古墳群 第3トレンチ土層断面(北から)



日光長谷遺跡 遠景(北から)



日光長谷遺跡 第1トレンチ完掘状況(北東から)

図版 20



日光長谷遺跡 第1トレンチ土層断面(北西から)



日光長谷遺跡 第2トレンチ完掘状況(南東から)



日光長谷遺跡 第2トレンチ土層断面(南西から)



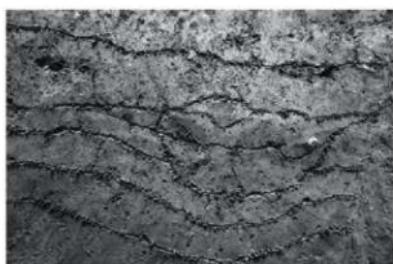
日光長谷遺跡 第3トレンチ完掘状況(南東から)



日光長谷遺跡 第3トレンチ土層断面(南西から)



日光長谷遺跡 第3トレンチ住居壁断面(北西から)



日光長谷遺跡 第3トレンチ焼土面検出状況(南西から)



日光長谷遺跡 第4トレンチ完掘状況(東から)



日光長谷遺跡 第4トレンチ土層断面(南から)



日光長谷遺跡 第5トレンチ完掘状況(南東から)



日光長谷遺跡 第5トレンチ土層断面(南西から)



日光長谷遺跡 第6トレンチ完掘状況(北西から)



日光長谷遺跡 第6トレンチ土層断面(北東から)



日光長谷遺跡 第6トレンチ遺物検出状況



日光長谷遺跡 第7トレンチ完掘状況(北西から)



日光長谷遺跡 第7トレンチ土層断面(西から)

図版 22



日光長谷遺跡 第8トレンチ完掘状況(北から)



日光長谷遺跡 第8トレンチ土層断面(東から)



日光長谷遺跡 第9トレンチ完掘状況(南東から)



日光長谷遺跡 第9トレンチ土層断面(南西から)



日光長谷遺跡 第9トレンチ高环検出状況(南東から)



山手古墳群 遠景(南西から)



山手古墳群 第6トレンチ完掘状況(南から)



山手古墳群 第6トレンチ土層断面(東から)



山手古墳群 第7トレンチ完掘状況(東から)



山手古墳群 第7トレンチ土層断面(南から)



山手古墳群 第8トレンチ完掘状況(南から)



山手古墳群 第8トレンチ(拡張区)完掘状況(西から)



山手古墳群 第8トレンチ土層断面(西から)



山手古墳群 第8トレンチ土層断面(拡張区)(南から)



山手古墳群 第9トレンチ完掘状況(北から)



山手古墳群 第9トレンチ土層断面(東から)

図版 24



山手古墳群 第10トレンチ完掘状況(南西から)



山手古墳群 第10トレンチ土層断面(南東から)



山手古墳群 第11トレンチ完掘状況(南西から)



山手古墳群 第11トレンチ土層断面(南東から)



山手古墳群 第11トレンチ墳端部土層断面(南東から)



古郡家所在遺跡 遠景(東北東から)



古郡家所在遺跡 第1トレンチ掘下げ状況(南から)



古郡家所在遺跡 第1トレンチ東壁断面(南西から)



古郡家所在遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(南から)



古郡家所在遺跡 第2トレンチ半掘状況(西から)



古郡家所在遺跡 第2トレンチ東側拡張部掘下げ状況(西から)



大井所在遺跡 遠景国道482号から調査地を望む(北東から)



大井所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



大井所在遺跡 第1トレンチ西壁土層堆積状況(東から)



大井所在遺跡 第1トレンチ遺物出土状況(坏)(北西から)



金沢坂津遺跡 第1トレンチ土層断面(南西から)

図版 26



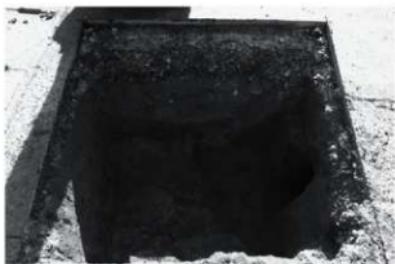
金沢坂津遺跡 第2トレンチ土層断面(南西から)



天神山遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



天神山遺跡 第1トレンチ土層断面(北から)



天神山遺跡 第2トレンチ完掘状況(北から)



天神山遺跡 第3トレンチ完掘状況(北から)



天神山遺跡 第3トレンチ土層断面(西から)



天神山遺跡 第4トレンチ完掘状況(北から)



天神山遺跡 第4トレンチ土層断面(西から)



岩吉遺跡 第1トレンチ完掘状況(北西から)



岩吉遺跡 第1トレンチ北側土層断面(南西から)



岩吉遺跡 第2トレンチ完掘状況(北西から)



岩吉遺跡 第2トレンチ北側土層断面(南西から)



古海遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)



古海遺跡 第1トレンチ北側土層断面(南から)



古海遺跡 第2トレンチ完掘状況(南から)

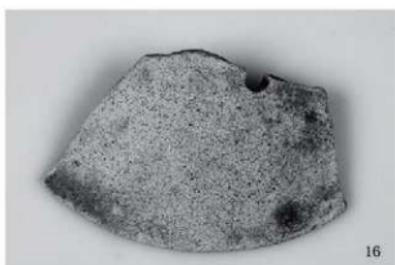


古海遺跡 第2トレンチ西側土層断面(東から)

圖版 28



乙亥正屋數廡遺跡 出土遺物(1)



乙亥正屋敷遺跡出土遺物(2)

圖版 30



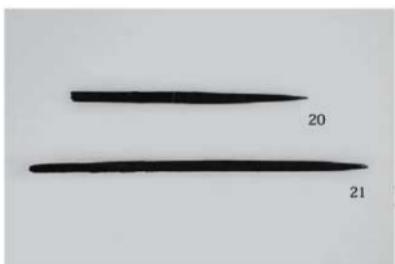
17



18



19



20

21

乙亥正屋數廻遺跡 出土遺物(3)



1



2



3



4

大柵遺跡 出土遺物(1)



大柄遺跡 出土遺物(2)

図版 32



13



14



15



16

大柄遺跡 出土遺物(3)



1



3

良田 1号墳 出土遺物

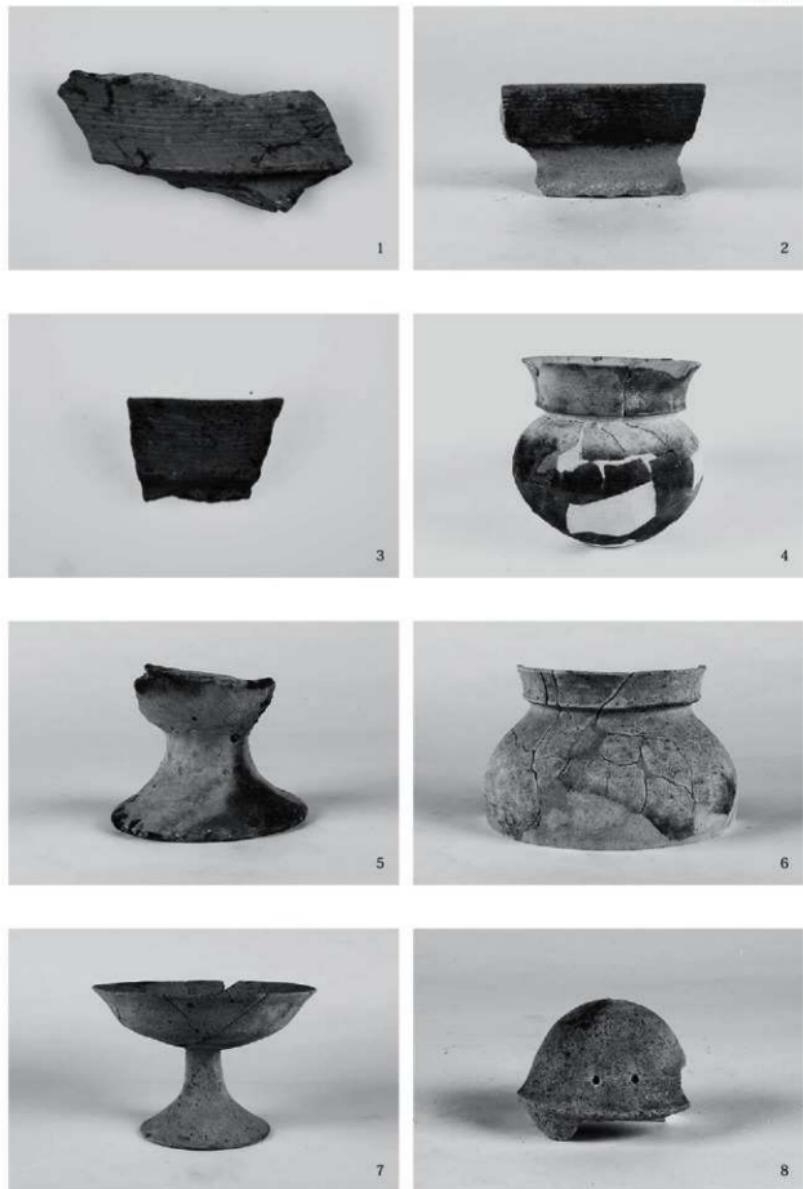


1



2

高住宮ノ谷遺跡 出土遺物



秋里遺跡 出土遺物(1)

図版 34



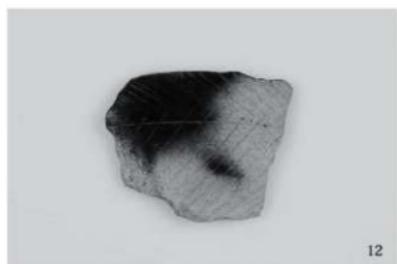
9



10



11



12



13



14



15



16

秋里遺跡 出土遺物(2)



17



18



19



20



21



22



23



24

秋里遺跡 出土遺物(3)

図版 36



下坂本清合遺跡 出土遺物(1)



下坂本清合遺跡 出土遺物(2)



日光長谷遺跡 出土遺物(1)



図版 38



8



9



10



11



12



13



14



15

日光長谷遺跡 出土遺物(2)



日光長谷遺跡 出土遺物(3)



古郡家所在遺跡 出土遺物



大井所在遺跡 出土遺物



金沢坂津遺跡 出土遺物

天神山遺跡 出土遺物(1)

図版 40



天神山遺跡 出土遺物(2)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせい 27 (2015) ねんど とっとり しない いせきはつくつ ちょうき かいよう ほうこくしょ						
書名	平成 27 (2015) 年度 鳥取市内道路発掘調査概要報告書						
圖書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	加川 崇 山田 宏実 前田 均 野崎欽五 谷口恭子 谷岡篤一 神谷伊鶴						
編集機関	鳥取市教育委員会						
所在地	〒680-8571 鳥取市上魚町39番地						
発行年月日	2016年 3月 30日						
所収道路名	所在地	コード 市町村 道路 番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
乙原敷道跡	鳥取市鹿野町乙原正	31201 16-0244	35° 29' 52"	134° 3' 0"	20131111~20131211 20140527~20140616	77.32	道路事業
大柄通	鳥取市 大柄	31201 1-0261	35° 29' 40"	134° 11' 17"	20131118~20131219 20140422~20140513 20140805~20140919	480.0	道路事業
良田1号線	鳥取市 良田	31201 1-0129	35° 29' 42"	134° 9' 6"	20131211~20131217	4.00	急傾斜事業
良田所在道路	鳥取市 良田	31201 1-0167	35° 29' 31"	134° 9' 10"	20131216~20140124 20140224~20140305	66.00	道路事業
高住宮ノ谷古墳群	鳥取市 高住	31201	35° 29' 40"	134° 9' 28"	20130225~20130325	38.50	道路事業
高住宮ノ谷通	鳥取市 高住	31201 1-0426	35° 29' 40"	134° 9' 30"	20130228~20130328	49.00	道路事業
内海中所通	鳥取市 内海中	31201	35° 30' 7"	134° 6' 13"	20130311~20130319	40.00	道路事業
桂見通	鳥取市 桂見	31201 1-0221	35° 30' 2"	134° 10' 17"	20130320~20130324	4.00	携帯電話基地局整備
秋里通	鳥取市 秋里	31201 2-0008	35° 31' 21"	134° 12' 42"	20140409~20140411 20141202~20141210 20150202~20150205 20150220~20150305	462.0	住宅及び病院建設
下坂本清合通	鳥取市 気高町下坂本	31201 15-0585	35° 30' 5"	134° 4' 13"	20140616~20140718 20150113	64.50	道路事業
上原古墳	鳥取市 気高町上原	31201	35° 28' 7"	134° 2' 15"	20140718~20140805	20.00	砂防堰堤建設
日光長谷通	鳥取市 気高町日光	31201 15-0006	35° 30' 0"	134° 3' 44"	20140925~20150114	97.50	道路事業
山手古墳	鳥取市 河原町山手	31201	35° 23' 16"	134° 12' 48"	20141212~20141224	46.50	可燃物処理施設建設
吉郡家所在通	鳥取市 吉郡家	31201	35° 26' 51"	134° 13' 55"	20150316~20150323	38.90	墓地造成
大井所通	鳥取市 佐治町大井	31201	35° 20' 1"	134° 8' 48"	20150317~20150320	14.00	道路事業
金沢坂津瀬	鳥取市 金沢	31201 1-0167	35° 29' 46"	134° 7' 33"	20140626	16.50	道路事業
天神山通	鳥取市 潟山町	31201 1-0327	35° 30' 24"	134° 10' 33"	20141028~20141031	9.00	下水道整備事業
岩吉通	鳥取市 潟山町	31201 1-0315	35° 30' 41"	134° 11' 25"	20140114	9.10	農業開拓
古海通	鳥取市 古海	31201 2-0012	35° 29' 50"	134° 12' 30"	20131204	27.60	店舗建設
青谷上寺地通	鳥取市 青谷町青谷	31201 18-0082	35° 30' 57"	133° 59' 40"	20140807~20140809	1.00	範囲確認

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
乙亥正屋敷巡遺跡	集落跡・生産施設	弥生～中世	土坑	弥生土器・土師器・須恵器・木製品	試掘調査として実施
大柄遺跡	集落跡	縄文～中世	土坑・溝	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	試掘調査として実施
良田1号墳	古墳	古墳	埋葬施設	須恵器	試掘調査として実施
良田所在遺跡	散布地	弥生～中世	杭列	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器	試掘調査として実施
高住宮ノ谷古墳群					試掘調査として実施
高住宮ノ谷遺跡	集落跡	古墳～中世	溝・土器埋納土坑	土師器・須恵器	試掘調査として実施
内海中所在遺跡					試掘調査として実施
桂見遺跡					試掘調査として実施
秋里遺跡	集落跡	弥生～近世	溝・土留め	弥生土器・土師器・須恵器・舟形	試掘調査として実施
下坂本清合遺跡	集落跡	弥生～古墳	住居	弥生土器・土師器・須恵器・石器	試掘調査として実施
上原古墳群	中世墓	中世	古墓(石積)	須恵器	試掘調査として実施
日光長谷遺跡	集落跡	縄文～平安	住居(古墳時代)	縄文土器・土師器・須恵器	試掘調査として実施
山手古墳群	古墳	古墳	古墳・墓壙	土師器	試掘調査として実施
吉郡家所在遺跡	散布地	古墳～古代	土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦質土器	試掘調査として実施
大井所在遺跡	散布地	古代～中世		土師器・瓦質土器	試掘調査として実施
金沢坂津遺跡	散布地	古墳～古代		土師器・須恵器	試掘調査として実施
天神山遺跡	散布地	弥生～中世	ピット	弥生土器・土師器	試掘調査として実施
岩吉遺跡	集落跡				試掘調査として実施
古海遺跡	散布地		ピット		試掘調査として実施
青谷上寺地遺跡	集落跡				試掘調査として実施

---

平成27年度(2015)年度  
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成28(2016)年3月発行

編集 烏取市教育委員会  
発行 〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地  
TEL (0857) 20-3367

印刷 有限会社螢光社  
〒680-0802 鳥取市青葉町2丁目212番地  
TEL (0857) 22-5565

---

